324
1
114

世界三聖傳

釋迦

大屋德城編著

始

324-1141

帝國圖書館藏

世界三聖傳

釋迦

大屋德城編

大正12.7.6
內交

序

本書詳には「佛陀及び佛陀を中心としたる佛教文學の概觀」と稱し、今略して「釋迦」と題す、其の目的とするところは、佛陀の偉大なる人格を紹介すると共に、佛陀を中心としたる佛教文學の大觀を紹介せんとするに在り。就中、前二章は第一の目的を主として、第二の目的を客とし、後五章は第二の目的を主として、第一の目的を客とし、最後に、餘論一章を附せり。

翻つて、佛教研究の歴史を回顧するに、其の燦んなる、東西の哲學史上、別に、一大系統を成し、古希臘の哲學、及び近世獨逸哲學と拮抗して、優に、特有の地位を保つに足れり、彼の倶舎、唯識の精緻なる、天台、華嚴の雄大なる、密教の深邃なる、Platon, Aristoteles, Kant, Hegel 等諸哲の大組織と相並んで、實に、東西哲學の偉觀たらずんばあらず、從つて、聖典の註疏、論藏の解釋、幾千萬卷なるを知らず、之れを、我が日本佛教史に徴するも、寧樂の三會、王朝の南北兩京の三會に於いて、講經、論議の如何に盛んなりしかを觀ば、思ひ半ばに過ぎん。而して、近世、西歐に於ける佛教研究の勃興に伴ひ、我れに於いても、先進の士、競うて、原本的討究に努

め、梵典の開講、佛蹟の調査、乃至西藏の探險等、着々其の歩を進め、梵語佛典の出版、續藏の刊行、頻々として相踵ぎ、本文批評の聲漸く高からんとす。余輩後進たるもの、生まれて、此の千載一遇の盛時に遇ふ、何の幸か之れに如かん。

然れども、潛に惟れば、是れ知的方面の研究のみ。由來、佛敎は、印度古代の智解脫觀の系統を享けて、發生したるもの、其の智を重んずるや、因つて來るところありと雖も、固、人心の歸依として興りたるを以つて觀れば、佛敎豈知的方面にのみ限られたるものならんや、況んや、幾千載の間、知あり、情ある人生の理想を支配しつゝある事實に徵すれば、佛敎豈情緒的方面を含まざらんや。

佛敎が如何に崇高優美なる美的方面をも包容せるかは東洋の藝術を研究せし人の首肯するところならん。觀よ。印度に於ける Sanchi, Amaravati, Bharhut, Ajanta, 等の諸窣堵婆及び窟殿が、其の建築の樣式に於いて、彫刻の手法に於いて、佛敎美術として、如何に多大の價値を有するかは、東西兩洋の學者の一致するところなり。況んや、健陀羅の佛敎美術が希臘、印度、條支、大食、フィニシヤ等の諸手法を融化して、渾然たる樣式をなせる、于闐、疏勒、高昌等の西域美術、龍門、雲岡

等の石窟が、古代支那美術として、多趣なる內容を有し、三韓、高麗の諸遺作が如何に遒麗なるか、又、我が飛鳥、天平の繪畫、彫刻、平安、鎌倉乃至東山時代の藝術が如何に豐富なるかは、一たび、南都に遊びて、正倉院の御物、法隆寺の壁畫乃至到る處に、古佛像を拜せし人の知るところならん。而して、此れ等の方面は、Fergusson, Cunningham, Burgess, Gruenwedel, Griffiths, Stein等の西人、並に、我が藝術界の諸士に依つて、發揮せられ、又、發揮せられつゝあり。

嗚呼、佛敎の美的方面の偉大なるや、夫れ斯くの如し。而も、尙之れに止まらざるなり。余輩は、大聲疾呼して、佛敎藝術として、更に、佛敎音樂並に佛敎文學の存在を訴へずんばあらず。

佛敎音樂が如何なる程度に發達し、如何なる功果を有せしかは、我が古代音樂史を研究せば、恐らくは、其の美に一驚を喫せん。寧樂朝に於いて、唐樂、高麗樂と共に、天竺、龜茲、林邑、沙陀等の樂傳來し、此れ等は、佛敎敎化の輔助として使用せられ、東大寺大佛の慶讚會を始めとして、諸大寺の法苑に吹奏せられ、進んでは、諸大寺に樂部の設立を觀るに至り、平安朝に及びて益勃興し、法會は樂苑と

化し、宛然たる佛土を眼前に現出するに至れり。加之、此れ等の樂中には、吠陀の古神話を題とせるあり。佛教傳說を料とせるあり。內容、形式倶に佛教音樂の名に背かず。更に、一方には、聲明の傳へらるゝあり。東密一流の聲明、慈覺一流の聲明、下つて、洛外大原の地は聲明の學苑となり、其の講習の熾んなる、諷經の朗讀詠の美、其の精を極め、其の妙を盡し、彼の管絃講の如き、實に、此れ等の諸樂を渾融したる一大樂苑たりしなり。而して、近古、近世の空也念佛、平家琵琶、謠曲、淨瑠璃、說教節等の歌舞、音曲は、實に、源を魚山聲明に汲みて起りしなり。

佛教音樂の美、夫れ斯くの如し。而も、何人か之れを研究し、之れを紹介したる。今や、佛教音樂は、僅に雅樂の一部として、保存せられ、諷經、禮讚として、傳承的に誦せらるゝに過ぎず。嗚呼、林邑樂の將來者、佛徹の芳骨空しく埋もるゝこと此に一千有餘年、圓陀々たる奈良山の青苔徒に厚きを加ふるのみ。豈恨恨に堪へんや。

佛教文學の研究に至りては、荒廢更に甚しきものあり。夫れ佛教文學としては、古印度の民間傳說と融合したる本生說話(社得迦 Jātaka)あり、宗教的物語と

しては、因緣譬喩(阿波陀那、Avadāna)あり、理具(Rig-veda)阿含經(Athrva-veda)等の吠陀神話と混淆したる十數種の佛傳あり。摩訶婆羅多(Mahā-Bharata)羅摩耶那(Rāmāyana)と錯綜したる敍事詩あり。孔雀(Maurya)王家の悲劇を歌ひたる哀詩あり、佛陀の一生を綴りたる讚頌あり。華嚴、法華等の雄渾にして莊重なる大乘經典あり。勝鬘、觀經等の優婉なる聖經あり。大日經、孔雀王經等の深奧なる祕密修多羅あり。詩人としては、阿濕縛窶沙(Aśvaghōcha)あり、摩咥哩制吒(Mātri-keta)あり。聖勇(Ārya sūra)あり。那伽閼剌樹那(Nāgārdjuna)あり。クシヤメンドラ(Kshe-mendra)あり。蘇摩提婆(Somadeva)あり。其の價値に於いて、其の影響に於いて、優に一大系統をなせり。之れを、我が日本文學に觀るも、平家物語の如き、源氏物語の如き、謠曲の如き、夫れ夫れ淨土教文學、禪宗文學、密教文學として、解するにあらずんば、如何にして、其の中心の興趣を會するを得んや。然るに、一方に於いては、中世的僧院思想の隋勢として、固陋なる佛教徒は、此の方面を閑却し、他方に於いては、偏狹なる和學者輩は、其僻見よりして、此れ等を顧みず。今や、無價の寶珠は、徒に重閣に封ぜられ、塵埃十寸、其の腐蝕するに委せつゝあり。又、悲しからず

や。

然るに、學術に熱心なる西人は漸く此の方面を開拓せんとする氣運を示し來れり。即ち Fausboel 氏の巴利本生經を出版するあり。Cowell 氏の下に、其の翻譯の企てらるゝあり。Kern 氏の梵文社得迦摩羅 (Jātakamāla) を出版するあり。Speyer 氏の之れを英譯するあり。其の他、Max, Mueller. Rhys, Davids. 等諸氏の論文を發表するあり。其の研究の大成又遠きにあらざらんとす。嗚呼、異教國の士にして、其の熱心なる、夫れ斯くの如し。我が佛教界の諸士、之れを聞きて、果して、何等の感慨なきを得るか。

余輩は今や一切の教權より解放せられたり。余輩は余輩の道を進まざる可からず。余不敏なりと雖も、聊か此に志し、多年、研鑽蒐集するところ冊を爲し、帙を爲せり。偶山縣氏余に囑するに「釋迦傳」を草せんことを以てす。余謂へらく、普通の佛傳は、世に好著少からず。如かず、異方面の佛傳を描かんにはと。即ち、佛陀の小傳に加ふるに、佛陀を中心とせる佛教文學の數篇を抽出して、本書を爲せり。固より、片々たる一小冊、以つて、識者の前に薦むるに足らざらんことを恐る。

若し、幸に本書にして、擔ふべき名譽ありとせば、唯、佛教文學の紹介に於いて、最初に試みられたる小著としての瑣少の名譽ならんのみ。希くは、大聖の冥護に賴りて、原本的研究に進む日の近からんことを。聊か卷頭に序して、志を言ふ。

明治四十一年十二月八日佛成正覺の日

東京に於いて　大屋德城識

凡例

一本書は通俗を旨とし、經典の譯出に就きても、必ずしも、語句に拘泥せず、大意を傳ふるを以つて目的とす。

一第一章第三節は、佛陀時代の思想界の概觀を、極めて簡單に傳へんとて記しゝに過ぎず。讀者、其の太簡なるを咎むるなかれ。

一本書は、前後照應して、完全なる佛傳たらんことを期せり。而して、特に「佛陀」なる一節を設けたるは、概念の統一を圖らんが爲なり。

一本書出すところの本生說話の、多數は昔噺風に譯出せり。是れ、本生說話は、民間傳說に負ふところ多きを以つてなり。

一本書は長年月の間に、記したるものなるを以つて、前後、體裁一致せざるところなきにあらず。而も、著者今劇職にありて、悉く、訂正すること能はず。讀者之れを諒せよ。

一本書は讀者の參考にもとて、二三の附註を章末、節末に記せり。

一本書を草するに當りて、東西の先輩に負ふところ甚だ多し。而も、一々典據を

明記せざるは、本書の性質が通俗を目的とする爲なり。

一本書を草するに當りて、先輩諸氏、同好諸君、或は典籍を貸與せられ、或は勸言を與へられたり。謹みて、謝意を表す。

釋迦

目次

第一章　佛陀及び其の時代……一頁

第一節　宇宙の第一人……一

第二節　佛陀出現の時代……八

第三節　印度思想に於ける佛陀の地位……一三

印度思想の共通點……一三

繼承的方面……一六

革新的方面……一八

第四節　佛陀……二五

降誕及び太子時代……二五

曠野の苦行と樹下の冥想……三一

轉法輪……三七
娑羅樹林の入滅……四一

第二章　佛陀の聖訓……四六

第五節　佛陀の威容……四六
第六節　佛陀の訓言……四八
我れは一切を征服せり……四八
海水一味……五一
我れは農夫なり……五四
汝は新にせられたり……五七

第三章　佛陀と譬喩……六一

第七節　說法の態度……六二
第八節　譬喩說法……六五

毒箭身に立てども……六九
水は濁りぬ……六七
鴿と龜……七一
獸々夫婦……七一
三獸河を渡る……七二
月の鼠日の鼠……七三

第九節　譬喩說法に現はれたる自然美……七四
はな(華香品)……八〇
佛と牧牛者……八六
藥草の雨(藥草喩品)……九四

第四章　佛陀と本生說話……一〇一

第十節　本生說話の意義及び其の起原……一〇一
第十一節　本生說話の構造……一〇四

第十二節　本生說話成立の過程……一一五
第十三節　本生說話の發達及び本生說話集の編纂……一一九
第十四節　本生說話の傳播及び其の影響……一二七
第十五節　宗教劇としての本生說話……一三七
劇曲「蘇達拏太子」……一四二
第十六節　本生說話……一四六
尸毘王鴿を救ふ……一四六
獼猴園を毀つ……一四九
智者賊に遭ふ……一五三
九色の鹿……一六二
野狐獸王と爲る……一七一
常闇……一七六

龍王と金翅鳥……一七九
第五章　佛陀と讃頌……一八四
第十七節　讃頌の起原……一八四
第十八節　讃頌の發達……一八九
第十九節　讃詠の儀禮……一九七
第二十節　馬鳴の佛所行讃經……二〇七
故郷の再會……二一三
第六章　佛陀と神話……二一七
第二十一節　佛傳の神話化及び其の過程……二一七
釋迦族の高貴と佛陀の風貌……二一七
遺骨崇拜及び遺物崇拜……二二五
佛傳と神話及び俗信との混淆……二四三

第二十二節　神話化したる佛傳……二五二
第二十三節　佛傳の神話……二五六
嵐毘尼の曙光……二五六
出城の夜……二六四
魔軍襲來……二七一
第七章　大乘經典に現はれたる佛陀の面影……二八二
第二十四節　大乘經典の構造……二八二
第二十五節　維摩經梗概……二八八
第二十六節　佛陀の面影……二九九
善財童子の求法……二九九
救世の誓ひ……三〇二
韋提希夫人の歡び……三〇五
衆生病めるが故に我れ病めり……三一二

第八章　餘論……三一三
漢譯六(羅什譯)……三一三
三つの車……三一三
窮子父を忘る……三一八
常住の滿月……三二二

釋迦目次終

(目次以上)

補遺及び附錄

樺皮貝葉

（目次別出）

釋迦

第一章　佛陀及び其の時代

第一節　宇宙の第一人

天上にも
天下にも
我のみぞ
獨り尊き

（誕生偈）

「佛教が當代及び爾後數千載の民衆に偉大なる感化を與へし所以のものは、佛陀の瞻仰すべき人格に因ること多くして、其の教義に因ることは、寡る少し

と爲す」とは、東洋學者の泰斗、故マクス、ミユラー博士が、其の著印度哲學の六派に於いて、佛陀を讃美したる言葉である。

凡そ古往古來、印度が產み出した聖賢俊哲數ある中に、世界に向つて誇り得べき代表的人格を求めたならば、吾人は曠世の獅子兒三人を擧ぐることが出來る。即ち大聖としては、佛陀釋迦牟尼、帝王としては、阿輸迦大王、詩人としては、カーリダーサ即ち是れである。世界のあらゆる方面から、自然秀靈の氣の凝成した、民族の華、國民の誇りともいふべき傑人を一堂に集めたならば、恐らくは、無數の星辰碧落を蔽ふ銀河の偉觀を呈するであらう。而して、中に就いて、最も燦爛たる光を放つてをる星の一つは、疑ひもなく、佛陀である。

星中に於いては、月を最となし、

人中に於いては、佛を上と爲す。

とは、弟子達の讃頌であつた。歲や正に三十有五、畢鉢羅樹の下、金剛座上に、輝き初めた正覺の光は、煌々たる燈火となり、燄々たる炬火となつて、此に三千餘載、渾沌たる長夜の闇を照破した。歸依渴仰の裡に、宇宙の本體と融合した佛陀の

人格は、海拔二萬九千二百尺、儼として、碧霄を劈き、薩々として五印度に君臨する大雪山の如く、爾く雄大壯嚴である。

然るに、佛陀の傳記は、年處を經るに從つて、誇張され、添加されて、神祕的になり、半神的になり、妖怪的になり、佛陀の人格は、後世の宗教意識に淨化され、擴大されて、終には、悠々たる寂靜の海に浮べる一髮の靑螺の如く、殆ど、抽象的虛影のやうになり、茫漠として、其の姿を認むることが出來ぬ程、過大に寫象せらるるに至つたが、而も、彼の人格は、斯る理想の中に空しく埋れて了うには餘りに堅實であつた。

此の事實を證明するものは、西洋に於ける佛教研究の歷史である。初め、佛のセナール氏や、荷のケルン氏は、蕃譯普曜經(Rgya cer rol pa)や、尼波羅の妙法蓮華經などの誇張された經典を研究したので、其の荒唐なる記述に驚いて、佛陀の存在を疑ひ、佛傳は一種の太陽神話であつて、淨梵王を父とし、摩耶夫人を母として、中印度の迦比羅衞城の王子と生れたと稱せらるゝ釋迦牟尼は、歷史上の人物ではないと結論した。而も、獨のオルデンベルヒ氏は、熱心に、原始的な巴利

語の經典を研讀して、一書(Buddha, sein Leben, sein Lehre, seine Gemeinde.)を著し、佛陀は歴史上の實在的人格であつたことを證明した。是れより、歐洲に於いても、佛陀の偉大なる人格は、廣く認められるゝに至つたのである。

人は、釋迦牟尼、孔夫子、及び耶蘇基督を世界の三聖と呼ぶ。此の選擇は頗る其の當を得てをるといつてよからう。以上の三聖の外、宗教の開祖としては、波斯(ペルシア)の蘇魯支(ゾロアスター)、大食(アラビア)のムハマッド、支那の老子等がある。而かも、其の感化を及ぼした範圍から言へば、ムハマッドが漸く三聖の域を摩する位で、他は殆んど、比較にならぬといつても、過言ではない。而して、此の三聖の中に就いても、佛教徒は、釋迦牟尼を以て、宇宙の第一人とし、基督教徒は、耶蘇基督を以て、唯一無二の聖子とし、儒教の徒は、孔子を古今獨歩の大聖人とし、各其の好む處、信ずるところに偏する傾きを免れぬ。勿論、絳衣を着せ、蘆の笏を持たせ、棘の冠を戴せ、面に唾せられ、十字架に磔せらるゝまで、ヨルダン河の畔、ガリレヤの邊に、愛の新福音を説いて、「天國は近づけり、悔い改めよ」と叫んだ耶蘇基督の人格は偉大である。有名なる異邦の使徒ポーロに依て、羅馬を經て、終に歐米文化の根柢をなすに至つた

其の影響は誠に大なるものがある。又、春秋の亂世、臣は君を弑して怪まず、子は父を虐けて恬然たる時代に當り、椽大なる史筆を揮つて、大義名分を唱へ、陳蔡の野に飢うるも、絃歌の音を絶たず、仁愛忠恕の道を説き、「天下道あれば、則ち禮樂征伐天子より出て、天下道なければ、禮樂征伐諸侯より出づ」と叱咤し、其の教は、上下三千載、幾十億の民心を支配した孔子の人格は誠に偉大なるものがある。共に欽すべく、仰ぐべきである。而も、深邃なる理智を骨とし、廣博なる慈悲を肉とした佛陀の人格は、更に高く、更に大なるが如く我れ等をして、思はしめずには置かぬのである。嗚呼、偉なる哉、佛陀。天地世界は廣く、人類は多しと雖も、古往今來、其の人格を以て、宇宙の本體と致一された偉人は、彼れの外には、果して何人かある。實に「天上天下唯我獨尊」とは、這般の消息を道破した警句である。

曾て、最も陋むべき僻見を以て、佛教と基督教とを比較し、故意に、佛教信者の數を、基督教信者の數(たん)の下に置き、佛教は將に世界の表面より消え去らんとすと傲語したモニエル、ウヰリヤムス氏の如きも、佛陀の偉大なる人格を認めぬ譯にはいかなかつたと見えて、其の著「佛教」に於いて、佛傳を説かんとするに臨み

て、佛陀が、重厚なる個人性、燃ゆるが如き熱誠、嚴肅にして撲實なる性格、純美なる容貌、沈靜にして威嚴ある風采、及び、殆んど超人間的の威力ある雄辯を有つて居給うたことは、疑ひないことである。」（取意）といつてをる。而して、巴利語本生經の本文を出版し、且つ、其の一生を捧げて、佛教研究に從ひつゝあつた北歐の碩學、故ファウスボール氏は、「佛陀の人格に服して、「佛陀を考ふること愈深ければ、愈深く彼れを愛するに至る」と告白してをる。其の他、歐米の學者（）て、佛陀を讃したものは、ショッペンハウエルを始めとして、澤山あるが、就中、最も通俗的に、廣く佛陀を歐洲に紹介した、アーサー・リリー、エドヴイン、アーノルド二氏の如きは力めて佛德を讃美し、殊に、アーノルド氏は、佛陀を歌つた長詩に題して「亞細亞の光」といつた程である。斯くて、今や、佛陀救濟の曙光は、漸く歐米の天地を照し、倫敦及び獨逸佛教會の興起となり、瑞西湖畔の佛寺建立となり、彼れの人格は、將に「世界の光」とならんとしつゝあるのである。偉なる哉、佛陀。

佛陀伽耶（ブダガヤ）大菩提寺（マハーボディ）の菩提樹が其の枝實に依つて、南は錫蘭緬甸、及び暹羅に、北は西域、吐蕃（チベット）支那及び日本に傳播したやうに、佛陀の教は、幾多の熱誠なる求

道者、翻譯者、傳道師の力に依つて、此等の諸國に渡つて、其の國々の神祇を包容し、征服して一大系統をなし、或は哲學を產み、或は文學を興し、或は美術と現れ、東洋文化の中心となり、根柢となり、上下、三千餘年、東西、幾百億の民心の依憑となつた。之を其の結果から觀たならば、佛陀なる一人格の影響の至大なる、實に驚くべきではあるまいか。

人は現今の佛教は腐敗し、衰へたりといふ。誠に謂はゆる佛教は衰へてをる。諸國の俗信と混淆し、婆羅門教や、印度教（新婆羅門教）と錯綜し、幽鬼崇拜と抱和した變態佛教は誠に衰へてをるに相違ない。而も佛陀の精神は今も昔も同一に潑剌たる生命を有してをる、唯之を發揚せぬから顯れぬのである。今や、佛陀の人格は、一たび西歐文明の思潮に洗はれて、更に新たなる光を放つべき時節が到來したのである。東洋思想の復興と西漸とに對する佛陀教徒の新しき使命に對して、吾人は佛陀の人格を三思する必要があると信ずる。請ふ、余をして少しく佛陀の人格を語らしめよ。

第二節　佛陀出現の時代

人は植物の樣なものである。植物の種子は異つた土壤に播けば必ず幾分か本來の性質を變ずる。高雅純美雪の樣な高山植物も、之れを平野に下せば、其の雄と潔とを失つて小さい花を着くるにすぎぬ。一瓣の花、一枚の葉にも必ず其の地方的の影響が現はれずには止まぬものである。夫れと等しく、人間も四圍の風土や、父祖民族の習慣性質に左右さるゝ事が夥しい。隨つて、興つては仆れ、仆れては興つた古來幾多の人生觀や、世界觀や、其の大部分は必ず、其の時代、其の國土の色彩を帶びてをる。謂ゆる時代思潮の一波一瀾を全然脫却する譯にはいかぬ。偉人は時代を造るが、時代は亦偉人を生むのである。故に時代を離れて、偉人を見ることは不可能である。時代と偉人との關係は、母と子との關係である。

果して然らば、佛陀がいかなる態度をとつて、如何樣に其の道を宣傳し給ひしかといふことを理解するには、どうしても其の時代を知らねばならぬ。時代

や社會の狀態に應じて、說かねば功力はない。其の時代が渴して居れば、水を與へねばならぬし、餓ゑて居れば、パンを與へねばならぬ。良醫は如何なる病人にも同一の藥劑は與へない。病に依つて適當な處方を用ゆる。佛陀は時代の醫師であつた。隨つて時代や、人間に應じた良藥を投じ給うた。然らば、佛陀出現の時代はいかなる時代であつたらうか。

印度民族は固西北から雪山の南に侵入したので、波斯人と一緒に南下したのであつた。初めは極めて快活な人種で、單純な天然崇拜をなしてゐたが、文華漸く開くるに及んで、供犧祈禱が益複雜になつて來た。太古遊牧の時代には、家家の家長が朝夕爐邊に火を焚いて、天神を祀つて居たが、儀式が整ひ、社會に餘裕が生ずるに至つて、儀式儀禮の方法が非常に煩雜になつて、之れを行ふには、專門的の智識がなければならぬ樣になり、此に僧侶が生じて來た。蒙昧の時代には天地萬象は凡て神怪不可思議の集合であるので、淳朴な民は、供犧祈禱を重じ、僧侶を恐れた。從つて僧侶の權力は益强くなり、其の供犧を盛大にし、祈禱を複雜にして、他人の窺ひ知る能はざる樣にした。そこで謂ゆる「天國の鍵」を握

つた僧侶の一族は、愈跋扈して、權力を恣にするに至つた。是れが即ち婆羅門族である。彼等は遂に自れの種族階級を標準として、其の利益を保護するために、得手勝手な法律を作つた。そして、其の遵奉を他族に強ゐるに至つた。彼れ等の揑造した傳說によれば、婆羅門は梵天の口から生れたので、最勝の種族で神聖犯すべからざるものであるとし、刹利即ち武士は梵天の肩から生れたので次に位し、毘舍即ち商賈は臍から生れ、首陀即ち農民は、足から生まれたので、漸次其の次に位する事となつたのである。斯く階級制度をたて、此の觀念に基いて多くの法律を制定して、非常なる壓制を試みた。其の法典の最も有名なものは、即ち摩奴の法典である。其の中には「假令草の葉を以てするも、婆羅門を打ちたる者は平伏して寛假を請はねばならぬ」とか、「婆羅門を謗りたるものは、赤熱せる鐵條を其の口に突き込むべし」等いふ亂暴な條項がある。斯くの如く釋迦出世の時代には、人民は自由を束縛せられ、宗教は煩瑣なる教條律法と化石し、一方には之れに憤激する自由思想派があつて、山林に退いて解脫の法を冥想して居るのもあれば、他方には又た破壞派があつて、極端なる現世主義快樂主義本能

主義を主張し思想界の空は今や變態を呈して來た。謂ゆる九十六派の哲學派は、此の低氣壓に乘じて、蓬勃として湧いた雲霧である。今や大風か豪雨が天外に起つて、此の沈滯の天地を一掃しなければ、到底印度の天又雪山の白尖を仰ぐことは出來なかつた。佛陀は實に此の雨である。風である。隨つて其の態度が平民的であり、博愛であり、寛容であり、平等一味であるのは固よりである。要するに、是れ迄婆羅門の手にあつた宗教を引卸して、平民的とし、一般的とした。從來は宗教といへば、僧侶の媒介を經なければならなかつたが、佛陀は此の媒介物を排斥した。莫大な黃金や、家蓄を捧ぐるにあらざれば、梵天の惠みに預ることを得なかつたのに對して、佛陀は信と行とを以て、容易く涅槃に入ることを教へた。佛陀の宗教は貴族や、僧侶の宗教ではなかつた。否、却て農夫の宗教であり、牧夫の宗教であり、平民の宗教であつた。殿堂の宗教でなくして、村落平野の宗教であつた。一言にいへば、天と人との間を閉塞する無益の階段(婆羅門族)を否認して、天と人とを近づけたのであつた。

更に思想の上に立ち入つて、印度思想に於いて、佛陀は如何なる點を[illegible]

如何なる點を創說したか、一言にいへば、印度思想上に於ける佛陀の地位を略說しやう。是れ佛陀說法の眞意を了解するに必要なることであらうと思ふからである。

The Scripture of the Saviour of the World,
Lord Buddha—Prince Siddhartha stylet on earth—
In Earth and Heavens and Hells incomparable,
All-honoured, Wisest, Best, most Pitiful;
The Teacher of Nirvana and the Law.
Thus came he to be born again for men.

Edwin Arnold, "The Light of Asia."

第三節　印度思想に於ける佛陀の地位

印度思想の共通點

印度に於いても、希臘と等しく、哲學思想の起原は神話の解釋に基いて居る。初め印度アールヤ族は天然現象を神化して、之に讃誦を捧げ、供物を供へて居た。此等の讃頌と供犧の方法を編纂したものが吠陀の聖典である。然るに、吠陀の末に至つて、漸く多神の中に主なる一神を見出さんとする統一的傾向が現れて、其の結果梵天なる神が出來た。下つて、自由思想が熾になり、優婆尼沙土時代に至れば、梵天に換ふるに、梵なる宇宙精神を以てし、夫れと固體精神との同一不二を唱ふる樣になり、一方には梵天を崇拜する婆羅門教の精神固結するに及んで、各種の哲學派が競ひ起つた。南北所傳に依つて、其の學派の數は區々であるが、總じて九十五外道或は九十六派といひ、其の最大學派は左の六派であつて、外に懷疑派があつた。

(一)尼耶也學派……卽ち因明學派

(二)吠世史迦學派……即ち勝論師
(三)僧法學派……即ち數論師
(四)瑜伽學派……即ち祕密師
(五)彌曼差學派……即ち聲論師
(六)吠檀多學派……即ち梵師

(五)(六)は正統婆羅門哲學派であつて、(一)は論理學派であり、(二)(三)が純然たる哲學派である。(四)は觀行を論ずるのであるから、正しく哲學派とはいへない。此の他に、極端なる懷疑派即ち順世學派がある。而して、佛教と耆那教とが此等に繼いで興つて居る。(諸派興起の年代に就いては異說多けれども、今は略す。)

此等の各派は、同一の湖水から流れいでた河流の如く、多くの共通點を有してをる。其の中で最も明かな點を二つ三つ略記して、印度思想の特色を示さう。

(一)厭世觀　現世を以て多苦なる世界とし、迷妄とし、かゝる世界に生活するのは、非常な苦痛であるとし、人間が梵を知るの明なき無明又は幻より起つたものと觀る。隨つて、此の世界は如何にもして速に解脫して、更に樂しき世界に

生れんとするのが、印度各學派の一致する厭世觀である。

(二)智解脫　斯る世界を解脫するには如何にせなければならぬかといふに、各派は皆智識を以て解脫に到るの道なりと信じて居る。即ち我れ等が斯る多苦の世界に墮落して居るのは、我れ等に宇宙の眞相を見るの明智がないからである。故に修行して智を磨き、其の實相を知るに至れば、我れ等は最早迷ふには及ばぬのである。

(三)因果應報　自ら播いたるものは自ら刈らねばならぬ。一たび爲したる行爲は、善にあれ惡にあれ必ず其の報酬を受けねばならぬ。いかに隱れてなしたる行爲も此の制裁を免るゝことは出來ぬ。

(四)輪廻說　前の說を現世に限らず之れを過去と未來との三世に擴張したのが、この輪廻說である。隨つて其の輪廻する範圍は即ち生死大海である。詳しくいへば、人の過去に爲したる行爲(業)に依て、現在の生を享け、現在に爲したる行爲の結果として、未來の生を受くるのである。其の生の善惡良否は夫れ夫れ過去の行爲の善惡良否に相應するのである。優婆尼沙土や摩奴法典には、人の

魂が死後、植物や他の動物に宿ることを、頗る具體的に描いてあるのである。

此等思想の中で、佛陀は如何なる點を繼承し、いかなる點を革新したのであらうか。

繼承的方面

先づ佛陀が成道の後、初說の法は何てあるかといふに、夫れはいふ迄もなく四聖諦である。四聖諦とは何ぞ。請ふ少しく說明してみやう。

(一)苦聖諦　世界は苦なり。樂あることなし。
(二)集聖諦　苦の本は無明なり。無明の結果として苦の世界を招けり。
(三)滅聖諦　無明を滅すれば解脫すべし。是れ涅槃なり。
(四)道聖諦　智を磨き德行を積みて無明を滅すべし。

無明を滅する方法として、佛陀は更に八聖道を說かれた。卽ち左の通りである。

(一)正信　正しき信仰を有せよ。
(二)正意　正しき意志を有せよ。
(三)正語　眞を語り、虛僞を言ふこと勿れ。

(四)正業　正しき行爲を爲し、邪業をなす勿れ。
(五)正命　正しき生活を爲し、道ならぬ生活をなす勿れ。
(六)正精進　勉强努力せよ。
(七)正念　正しき思想を持て。
(八)正定　正しき默想(禪定)を爲せ。

之れを一見すれば、佛陀が在來の厭世觀と智解脫觀を其の儘採用せられたといふ事は明かであらう。唯實行に適切なる八聖道を說き給うたところは、其の異色とすべき點である。

次に、十二因緣論を紹介しやう。是れは少し複雜で、佛陀が菩提樹下に於いて、順逆に觀察して、正覺を成じ給うたといふことで、四阿含等に屢說いてあるが略說すれば次の如くで、無明が根本になつて漸次に他の十一を惹起す點は前と同じ意味である。前二諦を詳細にしたに過ぎぬ。

(一)無明
(二)行　行爲

(三)識　受胎の端的。
(四)名色　胎内にある初期。
(五)六處　體形の出來し時。
(六)觸　生まれてより二三歲迄。(唯外界に觸るゝのみ)
(七)受　四五歲乃至十二三歲。(前愛憎苦樂を知る)
(八)愛
(九)取　十六七歲より壯年時代(貪色の慾盛んなり)
(十)有　善惡の行爲。(必ず其の結果を有する故有といふ)
(十一)生
(十二)老死

古來此の說は佛敎特有のものとしてある。最も說明に於いては新しい點があるが、而も、無明を以つて世界人生の根本とし、善惡の行爲に依つて、過、現、未の三世に輪廻することを說くところは全く在來の思想である。

革新的方面

佛陀は實に曠世の偉才である。必ずや多くの獨創的能力があつたに相異ない。併し、彼れは突飛なる新說を唱道して、思想界を擾亂することを好まなかつた。已むを得ざる時は斷乎として新說を唱道したが、出來るだけは、在來の思想を醇化し新にし、生命あるものとする方針であつた樣に思はるゝ、要するに、其の態度は甚だ穩健であつた。隨つて、其の理想とする涅槃の觀念の如きも、古優婆尼沙土の唯心的世界觀の精髓たる梵涅槃の觀念を抽き來つて、更に之れを實際化せられたことは疑を容れぬ。斯くの如き穩健なる思想及び態度の中で、左の三點は其の革新的方面であらう。

(一)實行的倫理的態度　從來の自由派哲學にせよ、正統派哲學にせよ、皆な理論に馳せ、冥想に耽つて、學說の如きは細說詳論、煩鎖的傾向が甚しかつた。勿論、學問的には然かあるべき筈であるが、印度の哲學研究の動機は解脫にあるので、斯の如きは、解脫の道行としては、甚だ不適切、迂遠なりと謂はねばならぬ。例へば、數論派が二元的分出論を說くにしても、自性、神我、變易等の二十五諦を立つる如きことや、勝論學派が多元的分析論を唱へて、六句義或は十句義西洋所傳

には七句義あり)を說くにしても、甚だうるさい程煩瑣である。此の點に於いて佛陀は說明理論は第二として、實行を重んじ給うた。其の敎誨の內容が實に倫理的であつて、日常生活に適切なことのみであつた。此點から觀て、原始佛敎は殆んど、一種の倫理運動たるの觀がある。故に、佛陀の理論的說法は首尾整はず論理の一貫せぬ樣に見ゆるところもある。是れが實行に重きを於いて、理論を主とせられなかつた證據である。經典の中には、實に無記の說がある。例へば世界は無始なりや、有始なりや、等いふ如きことは問ふものがあつても、答へられなかつた。加之、或時一弟子が斯かることを問うたときに、有名なる箭の譬喩を以て、之れを呵し給うた。(譬喩の條下を見よ)生老病死の四苦に滿てる世界、無常變化の人生をいかにして解脫すべきかといふことが、佛陀の生涯を通じて、當面の最大問題であつた。佛陀は此の點に於いて、確に切實なる態度を取り、緊要なる敎誡を垂るゝ外は、一切の論議を斥けられたのである。是れが當時の沈滯せる思想界に一大革新を惹起したる所以であつた。

(二)中道　從來の學派は或は苦を以て解脫の道なりとする者があつて、饑渴に

堪へ、灰に塗みれ棘に臥し、手を擧げ、日に向ひ、あらゆる苦行をなして、其の功果によつて、死後安樂なる天上に生れんと希圖し、非常に酷烈なる修行をなした者もある。之れに反して、又、他方には、順世外道の如き懷疑派があつて、盛んに、個人的快樂主義を唱へ、非常に極端なる行動に出てた。佛陀は此の兩學派の何れも眞正解脫の方法を知らぬものとして斥け、自らは苦樂を共に棄捨して、非苦非樂の中道を以て主義とせられた。即ち前に述べた八聖道是れである。此の點が又佛陀の敎の穩健にして、切實なるところである。

(三)實我の否定(無我)　靈魂の觀念に就いて、佛陀は確に一新說を唱道せられた。即ち無我の敎旨である。是れ甚だ重要なる思想であつて後世に至るまで、佛敎の特色となつて遺つた。古來、印度には靈魂實有の思想があつて、遍ねく信ぜられてゐたらしい。古優婆尼沙土を繙いてみると、其の中に靈魂について種々の奇怪な說が列ねてある。此等の說に據れば、靈魂は心臟の空窩に宿つてゐて、其の大さは米粒或は麥粒の如しとある。後には拇指の樣だといふ說も出て、靈魂の一名を「侏儒」と呼ぶに至つた。而して其の形は人の樣で、其の色貌は種々に形

容されて居る。或は煙色の羊毛の如しといつたり、洋紅の如しといつたり、乃至、火焔や、白蓮華や、光の焔や、煙なき光等を以て形容してをる。或る一章には、靈魂は意識、心、呼吸、眼、耳、地、水、火、風、熱、無熱、欲望、無慾等のあらゆるものを具へてをると說いてある。要するに、靈魂は體內にあつて、物質と意識とから成り、形、人の如き活物だとされて居ることは明かである。最も神怪なる一章には、人の靈魂は互に相異つて、而も順次に一が他の內側に累れる五個の魂から成るといふことを說いてある。而して、靈魂が肉體を脫出して、自由に遊んで步くので、夢なる現象が起るが、醒むる時には、肉體に還つて來る。故に、人が眠つて居る時には、急に起せば、靈魂が肉體に還る時間がないので、人は其の儘死んでしまふから注意しなければならぬといふことが書いてある。其の他、死後靈魂の行く二つの路の樣が描かれて居る。かゝる思想は夙に、吠陀の中にあるので、他の哲學派も、之れに類した思想を抱いてゐたことは明かで、例へば、麤身、細身說の如きは正しく其の證である。詳しくいへば、人間には、麤身と細身との二種の身がある。前者は肉體で、死すれば廢滅に歸するが、後者は靈魂で、肉體死すれば、來世に向ふ

のである。而して、これが輪廻の主體となるとして、極めて物質的に、說いてあるところを觀ると、靈魂實有の觀念は印度アールヤ民族固有の考であつたらしい。

然るに、佛陀は全然之れに反對して、無我の說を主張せられた。既に、靈魂の實在を否定するとすれば、何が行爲(業)の結果を享くるのであるかといふ事が、當時佛敎に對する非難の聲であつたらしく、頻王と佛陀との証にも此の事が出て居るし、那先比丘經あたりにも見えてをる。佛陀は此の難點を說明するに、三事生染の說を以てし給うた。即ち實我はないが、情と塵と識との三つがあつて、三者相合して、一定の境界に於いて、染着を生ずるから、欲望競ひ起つて、生死流轉するのである、輪廻の起るのは、現在に於いて、此の三事に依つて作られた行爲が基となつて、來世に於いて、一定の境界を生ずる。かくて無窮に轉々するので、謂ゆる自業自得である。例へは燧を鑽つて火を作る樣なものである。火は手や燧から生ずるのではないが、併し又兩者を離れては生じない。兩者相合して生ずるのと同樣に、三事が一定の境界に相合して、染着を生じ其の結果として

苦を受くるのである。而して、情塵識の三事は不常不斷と說かれた。要するに、佛陀は無我の旌旗を捧げて、獅子吼し給うたのである。

死後靈魂の狀態に就いては、Bṛihad-araṇyaka-Upanishad, V. VI, Chāndogya-Up., V. VIII. Muṇḍaka-Up., I. Kaushītaki-Up., I. Taittirīyaka-Up., I. Praśna-Up., I. 等參照。三事生染に就いては、過去現在因果經第四、那先比丘經等參照。

第四節　佛陀

降誕及び太子時代

佛陀は今より凡そ三千年前印度の迦比羅城（カピラストウ）の王子として城より程遠からぬ嵐毘尼（ランビニー）の園に降誕せられた。時恰も野や山は勿論日蔭草にも花匂ふ四月の八日で、輝く樹葉（このは）の碧（みどり）更に新に、陽炎風光る林苑の泉の畔、濃藍を流した樣な大空の下に呱々の聲を擧げられたが、傳によれば此の可憐なる小王子は安祥として歩し給ふこと七歩、厳の樣な拳を伸べて、「天上天下唯我獨尊」と獅子吼されたといふことである。獅子兒にして善く獅子吼す。これが、後年、亞細亞大陸に、靈の主國を建設した偉人の最初の聲であつた。

其の頃、印度は多くの王國に分裂して、互に覇權を爭うてゐたが、迦比羅國も其の一であつた。廣さは凡そ唐里四千里餘りで、中印度に位し、迦比羅城は其の首府であつた。（黄城の義）城名の起原は往古、迦比羅といふ仙人が棲んでゐたからだと傳へられて居る。見渡せばロヒニー河が遠く尼波羅の深溪から流れ出て

鬱蒼として、青い霞の流れ淀んだ樣な熱帶の森林を潤し、北印及中印の大平原を、洋々として銀蛇の樣に流れ下り。マハーナダ河を併せて、ラプチ河に注いで、更に青蕪を浸して居る。仰げば、白紗を曳き斷つて遺れし如き夢なす雲が行くともなしに漂うて居て、中天には、巨人の如きヒマラヤ山が其の萬古の雪冠を戴き、雍々として王者の威を裝うて居る。實に雄偉なる山河の形勢ではないか。

抑ヒマラヤは、實に、世界の「山の山」であつて、梵語「雪のあるところ」又は「雪の家」の義である。最高二萬九千二百尺、其の背後の深谿は天然の大水漕をなし、信度、桓日河ブラフマプトラ等の大河が源を茲に發して、印度の大平原に流注し、支流縱橫葉脉の樣に紛糾して、豐饒を至る所に頒つて行く。實に、是れ等の河々は印度文明の母であつて、深邃幽玄なる哲理や、宗教は此の慈母の乳なる水脉の賚であつた。彼の吠陀の神歌は、「七河」の地方に、敬虔なる種族に依て、歌はれた讃頌であつた。春になれば、深紅の花が石楠の梢を飾つて、多くの鳥が朝の歌を奏づる。夏になれば、暴風天を捲いて、印度詩人の謂ゆる「大きな白鳥」(雲)が列をなし、翼を擴げて急飛する。樹の實は、甘露の味を含み、草の實は葉末に零れて、生活の

困難は夢にも知らぬ樂園とは實に此土のことであつた。快活なる種族は、「蘇摩」の樹を絞つて、酒を作り、其の石臼を神とし、其の酒を酌み、楯を叩いて、祖先の戰功を謠つた。此の民の子孫が、後に、桓河の溪を下つて、多くの國を建てたのであつた。

一碧油の樣なロヒニー河に二の城の石壁が影を落して居る。右は即ち迦比羅城で、左は即ち拘利城である。俱に釋迦族であつて、甘蔗王の子孫であつた。迦比羅城主の首圖馱那は佛陀の父王であつて、母王の摩耶夫人は對岸の王女の此の城に入輿したのであつた。

此の時まで、未だ一人の王子もなかつたので、王室の歡びは勿論、人民の歡呼は湧くが如くであつた。王は嘉名を選んで悉達多と名つけた。悉達多とは「一切成就」といふ意味である。然るに、此の一城歡喜の裡に、母后の摩耶夫人は果なくも病を獲て世を棄てられた。そこで、王子は叔母の摩波闍提夫人の養育を享くることとなつたのである。王子生まれて穎悟、屢廷臣を驚かした。七歳に及んで、父王は當時の學者跋陀羅尼を擧げて師とせられ、十分なる教育を施された。先づ

五明（聲明、工巧明、醫方明、因明、內明）を學び、次に四吠陀を誦せられた。四吠陀とは梨俱、僑馬耶、柔縷、阿答縷婆の四集錄であつて、神歌や祭祀の儀を集めた婆羅門教の聖書である。樹苑花薫るあした、樓閣月匂ふゆうべ、如何に、小王子の呻唔の聲はロヒニー河の漣に和して、響いたであらうか。

加之、此の小王子は行く行くは、迦比羅城の主として、中原に鹿を爭ふべき運命を擔ふ一國の太子であれば、父王は同族中の勇士摩提提婆を擧げて、武藝の師とせられた。當時北には、舍衛城、東には、拘尸城があり、東南には、王舍城があり、南には、波剌那斯城があり、相結び、相離れて、互に攻伐を事として居た。故に、武藝は到る處に盛に練習せられ、劒戟の音、弓弦の響きは絶へなかつた。太子は新に作られた武園に於て、駿馬を叱咤し、鐵腕を鍛錬したが、一日、國中の善射者を集めて競射が開かれた時、多くの鐵鏃を射貫いて、勇健第一の名を獲、拜觀の民衆に香を捲かせた。是れ其の光輝ある桂冠に、更に、一層の綠葉を加へたのであつた。

野に咲く百合の花は、曉の露に微笑んでをるが夕べの星と語るには餘りに

脆い生命である。逝て還らぬロヒニー河の水は晝夜を別たず、流れ流れて海の墓に急いでをる。歡びと樂みの裡に人と爲つた太子も、漸く人生の裏面に眼を注ぐに至つた。一日、陽炎燃ゆる春の野に遊んだが、草は悉く花を着け、樹は悉く翠を裝うて、蝶は花香に醉うて眠り、虻蜂等の昆蟲は微けき羽音をたてゝ囁いて、いかにも、驩樂の酣なる天地の姿であつた。併し、詳に、觀察してみれば、蟲は小蟲を窺ひ、鳥は亦甲蟲を探して相食んで居て、樂しげに聞こゆる囁きも實は相殺戮する叫喚の聲であつた。憐み深き太子は、之を見て、長大息せざるを得なかつた。更に顧みれば、農夫が田を鋤いて居たが、一枚の犂に、無數の蟲が切り殺されて居る。此に於て、太子の心は益動いて、とある閻浮樹の蔭に端座して、思ひを人生の眞相に回らし、遂に、歸るを忘るゝに至つた。かくて、太子の憂鬱は日に甚しくなつたので、父王を始め、群臣は窃に相議して、拘利城の王女、耶輸陀羅姫を迎へて王妃とし、多くの美女を集め、壯麗なる宮殿を築いだ。

木の葉を落つる涓滴も、遂には、巖を穿たずにはをかぬ。太子は一子を擧げたが、憂鬱の暗は益心の淵を鎖して來た。絃歌の響きも、王者の驕りも、其心を慰む

るには足らなかつた。太子は人生の歸趣を求めて悶えてゐた。太子の心は日暮れて星一つなき寂寞たる曠野である。霧の海に梶を碎いた船である。天才の煩悶は新に醸された泡たつ酒である。古い習慣の甕や、淺はかな歡樂の嚢を破らずには置かぬ。幾度か迷ひ、幾度かためらふたが、衒耀に飽いたラセラスが「幸福の谷」を出づる時機は來ずには止まなかつた。『三界依るなし。道唯恃むべし』。一夜、太子は白馬犍陟(カンダカ)に跨つて、遂に地上の樂園を棄てた。

此の夜、星明にして、樓臺の苑樹暗を含んで低く、金門音なく、白馬轡(くつわ)みを銜んで、東南を指した。かくて、太子は肉の王位を拋つて、靈の王國に入つた。惱みは短く、歡びは長い。ロヒニー河の水音は聲高く此の征服の首途を祝うたのである。

一) 佛陀の年代　佛陀の年代については異說が凡そ五十餘種もある(佛教小史第一卷 P. 173-202 參照)位で、今猶確定しない有樣である。故に今は假に、大唐內典錄第四に據り、左の如く定めてをく。

降誕　日本紀元　九四(B.C. 565.)　結婚　同　二二(B.C. 548.)
出家　同　二九(B.C. 536.)　成道　同　三〇(B.C. 530.)
歸鄕　同　三一(B.C. 523.)　入滅　同　八四(B.C. 496.)

(二) 迦比羅城の位置　迦比羅城の廢趾は、今の尼波羅國タライ地方にある。我が國には、どういふ間違の爲めか、佛陀の鄕國は錫蘭島であるといふ俗說が、遠くから行はれて居て、今でも左樣に思うて居る人が少くないのは、遺憾の至りである。最も、同城の確實な廢趾に就いては、近年迄、學者間に異說があつて一定しなかつた。然るに、今から十餘年前(一八九五、六年頃)ゴラックプルの北方ウスカ停車場の四北三十八哩に當るニグリヴァ及びクミンデイの兩處から、阿育王の建てた石柱を發見し、ピフテヴァ古塔を發掘したところが、佛陀の遺骨を得たので、迦比羅城の位置を確定することが出來た。即ちルミンデイは嵐毘尼園の趾で、城趾は、其の四北に、十五哩を隔てたトイロラコット及ニグリヴァ附近に僅に、壞れた城壁を遺してをるばかりである。

曠野の苦行と樹下の冥想

『戰ひなければ聖人はない。』ショッペンハウエルは甘いことをいつた。佛陀の一生は戰ひの歷史である。勝利の記錄である。菩提樹下の百戰は人間なる悉達太子をして、縱に三世を貫き、橫に十方を空うする佛陀となした。

王室に生まれ、安樂に慣れた羸弱な二十九歲(或は十九歲)の一青年は、其の愛を割

き、其の冠を棄て、赤裸々の求道者となつて城門を出た。今や、彼れは身に一物なき曠野の人となつた。回顧すれば、二十九年の榮華の生涯は幻ではない。加之、號哭して諫むる御者車匿(チャンナ)があるではないか。如何に鐵の如き決心も少し位は動くのが人情である。併しながら、彼れは頑として動かなかつた。東南に向つて行くこと。凡そ十七里にして藍摩(ラーマ)城がある。更に進めば、阿伐彌(アヴァミ)河が流れて、河畔には、幽邃な森林が水を蔽うて聳えて居る。彼れは此の深林の靜寂を喜んで、御者車匿と愛馬犍陟に別れを告げた。車匿は太子の昨日に變る姿をみて、慟哭して、共に、俱に、今一度、王城に還らんことを請うた。太子は泰然として動かず、『世間の法獨生獨死す、豈復伴あらんや。』と諭し了り、刀を執つて、髮を斷ち、黃色の袈裟を着けて、林中に入つた。愛馬は空しく影を望んで長鳴し、車匿は地に伏して號哭した。

彼れは隱者を訪うて、解脫の法を得んと思うたので、先づ跋伽(バガヴァ)仙人の幽棲を訪うた。跋伽仙人は其の徒と共に、非常なる苦行を行うて居た。或は草を衣として居るのもあれば、斷食して居るのもあり、頭髮を拔いて居るのもあれば、荊棘(いばら)

の上に臥して居るのもある。終日手を擧げて居るのや、隻脚で立つて居るのや、實に千態萬樣である。釋迦怪んで問うて曰く『かゝる苦行に依つて何の求むる所ぞ。』仙人答へて曰く『是れ生天の法なり』と。釋迦は其の解脫の法にあらざるを知つて、飄然として更に北に向うた。

曉に至つて、王城には一大事が起つた。夫れは將來の國王たるべき太子の見えぬ事である。王族廷臣爲す所を知らず、茫然として居る處に、御者車匿が悄然として、空馬を牽ゐて歸り、旨を告げた。此に於て、王師及大臣自ら太子の後を追うて、跋伽仙人の許を尋ねたが、太子の既に北したのを聞いて、更に追跡した。偶其の一樹の蔭に端座して居るのを見たので、一城の歎きを告げて切に王城に歸らむことを請うた。太子之れを拒絕して、曰く。『今、我が暫く父母に背くは、永く會はむが爲めなり。父母は唯今生の老病死あるを知り給ふのみ。我れは永く其の根本を斷たんと欲す。此れを以て幸に父王に告げよ』と。王師之れを遮つて曰く『聖人或は未來ありといひ、或はなしといふ。斯る不定の果報を求むるを止めて歸り給はずや。』太子曰く『我れは果報を求むるにあらず。唯苦を脫せんとする

のみ』と。例令日月は切つて落すべきも、太子の心を繕すこと能はじと覺つたので。二人は相議して一行の中の憍陳如、跋提、婆敷、摩訶男、阿說示五人を太子の守護に遣して王城に復命した。

此に於いて、太子は五人と共に、恒河を渡つて、當時の强國摩伽陀國に進み、首府の王舍城に入つた。時に王の頻毗娑羅は狩の歸りに、太子を見たので、心に思ふやう。『今迦比羅城の太子俄に國を棄てゝ、沙門となるのは深き理由があるに相違ない』と。直ちに太子に會うていふやう。『太子國を棄てゝ此に至る、甚だ悲むべし。若し父王在ます故に、王位を欲し給はずば、我が國の半ばを捧げん。猶以て少しとなし給はゞ、全領を捧げむ。而も猶以て足らずとし給はゞ寡人に象馬、車、歩の四兵あり。希くは以て思ひの儘に四隣を征し給へ』と。太子は徐ろに志を告げて、之れを辭した。王は更に『太子解脱を得ば、先づ我れを救ひ給へ』と。請はれたので、太子之れを諾して、進んで、阿羅々迦蘭、鬱陀羅羅摩子の二仙を訪ふべく、頻王に別れを告げた。

抑王舍城附近の森林には、隱者が少くないが、此の二仙は其の翹楚であつた。

前者は三百、後者は七百の弟子をもつてゐたと傳へられてをる。太子は熱心に道を問はれたが、二仙は何れも、當時の哲學派の一派なる數論の旨を以て答へたので、其の意を滿す事が出來なかつた。

燈臺の光を求めて、暗濤を蹴つてゐた船は一縷の望みを失うた。此の若き沙門は翻て苦行が或は解脱の門ではあるまいかと考へたので、伽闍尸梨沙山の林中に入つて、酷烈なる苦行を修めた。或は一日に一麻を食ひ、或は七日に一米を食ひ、戒律を嚴守し、日夜心身を苦むる間に、椰子は六たび花を着けて、六たび實を結んだ。肉は落ち、骨は露はれて、生死の境に彷徨うたが、一道の光も見出すことは出來なかつた。此に於いて、愈苦行が解脱の法にあらざるを看破して、座を起つて、程遠からぬ尼連禪河の畔に出て、雪山から流れて來る清い水に浴して、多年苦行に汚されたる心身を洗つたが、氣力が衰へて居たので、漸く汀の樹の枝に縋つて岸に上ることが出來た。偶〻修舍慢加村の長者の女子の難陀婆羅が樹間に牛乳を絞つてゐたが、沙門を見て、牛乳を捧げた。太子は一杯の乳に氣力を回復したが今迄共に苦行をなしてゐた憍陳如等の五人は太子苦行に堪

へずして、此に至つたと思つたので、遂に彼れを棄てゝ去つた。

大海の心を小川は知らぬ。併し五人の處置は如何に太子の心を激勵したであらうか。彼れは一城一國の榮を棄てゝ曠野に入つた。御者車匿の慟哭をも省みずして、黄衣を纏うた、王師、大臣の懇請をも斥け、奮然として恒河を渡つた、然るに、「われ解脱を得ずんば日月落つるとも、退轉することあらじ」と誓つたのは、今や既に六年の昔となつた。光は見えぬ。五人の臣下には蔑まれ、辱かしめられ棄てられた。「彼れ退轉せり。彼れ墮落せり」との叫びは、如何に其の耳を打つたであらうか。

石石と相擊てば火を發する。泉は胸にある。山を尋ね、野に求めた太子は今や自れに還つた。『自れを知れ』とはデルフキーの神殿以來千古の謎語である。胸の泉、胸の泉、彼れは默想の斧を以て、此の清泉を雍蔽する岩石を粉碎せんと決心した。

「彼れは尼連禪河を渡つて行くこと二英里半。其の日を以て伽耶に達した。恰もよし、鮮碧洗ふが如き畢鉢羅樹(後に菩提樹)が蔭をなして、漣の樣に微風に光

つて居た。其の下に古聖の解脱した遺縱であらうか、一基の金剛座がある。彼れは吉祥草を採て其の上に鋪き、端然として默坐した。例令雷電墜ち、天地碎くるとも、光を見ずんば此の坐を立たじと誓うた。かくて、奮鬪四十九日、凡てを征服して勝利の星を仰いだ。時に二月八日の曉天であつた。此に於て、かつて中印度の一王國の太子で在た三十五歳の一青年は、今や靈の王國の建設者となつた。吠陀の詩人や、外道の隱者が、空しく天上に望んだ榮光ある王國を、彼れは地上に下した。涅槃の國是れてある。」

轉法輪

見渡せば、生死の大海澎湃として、雲、を浸せる暗潮の叫び、此處に結び、彼處に消ゆる溫泡の憐れさよ。『われ、今幸に光を見たり。道を獲たり。われ世の光とならん。船とならん』とは佛陀最初の誓てあつた。

實りは野に滿ちて居る。遠く刈るには先づ近く鎌を入れねばならぬ。彼れはかつて敎へを受けた二仙を度せんと思つたが、彼等は既に天に上つて居た。此に於いて、彼の自れを棄てた憐むべき五人の舊臣を救はんと決心して、波奈羅

奈國に進み、鹿野苑に向つた。偶五百の隊商が北印度から來るのに遭うたが、其の二人の主領は蜜麨を以て佛陀に捧げた。彼れ鉢を以て受け、二人を佛と法とに歸依せしめた。かくて、行く行く優波迦を度し、阿闍婆羅水の畔にて、風雨の難が起つたが、七日にして止んだので、鹿野苑に達して五人を救うた。

彼れは暫く此の苑に止つて道を說いたが、老弱貴賤の別なく、集まり來る者甚だ多かつた。耶舍、其の父母、及び妻を初めとして、其の友なる五十の長者の子皆な敎へに歸したので、正覺の後、三個月にして、出家在家(僧と俗の徒弟)を合せて、五十六人の徒弟を得た。此に於いて、佛陀は彼等に命じて各道を分つて、正敎を宣布せしめ、自らは頻毗娑羅王を訪ふべく王舍城に向つた。

先づ杖林に留つて道を說いた。然るに印度は夏は雨多く、艸木漸々として秀で、且つ洪水があるので、五月十六日から八月十五日までを雨期といふのである。佛陀は此の間歷遊を止めて、徒弟と共に一所に住つて、敎戒訓練を施された。雨安居即ち是れである。雨霽れて王舍城の路に上つが、此に尼連禪河の西岸は清い溪を成して、森林が碧雲を凝して居る。苦行林と稱して、多くの修行者の接

家であつた。時に優爲迦葉、那提迦葉、竭夷迦葉の三兄弟が首領として、火を祀つて居つた、拜火は固波斯の古俗であつて、夫れが印度に傳つたかどうかは疑問であるが、此の三人は多數の徒と共に、拜火を以て解脫の道としてゐた。三仙博學宏識、聲名一時に鳴つて居た。佛陀は此の林を訪うて、拜火の解脫の道にあらざるを說いて、彼等を誘化したので、三迦葉は祭祀の具を河に投じて佛に歸した。傳によれば彼等は千餘人の徒弟を率ゐて、佛に隨つて雲の如く、王舍城に入つた。

佛陀は頻毗娑羅王を說て、之れを化したので、王は竹園を献し、伽藍を建てゝ、佛に長く此處にあつて、國內に敎へを布かれん事を請うた。是れが佛敎に於ける寺院のはじめである。

此の時城外の那蘭陀村に舍利弗、日犍羅夜那といふ二人の婆羅門があつて、那蘭陀村の沙然の高足であつたが、師沒して、仕ふるところを求めてゐた。偶佛陀竹園にあつて道を說くと聞いて、直ちに來つて三寶(佛、法、僧)に歸した。佛陀は此の施人を優遇し、更に多くの戒律を規定せられた

佛門の顏回即ち大迦葉（マハーカシャパ）も此時竹園に於て、佛の麾下に連（つら）なつた。迦葉は婆羅門の出で、四吠陀に通じ、家巨萬の富を累ね、博愛仁慈、欝然として一代の棟梁であつた。佛、迦葉の來るを聞いて、自ら郊外に迎へて優遇した。

次て故郷を訪ひ、父王を初め多くの子弟を度した。後又王舍城に還つて尸多婆那（ヴナ）に在つたが、舍衞城の富商阿那他擯茶揭（アナータピンダカ）なるもの、慈善の志厚く、佛陀の來遊を請うたので、佛陀其の衆を率ゐて、舍衞城に行き、逝多林（ヂェータヴナ）の地を受けた。阿那他擯茶揭は此處に大伽藍を建てたが、有名なる祇園精舍（ヂェータヴナヴィハーラ）即ち是れである。かくて多くの民衆を度して、其の勢益昌んであつた。

勢昌んなれば嫉む者が出て來るのは自然の道理である。喬木は古來風多きを免かれない。此に佛陀の敵が現はれた。夫れは外ではない。實に其の從弟の提婆達多（デヴァダッタ）であつた。彼れは佛の徒弟であつたが頻毗娑羅王の王子阿闍世王（アジャータサトル）の保護を受け、伽耶の河上に伽藍を建てたので、一派をなさんことを佛に請うたが許されなかつたので、阿闍世王を敎唆して、父王を弑せしめ、自れ佛陀を殺して全權を握らんと企てた。阿闍世は父王を牢獄に投じて、餓死せしめたが、自ら懊

惱に堪へずして、遂に佛前に身を投じ、罪惡を懺悔して、却て佛陀の保護者となつた。此に於いて、提婆達多の謀は全く水泡に歸したが、彼れは更に佛の團衆中に分派を作らんとしたが、成らなかつた。其の他室利毱多（スッリーグプタ）の如きは、火坑毒飯を以て、佛を害せんと企てたが、亦能はなかつた。斯くの如く、多くの迫害陰謀はあつたが、少しも功を奏せなかつた。譬へば佛陀は深碧の火山湖の樣なものである。靜の極、寂の極、滿然不動である。偶々小兒あつて拳石を投ずれば、瀰々の波を描くかも知れぬが、波收まれば靜更に靜を加ふるのである。提婆達多や室利毱多や雲である。霧である。雨雲蓬勃として湧き、山霧簇々として起つても、白日一たび輝けば、湖面には隻影を止めぬ。雲を拂ひ、霧を排して、碧は更に碧を加ふるのである。

娑羅樹林の入滅

二十九出家三十五成道の佛陀は、爾來四十餘年、南行北征席煖まるに遑なく、東西に道を說かれたので、今や佛陀心泉の一滴水は、信度河の如く、恒河の如くブラフマプトラ河の如く洋々として全印度を潤すに至つた。

佛陀は雨期を祇園精舍に送つて、王舍城附近の耆闍崛山(即ち靈鷲山)に行き雨行大臣の外戰を問ふに答へ、殑伽河を渡つて毗舍離城に向うた。時恰も阿闍世王は此の河畔に、新王宮(波吒黎耶城)を建てゝ居たが、佛陀は其の繁榮を豫言して、城外の波梨婆村に行き、第四十五年の雨期を迎へた。此頃より激痛ある病を獲て、餘命の長からざるを知つたので、阿難を始め、多くの弟子に向つて屢〻死期の近きを告げ給うた。

「譬へば我れは故き車の樣なものである。年既に八十、吾れは老いてしまつた。一切のものは變化して須臾も止まらぬ。親しき者は別かれ、歎びし者は離れねばならぬ。天地も山岳も此の法則を遁るゝ譯には行かぬ。われは當に三月の後に、涅槃に入るであらう。汝等比丘よ。怪しむ勿れ。悲しむ勿れ。」

斯る敎誨は屢繰返された。阿難は泣いて悲むので、佛陀は詢々として無常の理を說き、生まれたるものは一度は必ず死し、會うた者は遂には必ず離れねばならぬ世の眞相を示された。加之我が滅後には、爾等精進努力して道を求め、慈悲博愛にして他を濟ふべきことを說かれた。

「阿難よ。我が滅後には、依るところなしといふこと勿れ。我が成道以來說く所の經戒が遺つて居るではないか。是れが汝等の據りどころである。

阿難よ。我れは內外の法を明かした。汝等自ら光となつて我が身を照し、法を光りとして身を導くべきである。決して他に依り、人を恃んではならぬ。」

斯くて多くの弟子を集めて敎誡し、共に拘尸城に向はれた。其の時波婆城の金工純陀が檬果園に休憩せられたが、純陀はこれを名譽として、佛に供養した。夕べに及んで、拘尸城を指されたが、病益劇しくなつたので、樹蔭に休み給うた。夫れより跋提河を渡り、淸水を飲んで氣力を回復し、日暮に婆羅林園に入り、双樹の間に北首して臥し給うた。

見よ。薄暗は徐ろに林樹を罩め來つて、遠村の草色は模糊として既に辨じ難い。天も地も唯一色渾沌の夜の墳墓に沈まんとして、時々刻々に其の休息の懷に向つて、急いで居る。淙々たる跋提河の水音が高く獨り此の滅落の門に輓歌を奏して居るのである。

佛陀は最後の弟子蘇跋陀羅を度し了つて、今やなすべき事は終つたのであ

る。多くの弟子は枕頭を圍んで、滿座寂然として聲がない。佛陀は重い眼を開いて、最後の說法をせらるゝ。

「汝等比丘よ。悲む勿れ。生あるものは必ず死し、會ひしものは遂には別れねばならぬ。我れは我がなすべき事を終へて、今涅槃に入る。汝等自らを光とし、法を光とせよ。我が說いたる法を克く守れ。然らば我れは死すとも、活きて居るのと同じ事である。泣くこと勿れ。生けるものゝ死ぬのは、世の定めであつて人力の動かし難きところである。汝等道に於いて疑あらば早く質せ。我れは最早涅槃に入らんとして居る。息ある中に速に質せよ。」

一人の應ふるものがない。佛陀は、斯く呼び給ふこと三度であつた。かくて二月十五日の夜、八十肉身の佛陀は涅槃に入り給うた。

跋提河の水は淙々として南に流れて休まぬ。流れ流れて海に入れば、其名と形とを失つてしまふ。佛陀の肉身も亦斯くの如くである。迦比羅城の太子と生れ、二十九にして城を出て、成道以來四十餘年印度の柱となつた肉身は、此に其の名と形ちを失つた。併しながら、跋提河の水は海に死せず、雲となり、雨となつ

て五印度に豐饒を惠み、雪となりてヒマラヤの尖頭に墜つれば、萬人皆仰ぎ見るのである。佛陀の肉身も拘尸城邊の塵土には歸せなかつた。彼れの精神は種子となり、風に乘じて世界に散つた。かくて、小乘となり、大乘となり、宗教となり、哲學となつて、世界の光となり、亞細亞の生命となつた。印度の地は佛陀を葬るには餘りに狹かつた。嵐毘尼の園、天地の間に生まれた彼れは、跋提河の畔天地の間に又涅槃に入つたのである。天地を家とした佛陀は今も尙われ等の信仰の裡に活きてゐるのである。

祭祀火爲レ最　諸偈歎爲レ最　人中王爲レ最　諸流海爲レ最　星宿月爲レ最
諸明日爲レ最　上下及四方　及於二衆生類一　若天若人者　諸佛是爲レ最

第二章　佛陀の聖訓

第五節　佛陀の威容

印度伽藍の石壁に、恒河の谿に匂うた古への藝術の姿を訪ねたならば、何人も溫容海の樣な佛像の鑿の痕に、夢なす平和の面影を偲ぶてあらう。佛陀の生涯は嵐の夜と霽れたる朝てある。人生に疑を抱いてから、菩提正覺の星を仰ぐまての十四五年は、雲飛び、濤躍る嵐の夜てあつて、爾後の四十餘年は風凪ぎ鶯眠る朝の海てある。從つて、一は健鬪の歷史てあつて、他は平和の歷史てあつた。故に、人は想像するてあらう。佛陀の說法は華咲く春の野を吹く微風の如く、言はず語らずの間に、近づく人の胸に泌む穩かさと和かさの限りてあつたと。實にさうてある。佛陀は慈顏を以て衆生を憫み、刃を以て迫つた者さへ、彼の前には其の身を投げて歸依する外なかつた程てあつた。併しながら、是れは其の一方面てあつて、決して全部てはない。彼れは邪を挫き正を宣するに當つては、秋

霜の嚴と、烈日の威を振つて一歩も許さなかつた。彼れは獅子王てある。眠る時は小兒もなづき、吼ゆる時は萬獸其の聲を絕つ。此の剛なる方面、嚴なる方面が時に當つて敎訓に現れて居る。然るに佛陀の傳記が、信仰の霧の中に朧げになり行くと共に、此の方面は殆んど消えてしまつて、後代の佛畫に至つては、唯夢の樣な姿を描く樣になり了つた。譬へば、矗立千仞、中霄を劈く雪山の白峰が、渺茫たる信度河邊一味寂靜の月光に融け去つた趣きがある。勿論、佛陀は餘り鋒鋩を現はさなかつたから、斯る結果を惹起すに至つたのてあらうが、而も極端に平和化せる後の佛傳ては、佛陀の人格は餘りに抽象的て、餘りに茫漠て、其の眞を得るに苦むことは爭はれぬ。佛陀平素の敎訓は詢々として倦まざる慈母の態度てあるが、而も時に當つては、一歩も許さゞる嚴父の概があつた。其の入滅前の說法の如きは、前者の最もよき代表てあつて、菩提樹下に無上覺を證した時の宣言の如き、彼の兇賊てあつて、後に出家した鴦屈利摩羅（アングリマーラ）に誨へたる言の如きは、山巖共に崩るゝ底の威容がある。要するに、佛陀の寂靜は活ける寂靜てある。猛火を呼び、風雷を叱する底の活機を包容した平和てある。故に時に當

つて、此の剛的の眞影が活現するや、燦として眼を射り、爛として、瞳を貫くのである。佛陀は誠に大死底の聖者であるが、而も死々の人ではない、威風凛々中原に坐して龍蛇を定むる底の偉丈夫である。隨つて、其の敎訓中には、日星海嶽の大文章がある。「文章は人格である」。此の點に於いて、佛陀は古今の第一人、短言隻句の間にも、不盡の光を放つてをる。佛陀の訓言は此の意味に於いて、最も嵩高にして雄渾なる大文學とみることが出來やう。

第六節　佛陀の訓言

我れは一切を征服せり

佛陀の敎訓中、最も偉大なる精神を發揮して居るのは、成道の宣言と新生の宣言であつて、最も博愛慈悲の方面を示すものは、海水一味の敎訓と入滅前の說法である。「我れ光を見たり、我れ道を得たり」との獅子吼は、廣奚僅に六百里の一王國の太子が、此に一切の時間と空間とを脫して一大覺者となつた凱歌の聲である。後來佛敎なる大王國建設の叫びである。終に信仰の靈化に依つて宇

宙の實在となつた七尺肉身の梵音であつた。これ實にいかに人間の威力の偉なるかを示した、人界の誇りである。人の心は綿火藥の樣なもので、其爆發の機運に遭遇せざる間は、綿の樣に力なく、灰の如く平凡たるを免れぬ。彼等は永劫に愚人凡人として、社會の大海に僅に一圈の小波を描いて去るが、偉人は自が心に火を發見して、此の綿火藥に點ずるので、轟然として山を劈き、谷を撼かして、萬古の焰となるに至るのである。佛陀の胸に輝いた燦爛たる其明星は、幾億民衆の北斗となつた。其の成正覺の宣言は遠く雪山を吹下す天鎭の如く、幾多倨傲の帝王を草の穗の如くに靡かしめ、婆羅門を椰子の葉の如くに戰かしめた。『戰鬪は終れり。今や一切は我が脚下に伏せり。魔の軍は碎かれたり。衆生よ。永久の榮光は汝等痴愚の闇を照さん。疲れたるものは我れに來れ。我れは船師なり。汝の重荷を載せて生死の海を渡さん』とは佛陀救濟の最初の聲であつた。此の正覺成就の宣言は多くの經典に多少の差異を以て、現れて居るが、今その一二を示さう。

我已降伏諸世間　成就眞足種種智

於諸法中不染著　永脫一切愛網羅
能爲他說諸神通　是故名爲一切智
我無有師內自覺　世間更無與等雙

（佛本行集經）

即ち、我れはあらゆる欲情や、外物を征服して世界人生の根抵に徹し、圓滿無比の大智を得た。世間外物の爲に惑はされず、永く束縛を脫して自由を獲た。かくて諸人の爲に神通を說くを得るに至つた。是の故に我れは一切知らざるなき智者である。我れは師について學んだのではなく、自ら考察冥想して、自覺したのであつて、世に等しきものはない。實に、天に於いても、人に於いても、最勝者である。

諸子或は其の眼中人なきに驚いて、稍もすれば、彼れは傲慢の人であつたと思ふかも知れぬ。最も幾分は經典編纂者の誇張も混入して居やうが、大體に於いては、是れが佛陀の自ら述べたところと見て大なる誤はあるまい。慈悲溫和なる釋迦の口からかゝる權威ある言を聽くのは、全く其の自覺內容の叫びた

るに由るので、其の偉大なる聲には、萬籟も爲に聲を呑むだてあらう。更に類似の文を引用しやうか。

我最上最勝　不着一切法
自覺距稱師　無等無有勝
自覺無上覺　普知成就力
我至婆羅捺　擊妙甘露鼓
謂得諸漏盡　我害諸惡法

自然得解悟　如來天人師
轉無上法輪　勝者如是有
優陁故我勝

（中阿含經）

余の見る所によれば、後世の讃頌文學（梵讃、漢讃、和讃等）は、勿論、宗敎意識の中に現るゝ師主欽仰の念と、音樂、韻律等の外因に刺戟せられて、發生したのであらうが、又其の水脈を原始經典の斯る偈頌に引いてをるのではあるまいか。後に馬鳴の「所行讃」が讃歌海に朗々たる韻律の波紋を描いたのは、其の由つて來るや遠しといふべきである。

海水一味

佛陀は刹利種の出て、謂ゆる武門の人であつた。其の出家成道の後、大法を宣布するや、多くの弟子が集り、其の中には、刹利族も多かつたが、其他の階級も少しとしない。佛陀の立脚地は前に述べた如く、自己の解脱を求むるよりして、清き道を尋ねたのであつたが、其の自然の結果として、在來の煩瑣なる空論を厭ひ、化石したる婆羅門の法律教條を排斥した。當時の社會は四姓(婆羅門、刹利、毘舍、首陀)の別嚴重にして、宗教上の事は自ら「再生族」と稱する婆羅門の獨占に歸してをつて、教育學問の惠みは最後の首陀には及ばなかつた。其の他會食や結婚の事についても、又嚴格なる規定があつた。然るに、釋迦族から起つた佛陀一たび道を傳ふるや、此の階級的の差別見を打破して顧みない。故に其の弟子には毘舍、首陀は勿論、發心したる兇賊の類迄も列るに至つた。佛陀は是等の弟子間に區別を設けなかつたのみならず、賤族の者をも一樣に愛撫した。是れ平等の法音を說く宗教に於いては、固より然るべき事ではあるが、而も、よく當時の習慣風俗を考へてみれば、實に破天荒の出來事たるを失はない。實際此の小事件と見ゆる事が、社會の耳目を聳動した事は疑を容れぬのである。佛陀の此の

社會的無差別見は事實に於いて、印度思想の革新を起す戰鼓となつた。佛陀が賤族の弟子を愛護したので、團衆中の婆羅門出の弟子達には、往々不快の感を抱いた者があつた事は、經典の處々に現はれて居る。而も佛陀は之れを諭して、其の平等主義を以て始終せられた。優波離の如きは、固、首陀族の理髮人であつたが、後に持律に於いて優秀の譽れを得るに至つた。其の常に弟子を諭し給うた教訓は即ちかの海水一味の譬喩であつた。

「汝等はがの四大河を知つて居やう。かの四大河は或は信度と呼ばれ、或は恒河と呼ばれ、或は婆叉と呼ばれ、或は私陀波と呼ばれて居るが、一たび流れて海に入れば、其の名と形とを失つてしまふ、かくて、最早信度とも恒河ともいはぬ。唯大海といふ名があるのみである。人も亦斯くの如くである。或は婆羅門と呼ばれ、或は刹利と稱し、毘舍、首陀と名づけて居るが、一たび鬚髮を除き、袈裟を纏うて、道に入れば、最早、婆羅門、首陀等の名字は消滅するのである。皆沙門と呼ぶ。汝等よ。如來の衆は猶大海の如く、四諦の教に遵つて、涅槃の城に入るのである。」

當時の社會にとつては、實に晴天の霹靂であつた。佛陀は事實に於いて自由平等なる新社會の建設者である。賤族が翹望してゐた「ユートピア」は現實となつた。佛敎の敎團は沙上の家ではなかつた。此の偉大なる精神の田地に下された平等の一種子は、芽を吹き、幹を捧げ、花を着け、欝然として「民の樹蔭」となつた。實に佛陀の平等見は、階級壓制の酷暑炎くが如き印度の天に、清泉迸る樹蔭を供したのである。餓えたる者、渴けるものが、東より、西より、集つて來たのは偶然の現象ではない。凡そ宗敎は學者の書架より組立てられるものにあらずして、活きたる生命の鼓吹である。今日より見れば、寧ろ平凡陳腐なる無差別見は、實に佛陀をして一個の隱者に止めずして、社會的革新家たらしめた最も痛切なる動機である。佛陀の此の敎訓は潮の如くに、五印度を蕩搖した。其の偉大なる精神は三千年の後迄も、遠濤の音の樣に、われ等の耳にひゞくのである。是れを佛陀の社會改良の宣言書として見るならば、津々たる趣味は自ら其の間より、湧き來るであらう。

我れは農夫なり

佛陀の道は農夫の道である。平民の道である。王侯の道ではない。僧侶の私道ではない。佛陀は後に說く樣に、非常に巧妙なる譬喩を以て、あらゆる民衆を感化誘導せられたが、中に就いて、殊に光を放つて居るのは、「我れは農夫なり」との宣言であつた。固より、佛陀は到るところに、「我れは船師なり」、「我れは良醫なり」と說き給うたのであるが、而も余は「我れは農夫なり」の說法に於いて、最も痛切なる敎訓を聽くのである。

後章に說く如く、印度は河流の土地構成力に依つて、殆んど其の土壤を養ふを得る事は、恰もかの埃及のナイル河に於けるが如くである。故に河は一面豐饒の母であるが、而も時には非常なる大氾濫大橫流を生じて、爲に田野を荒廢させることも甚だ尠くない。故に怠らず勤めざれば、其豐饒を保つことが出來難いので、印度の農夫は一日の休息なく孜々として働いて居る。かくて、初めて穰々たる收穫の波を野にみる事が出來る。是れ恰も心を治むるものゝ如くである。王陽明が「山中の賊は討ち易く、心中の賊は克ち難し」といつた樣に、一刻と雖も油斷を許さざる樣は、古い譬喩ではあるが、誠に「坂の車」に類してをる。佛陀

も「百萬の敵に勝つを強ち勇者とは稱せぬ。唯よく己れに克つ者こそ眞の勇者てある」と申された。人の心の搖き易いことは、河原に生えた蒲の華の如くてある。漣を起す程の、微風だに起れば、忽ち飄々として、落ちて流れを逐ふのてある。「獨りを慎み、意を誠にせよ」とは古人の敎てある。われ等は常に心の莠を拔いて善穀の芽を保護せねばならぬ。佛陀が「われは農夫なり」といはれたのは、誠に深き意味を有するのてある。

佛陀は成道第十一年の頃、王舍城附近の達拏山の精舍に止し給うたが、偶婆羅門の迦尸婆羅墮闍なるものが、農祭を行ふ事があつた。佛陀は丘の上に行いて、之れを觀覽せられたが、傍に集まつて居た民衆は食を了へ、佛陀の周圍に集つて、敬意を捧げた。時に此の婆羅門は喜ばずしていふやう「彼れも我等の如く自ら働くならば、四海に王たるに至るてあらうに、何の爲すこともなく、空しく光陰を送り、食を乞はんとして、我れ等の農祭に臨んだのてあらう」と憤りをもらして、さて、佛陀に向つて申すやう「沙門よ。われは田を耕し、種子を播いて、實りを刈る。汝も亦耕するに如くはない。斯くせば食らふべき物を得やうに……」頗

る侮蔑の色を表した。此に於いて、佛陀は徐ろに口を開いて羅婆門よ、耕して、播くのは汝一人てはない。佛陀も亦耕し播いて、朽ちざる實りを刈るのてある」と答へ給うた。婆羅門怪みて「瞿曇(Gotama即佛陀の性)よ。犂も牛も、獸を追ふ針もないが、いかにして耕さるゝか。果して農夫ならば、これらの器は何處にありや」と反問した。此に於いて、佛陀は靜に「婆羅門よ。我れは法の田に於いて、我慾の莠を拔く農夫てある。智慧の犂を以て、清き種子を播き、戒を勵んて、涅槃の實りを刈る。汝も亦法の田に播いて、涅槃の實りを收めずや」と諭し給うた。婆羅門は深く之れに感じて、道に入り、遂に阿羅漢果を得た。

涅槃の爲に播く人は幸なる哉。彼れは地の農夫てなくして、天の農夫てある彼れは智慧の犂と、不放逸の勵みとに依つて、限りなき路を拓く。其の路は直ちに解脫の城に入つて還らない。而して、そこに、永遠なる實りを收むる。「我れは農夫なり」清き種子は佛陀に依つて、三千年の古へに頒たれた。而も未だ實りを刈らざる者は「我れは農夫なり」の自覺なき人てある。

汝は新にせられたり

婆羅門も、刹帝利も、毗舎も、首陀も、一たび三衣を着けて家をいで、道に志せば、皆等しく佛の子となり新にせられたる人となる。差別に死んで、平等に活くる、」是れが新しき生命の水に、過去の罪を洗ひ淨めた、佛弟子の境界である。故に彼等は肉的生命を滅して、靈的生命を獲た更生無垢の小兒である、隨つて、以前の善惡職業の如何を顧みる必要のない事は、恰度、大海が清流、濁水共に辭せずして、等しく容れて咎めないと同じ事である、よし彼れ等の踐み來つた道が不幸にして、盜賊追剝の類であつたにせよ、彼れ等は寧ろ憐むべき無智の輩である。彼れ等が左樣な職業をなすのは、人の人たる道を知らないからである。佛陀は世の慈母である。惡い小供を一層愛するのは、父母の情である。況んや、舊を悔い膝下に伏して、求哀懺悔するに於てをや。佛陀大悲の露が、かゝるいぢけた撫子の花に愈滋くかゝるのは誠に所以あることゝいはねばならぬ。佛陀は勉めて彼れ等を奬勵し、誘導し、彼れ等が其の舊惡に戰いて、卑屈自棄に陷るのを防がれた。汝等は再生して、新にされたのである。汝等の舊惡は今や佛日の光をうけて、春の淡雪の樣に消えてしまつた。懼るゝ勿れ、汝等は佛子となつて、未だかつ

て罪を犯さざる天の赤兒である、愛すべき人中の華である。鹿の如く恐れ怖ぢずして獅子の如くに道に進め。人もし汝を譏らば、われは未だ曾つて罪を犯さずと答へよ」と。

佛陀はかつて、成道第二十年の雨期を、舍衛城の祇園精舍に送り給うたが、折しも附近の森林中に、鴦屈利摩羅なる兇賊があつて、城市を荒し、民を劫殺して、其の指を採り、束ねて頭を飾つたので、指鬘と稱せられた。然るに、彼れは其の獲た所の指の數が、かねて願ふ所の數に滿たぬので、遂に其の母を殺して、之を補はんとした。佛陀之れを聞いて、深く悲しみ給ひ、遂に自ら森の棲家に、彼れを訪ねて說服せられた。此に於いて、彼れも其の罪の恐るべきを悟つて、弟子となるに至つた。然るに、彼れ三衣を着け、鉢を手にして、かつて自が住みし村に行いて食を乞うたが、村人は彼れの名を聞き戰慄つて、少しも施さなかつた。故に强情なる彼れも大いに弱り果てゝ精舍へ引還した。然るに、一人の女が、路に產氣を催して、苦んで居るのをみて、同情の念に堪へなかつたので、之れを佛陀に告げた。時に、佛陀は指鬘に向つて誨へ給ふやう。汝比丘よ、直に其の側に行いて、「余は

生來未だ曾つて故意に生物を殺した事はない。故に、余に依つて、汝は其の苦々
免るゝてあらう」と告げよと。指鬘は之れを聽いて、打萎れて、「世尊よ。私はかつて
多數の人の生命を奪ひましたから、今更どうしても左樣な虚言は耻かしくて
申されません」と答へた。是に於いて、佛陀は嚴然として諭し給ふやう。

比丘よ。汝はかつていかにも、多くの人々を殺した。而も是れ汝が林中にあ
つた時の事ではないか。今や汝は兇賊でもなければ、惡人でもない。實に佛
陀の子である。汝は生まれ更つたので、以後少しも罪を犯した事はない。故
に「我れは殺さず」といふに何の愧づるところがあらう。新たに生まれた者
は、新しき人である。汝は新しき行路に上つてから、未だ罪を犯さぬではな
いか。

丘の椰子樹は其の蔭を善人にも、惡人にも惠んで惜まない。「世の樹蔭」なる佛陀
も亦斯の如くであつた。生まれ更りたる者は幸である。彼れは佛陀の懷に新し
き嬰兒として生まれ、八正道の船に乘じて、涅槃の岸に到る。佛陀の慈悲は雨の
如く、苗にも莠にも等しく其の惠みを頒つのである。汝は新にせられたりとは、

罪ある者、穢れし者には、如何に永久の歎びであらうか。

大唐撫運　膺圖蒼昌　化行六合　威稜八荒
身毒稽顙　道俗來王　爰發明使　瞻斯道場
金剛之座　千佛代居　尊容相好　彌勒規摹
靈塔壯麗　道樹扶疏　歷刼不朽　神力焉如

（唐王玄策所建佛陀伽耶漢字碑銘）

第三章　佛陀と譬喩

第七節　說法の態度

前章に論じた樣に、佛陀は實に自然詩人であつた。あらゆる物は、彼れの金口に上れば、忽ち燦然たる光を放つのである。彼れは啻に輝く星や、流るゝ水に無限の生命を與へたのみならず、あらゆる人事や、器物や、城廓や、悉く其の敎化の材料とならないものはなかつた。實に彼れに取つては、路傍の牛糞さへも、衆生濟度の善巧方便となつた。死物を拉し來つて、活人を敎化する大手腕に至つては、恐らく前後三千載其の比があるまい。敵馬に鞭つて、敵將を追ふ底の七擒八縱の妙は、吾人之を孟軻氏に於いて見るが、併し、彼れは天下人の舌頭を截斷するだけ夫れだけ、詭辯に陷るを免れなかつた。然るに、我が佛陀は實に海潮音の說法流るゝが如くであるが、而も詭辯に陷ることはなかつた。此の點は孟軻氏が縱橫家の風あるに反して、佛陀は徹頭徹尾、醇乎として醇なる聖師の風があ

つた。「赤心を披いて、他の腹中に置く」とは佛陀の態度であつた。金工に遭うては、鐵と鎚とを談じ、農夫に遭うては、鋤と牛とを談じ、牧女に遭うては、乳糜の甘味を論ずる樣に、佛陀は對手に應じて、或は「我れは生死海を渡るの船師なり」と叫び、或は「我れは惡業の莠を拔く農夫なり」と諭し、虎に說くに虎の言を以てし、狼を和ぐるに狼の語を以つてした。故に善く其の言はんと欲する所を言うて、十分に理解させる事が出來、厲語せずして俗談平話の間に、十分の功果を收めた。其の方法は非常に巧妙であつて、少しも補綴の痕がなく、自ら多趣なる物語となつて居る。當時の人々がいかに佛陀の說法を樂んだであらうか。實に良藥にして甘いとは是れの謂である。隨つて其の敎訓のやり方がいかにも、開發的であつて、注入的ではない。此の點に於いて、彼の古希臘の哲人ソクラテス其の人の「產婆術」に比すべきである。かくて、佛陀は自家の淸新なる敎へを平易に、通俗に、聽者の意識の網に知らず識らずの間に編み込んだ。或は古來傳つた童話を利用した事もあらう。或は當時愛唱された俚謠を引いた事もあらう。要するに今日の語を借りていへば敎授法の妙を盡くしたものであつた。即ち彼れが、對

手の人々の熟知する傳說や、俚謠や、格言や、眼前口頭の事物を先づ引き來るのは、一面には聽者の興味を惹起すると同時に、其の觀念界を整理して、更に次の言葉に耳を傾けさせる。此に於いて、徐々と其の敎訓に說き及ぼす樣にするかくすれば、觀念の聯合が容易で、速に同化されて、忽ち聽者のものとなつて了ふので、聽衆は勞せずして十分の感化を享くることが出來て、厭くことを知らぬ。

愚人を救ふには實に有効な方法であつたといはねばならぬ。佛陀の說法は初めも中ごろも終りも義皆善し等讚めてあるのは、恐らく此の邊の消息を傳へたものであらう。實に彼れは此の一點に於いても、有數の敎育家と稱する事が出來やう。又人を激勵するときや、反省せしむる時も、自ら切齒發憤せしむる樣に說き、自ら慚愧後悔の涙襟を沾すに至らしめた。實に霞の中に降る春雨の路行く人の袂を潤すの趣きがあつた。隨つて、夫れ等の譬喩の中には、童話としも上乘なるものが多く、或は孟子篇中に置いても、辨じ難いものが枚擧に遑ない程である。此の點に於いて、彼れは「メルヘン」作者としても鐵中の錚々たる者であらう。完全な譬喩譚の體をなせるものゝみを拾つても、其の數は數百篇に下

るまい。漢譯經典の中には無數の譬喩譚があるし、尼波羅で發見された梵經の中にも多くの阿波陀那（Avadāna. 出曜又譬喩とも譯す）があつて、ミトラ氏は百篇以上を擧げてをる。而して、後世に至つて、此れ等の譬喩は集錄されて譬喩集が出來るやうになつた、即ち雜譬喻經、衆經撰雜譬喻、舊雜譬喻經、雜譬喻經、百喻經、賢愚經等は其の主なるものである。而して一方には偈頌ばかりの經典に譬喩を以て註釋を加へて一經となす事も行はれたので、法句經に對する法句譬喻經や出曜經の如きは此の一例である。

第八節　譬喩說法

毒箭身に立てり

佛陀が理論を尙ばざりしことは、前に既に述べた通りである。故に弟子の問が煩瑣な理論に亘る時は之れに答へ給はなかつた。或時比丘の摩羅鳩摩羅（マラクマラ）なるものが、種々うるさい事を問うたので、佛陀は之れを呵し給ひ、最も適切なる次の譬喩を說き給うた。

道行を修めずして、つまらぬ理論に拘つて居るのは、人あり、身に毒箭を被つたから、親しい人々が彼れを憐んで、毒を拔く醫師を索むるに、彼れ之れを肯せずして下の樣な事をいふが如くである。彼れはいふやう、「われは箭を拔く前に次の事項を詳に知らねば滿足せぬ。此の箭を射た人は、脊が高いか、低いか、若くは中位の人か。色は黑いか白いか。身分は刹利か、婆羅門か。若くは居士か。若しくは工師か。東方に住んで居るか、南方か、西方か、さては又北方の人か。夫れを知る迄は箭を拔くことは出來ない。猶又其の弓は薩羅木で出來て居るのか、多羅木か、或は又翅羅鳶掘黎木か。是れが分らぬ中は箭を拔く譯には行かぬ。又彼れの筋は牛筋であるか、羊筋であるか、抑〻氂牛筋であるか。又彼れの弓弛は白骨であるか、黑漆であるか、赤漆であるか。弓の弦は牛筋か、羊筋か、但しは氂牛筋か。又彼れの箭は舍羅木で造つたのか、竹製か、或は羅蛾黎木か。又其の箭筋は牛筋か、羊筋か、又は氂牛筋か。其の箭の羽は、孔雀であるか、鶴か、或は又鷲の羽であるか。其の鐵は婆蹉か、婆羅か那羅か、又は伽羅鞞か。又た之れを作つた鐵師は、脊が高いか、低いか、或は中程の人か。色は黑いか、白いか。家は東の方か、南

の方か、西の方か、或は北の方か。すべて以上の事を詳に知らねば滿足は出來ないから、箭を拔くことはいやだ」といつてどうしても毒を除くことを肯ぜぬ。此の人はかく種々な事を尋ねて居るうちに、毒が身に同つて息が絶ゆるであらうが、誠に憫むべき愚人である。之れと等しく、世の愚人は道行を修めず、精進勉勵せずして、死後世界ありや。世界なきや。世界は始ありや、始なきや。世界は終りありや、終りなきやと譯のわからぬ事を詮索して、解脫の道に進むのを忘れて居るが、生命は短い者である其れの一つだも分らぬ中は忽ち盡きてしまひ、身は解脫を得ずして、永く流轉して苦みを受くるであらう。唯頼むべきは道ではないか。德を修め、着實に適切緊急なる智を磨けば、自ら涅槃を證するのである。道は遠くはない。愚人諸の戲論を事として、出離の道に近づかぬのは、恰も毒箭を被つて、命旦夕に迫つて居ながら、猶弓や箭の形や製法を探して居る樣なものである。速に汝に歸れ、外に求むる暇も必要もないのである。

水は濁りぬ

佛陀の圍衆に羅雲といふ比丘があつた。未だ道を得なかつた時は、心が荒々

しく、人に僞ることが多いので、嫌はれ者であつた。佛陀が之れを憐んで、「汝は賢提精舍に行いて、よく言語を慎み、意を攝め、戒律を保つて修行せよ」と仰せられた。そこで、羅雲は禮を作して、敎に遵うたが、其の後九十日間は、深く心に慚ぢ、先非を悔いて修行を怠らなかつた。佛陀は羅雲の有樣を見んと思うて、賢提精舍に行つて羅雲を訪問し給うた。羅雲は大に歡んで、早速繩の敷物を出して、其の上に佛陀を招じた。佛陀は坐し了つて、「我は遠く來たから脚が汚れてをる、羅雲よ。盥に水を持ちて來よ」と仰せられた。羅雲は盥に水を運んで、佛陀の脚を洗うた。時に佛陀は「羅雲よ。汝は定めて盥の中の水を見るであらう」と仰せられたから、羅雲は「はい、よく見えます」と答へた。佛陀は更に言葉をついで、「此の水で漱いだり、飲んだりすることが、出來やうか」と問はれた。羅雲が申すには、「此の水は元は清水でありましたが、今は濁つてしまひましたから、とてもそんな事は出來ませぬ」佛陀は容を更めて、「羅雲よ。よく聽け。汝も亦此の水の通りである。道に志して、沙門となつたが、汝は窃に、我れは王族の末に生まれたのに、世の樂みを捨てゝ出家した、誠につまらぬと思つてゐて、勉强もせねば、放逸で、言葉に誠がな

く。諸の邪念が心に充ち滿ちて居る事は、恰度此の濁水の再び用にたたぬ如くである」と呵せられ、「斯樣な水は棄てゝしまへ」と仰せられた。羅雲は盥の水を捨てたが、佛陀は更に仰せらるゝには、「此の盥には食物を盛ることが出來やうか」羅雲は「汚いものを入れる器なれば、とても、出來ませぬ」と答へた。佛陀は「汝も亦此の盥の如くである。出家はしたが、誠なく、强情我慢で、かつて惡名を受けた。汝も此の盥の食物を盛ること能はざる樣なものである。」といつて、脚のさきで盥を撥ねやられたところが、盥はころがつて、自ら跳ね、自ら墮ちて、漸く止つた。佛陀はそこで、更に「羅雲よ。汝は盥の壞るゝのは惜くはないか」と仰せられたところが、羅雲は「固より洗足の器で、安價なもの故、別に惜しくもありませぬ」と申した。佛陀は直ちに言葉をついで、「汝も亦是の通りである。折角志を立て、沙門となつたが、身を慎まず、口にはつまらぬ事を言ひ、人を誹しり、中傷讒謗を逞しうするので、人に愛せられず、智者に惜まれぬ。今死ねば、輪廻して、自生自死、苦しみは限りなく、諸佛や聖賢も敢て汝を惜まぬ樣なものである」と戒められた。羅雲は之れを聞いて、非常に愧ぢ入つたので、佛陀は

更に次の譬喩を說き給うた。

昔ある國に王樣があつて、一つの巨象を飼うて居つた。其の象は勇猛て戰に臨んて非常に强い。其の力は他の小さい象の五百頭に當る位てあつた。偶〻軍が起つたので、此の巨象に鐵の鎧を着せ、象士が之れに乘つて、二つの牙には、二つの戟を、兩方の耳には二つの劍を、四つの脚には、曲つた刃を、夫れ々々縛り付け、更に尾には、鐵の棒を結びつけた。かく九つの兵器をつけて、嚴しく象の身を防禦したが、象の鼻ばかりは隱して、一切鼻て鬪はせぬ樣にした。凡そ象は鼻が柔かいので、矢ても鼻に當たれば、忽ち死んてしまふ。故にかく鼻ばかりは嚴重に覆うて露はさぬ樣にしたので、象士は是れて大丈夫だと喜んだ。かくて戰に臨んだが、交戰酣なるに及んて、象は連りに鼻を延べて劍をつけてくれよと迫つたが、象士は頑として與へなかつた。是れは王や群臣が此の象を深く惜むからてある。羅雲よ。人九惡を犯すのは、口を愼まぬからてある。故に深く口を護らねばならぬ。戰場て象の鼻を護つて戰はせぬのは、箭に當つて死ぬのを恐るゝからてある。人も亦斯くの如くて、十惡を犯し、三塗に沈淪して、限りなき苦みを受

くる。若しよく十善を行ひ、口と身と意を愼み、諸の惡を犯さねば、道を得て、長く苦みを離れ、永久の歡びを得るに至るのてある。」

羅雲は之れを聽き、自ら深く慚愧し、勉强修行して、遂に道を證したとの事てある。

更に此の話に類似した鶴と龜との興味深い譬喩があるから、參考の爲めに左に揭げやう。

默々夫婦

鶴と龜

昔一疋の鱉が居つたが、偶旱がして湖水も澤も乾涸びてしまつて、大に困つたものゝ、自分ては餌のある處に行くことが出來なかつた。時に大鶴が多く其の邊に集つてゐたので、鱉は鶴に歎願した。そこて鶴は鱉を口に啣へて飛んて都邑の上を行つたが、お饒舌の鱉は此處はどこだ、なぜ止まらぬかと問ふたので、鶴は答へんと覺々ず口を開いた。憐にも鱉は忽ち墜ちて、人に捕られてしまつた。世の愚人が口(言葉)を愼まずして禍に陷ることは、恰度此の如くてある。

昔或處に夫婦があつた。偶〻餅が三つ手に入つた。一つ宛食べたが、殘つた餅は一つ、どうも仕樣がない。先に口利いた者は食べぬ事にしやう」と約束した。二人は、默つて居た。

暫くすると泥坊が入つて來て、家財道具を皆んな盜みかゝつた。二人は前の約束があるので、見て居乍ら何とも言はない。泥坊は好い事にして妻を犯さうとした。夫は今度も口を利かない。そこで、妻はたまらず「唯餅一つで泥坊が入つても默つて居る者が何處にありますか、」と叫んだ。夫は聞くより、手を拍いて「もう餅は俺の物だ。食べさせる事ではない。」と言つて笑ひころげた。此の話を聞いて笑はぬ者はなかつた。

世の愚人も亦此の通りである。瑣細な名利の爲に、靜默を裝うて居るが、種々の情慾の爲に侵されて、地獄、餓鬼、畜生の三途に墜落し、道を求めないで、世上の快樂に耽り、非常な苦みに遭うても、少しも患とせぬ。是れでは、昔の餅分夫婦と少しも異つたところはない。

三獸河を渡る

善男子よ。譬へば此に兎と馬と象の三獸が恒河を渡るとする。兎は脚を河底に着けずに渡り、馬は河底に脚を或は着け、或は着けずに渡り、象は確と脚を河底に着けて渡る。恒河は即ち十二因緣の河である。敎へを聽いて覺る聲聞は兎の如く此の河を渡り、機に觸れて覺る緣覺は馬の如く渡り、如來は象の如く渡る。聲聞、緣覺は煩惱は斷じても、猶迷の習氣が殘つて居る。如來は一切の煩惱も、迷ひの習氣も、根から拔いて居る。故に如來は佛である。

月の鼠。日の鼠

一切の衆生は世の樂みに桎されて、無常を思はず。大患をも苦としない。譬へばむかし死刑になるべき囚人が牢獄に繫がれて居たが、刑を怖れ破獄した當時の法律に據れば、死刑囚が逃げた時には、狂象を放つて蹈殺させる規定であつた。今度も、狂象に罪人を逐はせた。罪人は象を懼れて墟の中に隱れた。豈圖らんや。此の墟は毒龍の棲家で、一匹の巨大な毒龍が眞紅な口を開いて上を望んで居る。四隅には四匹の毒蛇が蟠つて傍に一叢の草が生えて居た。囚人は戰き恐れて、草の根に縋つて、ぽつと息をついてをると、ちよろちよろと二匹の白鼠

が出て草の根を嚙る。其の時、傍に一本の繁つた大樹があつて、樹の枝に蜜が出來て居た。其の滴る蜜が日に一滴宛囚人の口に落つるので、囚人は夫ればかり考へて、恐しさを忘れ、墟を出てやうともしない。

此にいよ牢は三界に喩へ、罪囚は衆生に喩へ、狂象は無常に、墟は家に、毒龍は地獄に喩へ、四蛇は四大(地、水、火、風)に、草根は人命に、二匹の白鼠は日月に喩へてある。衆生は空しく世の樂みを貪つて、大患の來るを考へないで、其の日を送つてをるが、世相は無常であるから、宜しく之れを觀じて、衆苦を解脱せねばならぬ。

第九節　譬喩說法に現はれたる自然美

雪山と恒河、是れが佛典に描かれた清い自然の双璧である。印度の北境は謂ゆるヒマラヤの峻嶺が天の關門を擁し、仰げば、二萬九千二百尺のエヴレストが碧霄を劈いて五印度の地に君臨し、其の萬古の白雪は直に「不滅」其の物の體現である。かくて、漸次南の方へ高度を減じて、恒河信度兩河流域の平原をなし

其の南端には更に高燥なる臺地を作つて居る。ヒマラヤ山は更に其の背後に內脈を起して、第二の「雪の壁」を作り、此の二重の山壁の外に、大谿谷をなして、落々たる大水槽を形作る。此の水槽の水が溢れて、信度、ストレヂ、ブラフマプトラの三大河となり、印度文化の母となつてをる。印度と西藏との間には、延長二十八里の大氷河が有史以前の祕密を鎖して、下方の谿谷に向つて、徐々に其の氷塊を吐く。此等の山岳は、印度洋から飛んで來る綿の樣な水蒸氣を遮つて、雨となして平原に送る。見渡す限りの森林は遠く暗碧の輕景(パンラマ)を擴げて、謂ゆるヒマラヤ檜が城郭の樣に聳えてをる。

第二地方の平原には、信度河が大支流ストレヂを併せて、パンジナプに至つて、更に多くの小流を合して、印度洋に急ぎ、ブラフマプトラ(神の子の義)河はヒマラヤの裂隙を穿つて、一たびは西に、一たびは南に折れて、ベンガル灣に注いでをる。かくて共に約八百三十里の長さを有するのである。更に南方傾斜地からは、恒河が南下して、支流ジウムナを集め、海に近づくに及んで、ブラフマプトラに合し、網狀の水路を描いて、其の七百里の旅程を了へてをる。斯くの如く、信

度河は北印度平原の西部を、ブラフマプトラは其の東部を、恒河と其の支脈とは中部地方を潤すのである。此等河流は實に印度國土の創造者であつて、其の土地形成力は驚くべきもので、印度即ち河流で、印度から河流を扣除すれば、文化も產物も零となるといつても敢て過言ではあるまい。殊に恒河及び其の支流は田野に豐饒を惠むこと第一に居るので、印度人は「慈母恒河」と稱し、其の水を神聖とするに至つた。加之、實に現時の大都府も多くは其の影を此の河に映じてをる。即ち恒河の畔には、カルカッタ、パトナ、ベナレスがあり、支流ジュムナの沿岸には、アグラ、デリーの二市があり、本支合流の地にはアルラハバドの白壁が椰子の葉蔭に隱見してをる。收穫は年二回又は三回に及び、小麥、豌豆、蠶豆、油菜の花は春を飾り、晩稻其の他の穀物は十一二月の野に波うつ。見渡せば、泥土に成れる村落、高貴なる樹木の間に點綴して、棕櫚は一面に繁り、榕樹は高く其の根を列ね、丘にはそよ吹く風が亭々たる菩提樹を搖つて、其の綠度の强い鮮かな葉を光らして居る。野には綿が大きな紅い花をつけて、熱帶の朝を歌つて居る。佛陀は實に斯る河畔に逍遙した大詩人であつた。

詩人は實に「第六官」を惠まれた、天の使である。彼れは無絃の竪琴を抱いて民衆の上に立つ。名もなき草の一葉も、彼れには、永刼の生命を囁いて居る。桂の香ふ希臘オリムピアの昔はホーマーを產み、蔓草靡く古羅馬の廢墟には、ダンテが出た。其の韻は「イリヤッド」となり「オデスセイ」となり「神曲」となつて、永く人間の音樂となつた。ライダルの山は、ヴアヴワアスの遺卷に、不盡の幽趣を寄せ、瑞西の湖は、シルラーの牧歌に「無限の慕ひを遺す。いざさらば、白鶴浮ぶ恒河河畔の詩人はいかに自然を歌つたてあらうか。

ショーペンハウエルがいつた樣に、自然の觀賞は、肉に限られたる「我れ」を、受て拒まざる對象の海に投げ入れた恍惚の境である。勿論、山は山其の物として、石は石其の物として、美しいのであらう。併しながら、我れ等が自然に對して惹起す汲んで盡きざる幽味は、我れを彼れに投げ、彼れを我れに收めた、物我一如の刹那から流れいづる泉ではあるまいか。佛陀の觀たる自然は其の心の影に浴した自然であつた。彼れの高い靈なる心の光に照された自然であつた。換言すれば、山も河も、一瓣の花、一朶の雲も佛陀心海の王三昧に入つて、更に別樣の

光輝を放つて居る。

城郭を空じ、林樹を空じ、村落を空じて此に、空々寂々に入る。謂はゆる十方に虚空なく、大地に寸土がない。而も此の靜寂の極に徹すれば、禹力到らざる處、河聲流れて西に向ふ、萬象は其の赤裸々の姿を露呈して來る。青山は自ら青山、白雲は自ら白雲。彼れを棄て、此れを取るの必要はない。皆心の海に生れた藻の花であつて、彼れも、是れも同じ潮の匂ひがする。而も長藻は其の丈を妨げず、短藻は其の寸を嫌はない。這箇の裡自ら津々の妙味がある。

野に立つ陽炎、小川に咽ぶ渥泡、雲間をもるゝ電光、涸れたる河邊の沙乾しくさ、泥田にかをる白い蓮華、紅い蓮華、一として、其の口に上らないものはなかつた、樹の花や、草の花も風に逆つては甲斐がないが、獨り德ある人の香ひは、風にもさえぎられず遠い村々までも運ばるると說き、「衆生流轉煩惱海、猶如蜂在竹孔之間」といひ、底ひなき淵は動かざる聖者の心に譬へられ、月の光は蔭なき心に比べられ、故き池を棄てかぬる鵠の鳥は愚かなる人の如しと述べられた。雨催ひの雲は二つになつて、言行相離れぬ人は雨となる雲の如しと讃へられ、口

のみの人は雨とならぬ雲の如しと斥けられた。沙に埋もるゝ樹々、風に枯るゝ林、幹の裂くる多羅樹、あらゆる果實、淵に遊ぶ山羊、燈火に寄る蛾蟻や龜、龍や魚、あらゆるものは、其の詩囊に入つた。此の點に於いても、彼れは當時の諸哲學派中に獨歩する。此の傾向が華嚴、法華等の大乘經に至つて、燦爛たる光を發して居る。藥草喩品の如きは、朗々として誦すべき絶好の詩である。其の云爲に於いても、彼の有名なる「拈華微笑」の如きは、後人の附會たることは疑ひないが、而も描き得て妙と稱せざるを得ぬ底の遊戯三昧である。

佛說金光明及法華經于靈山會上。是時世尊拈華示衆。百萬人天皆茫然。唯金色迦葉破顏微笑。世尊曰。吾有正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙法門。今付屬於汝。當護持。

* * * * * * *

佛典の譬喩が如何に趣味津々たるかは、上揭の數例で其の一斑が分つたことであらう。あらゆる物象を拉し來つて縱横に使役し、或は雄大に、或は嵩高に、或は清酒に、或は絢爛に、譬喩の花が、聖訓の綠葉を彩つて謂ゆる千紫萬紅の美

を恋にしてをるのは、誠に佛教文學上の偉觀であるが、動植物に富んだ熱帶の豐富な自然界に逍遙し給うた佛陀の事として、自然美を材料とした美しい譬喩說法が少くない。今、此れ等の美はしい說法の中から、殊に美しいものを、最も原始的な經典から二篇を選んで、次に掲ぐることゝした。即ち南傳の法句經(Dhammapāda)から華香品を抽いて、漢譯の法句、出曜、兩經と對照して、詩體に譯出し、之に漢譯の品名を用ひて、華香品とし、次に又南傳の修多尼波多(Sutta Nipāta)から陀儞耶經を譯出した。而して、前者はマクス、ミュラー博士の英譯、後者はファウスボール博士の英譯(共にS.B.E. VOL. X.)に據り、次に藥草喩品は、羅什譯の法華經に據つた。就中陀儞耶經は、佛陀時代の農夫の生活を描いたもので、其の措辭の美、寓意の妙、佛教文學中の珍とするに足る傑作である。此の篇は、先月逝去された故英譯者が、非常に賞讃されてをるのを見ても、其の美なることを想ふべきである。然るに、著者の拙き筆に依うて、其の光の多分を失つてをることは、著者の深く愧づるところである。

はな(華香品)

天つ國
地と闇
華摘人の
服從はせ
華選ぶ
ごと
德の坦路
行くは誰そ

天つ國
地と闇
華摘人の
服從はせ
如
華選ぶ
德の坦路
行くは聖

身は沫泡
陽炎の
虛なる
それ識る人は
魔の射る
華箭
折棄てつ
死王觀じ

華摘みつ　心空
不寂人を　熟睡せる聚
洪水誘ふ　如
死の大王　運び去る

華摘みつ　心空
不寂人を　快樂に耽る
他かぬ　眞時に
死の大王　縛り枷す

蜜集ふ　蜂傷はず——
色も香も　咲き滿つ華も——
聖　聚棲み
かゝらまし　宛然に

視る勿れ　餘他人を
邪逆や　犯す犯さぬ——
懈慢　黑行
聖みづから　省慮よ

香はあらて　可意華
艶に　それ其の如く
履みて　行ぜぬ
工語は　實りなし

香も深き　可意華
艶に　それ其の如く
履みて　行ずる
善語こそ　實りあれ

華饒に　摘み集め
結びてぞ　靈の歩瑤は——
白行も　さぞ　後の世に
幸獲させむ

檀香　また多伽羅
瑪瑠黎托華も　逆風に力なし
唯德のみ　ぞ
瀰り充つよ　限もなく

雜香　饒あれど
檀香も　多伽羅も
さては　桂樹も

德の芳薫——そに越えじ

多伽羅　檀香
香有てども　幽に微し
德ある　人の
薫りこそたゞ　天にも昇れ

戒律守る　賢士
正行者　智惠の門入る
靜寂人　には
魔の踏み入らひ　路ぞなき

大路に棄てし　芥の丘にも
美き香を吐く　百合は花咲く

智慧充ち滿てる　佛陀の弟子
彼れこそは　芥の如く
彷徨ふ人の　闇の中にも
輝きぞ行く　智慧の光の

佛と牧牛者(陀倆耶經)

「我れは炊ぎぬ(我が)米を。
我れは搾りぬ(牛乳を)——
牧夫陀倆耶は斯くいひき——
「我れは伴侶と共に摩比(河)の
岸邊に近く暮すなり。
(我が)家は覆はれぬ。
火は點されぬ。
夫れ故に、おゝ、降りたくば、降れよ。空。」

「我れは怒りを解脱しぬ。
我れは執拗を解脱しぬ」——
薄伽梵は斯く宣ひき——
「摩比(河)の岸邊に近く我れは
一夜の程を忍ぶなり。
(我が)家は覆ひを除かれぬ
(煩惱の)火は消されけり。
夫れ故に、おゝ、降りたくば、降れよ。空。」

「(我れには)牛蠅(等)の影もなし」——
牧夫陀倆耶は斯くいひき——
草豐かなる牧場(等)にて、
牝牛(等)は今も嘶けり。
而して彼れ等は、雨降るとても、耐ゆるなり。

夫れ故に、おゝ、降りたくば、降れよ。空。」

「よく構へられしらるゝ」——
(我れに依りて)造でなくんば、
涛伽梵は斯く宣ひき——
「(煩惱の急流を越えて、
我れは渡りぬ、(涅槃に)。
我れは達りぬ、彼の岸に。
今は筏に用もなし。
夫れ故に、おゝ、降りたくば、降れよ。空。」

我が妻は柔順にて、放肆ならず」——
牧夫陀儞耶は斯くいひき——
「長き月日を我れと共に棲み、氣心輕く、而して

彼れに就きて、邪惡を我れ聞かず。
夫れ故に、おゝ、降りたくば、降れよ。空。」

「我が心は柔順に、(なべての世事に)縛されず」——
涛伽梵は斯く宣ひき——
「長き月日にいみじくも、
修めつ、又よく抑えけり。
今は邪惡我れになし。
夫れ故に、おゝ、降りたくば、降れよ。空。」

「我れ自らの所得にて、
我れは我が身を支ふなり」——
牧夫陀儞耶は斯く言ひき——
「而して我が子等は集へり、我が側に

健にして、邪悪を彼等につきて我れは聞かぬなり。
夫れ故に、おゝ、降りたくば、降れよ。空。」

「我れはいかなる人の奴にもあらず」——
薄伽梵は斯く宣ひき——
「自ら獲たる物を有て、
我れはあらゆる世界を周行なり。
仕ふべき要(我れに)なし。
夫れ故に、おゝ、降りたくば、降れよ。空。」

「我れは牝牛(等)を有てり。
我れは犢(等)を有てり」——
牧夫陀儞耶は斯くいひき。
「犢と牝犢(等)との中に牝牛(等)を、而して

我れは牝牛(等)の頭として一の牡牛を有てり、
夫れ故に、おゝ、降りたくば、降れよ。空。」

「我れは牝牛(等)を有たず。
我れは犢(等)を有たず。——
薄伽梵は斯く宣ひき——
「我れは犢の中に牝牛を有たず。
又牝犢を有たず。而して、
我れは牝牛(等)の頭として、牡牛を有たず。
夫れ故に、おゝ、降りたくば、降れよ。空。」

「杙(等)は打込まる、而して、揺され能はず」——
牧夫陀儞耶は斯くいひき——
「繩(等)はマンガ草にて造らる、新しく、又巧に、

牝牛等は彼れ等を斷り得べくもあらじ。
夫れ故に、おゝ、降りたくば、降れよ。空。」

「牡牛の如く、繩を裂きつ、
象の如く、ガルッキー蔓草を脱てつ」——
薄伽梵は斯く宣ひき——
「我れは再び入胎せじ。
夫れ故に、おゝ降りたくば、降れよ。空。」

爾の時、忽ち驟雨降り注ぎぬ、海と陸をば滿しつゝ。
雨ふる空を聞きつゝ、陀倆耶は斯くぞ語りぬ。

「我れ等、薄伽梵を見奉りしより、
實に少からぬ利益は我れ等に(歸しぬ)。

我れ等は爾に歸依す。
おゝ、(智慧の)眼を具せる爾、
爾は我れ等の師たれ。おゝ、大なる牟尼(勝者)。

我が妻と我れは共に柔順なり。
我れ等、(若し)善逝の前に、聖なる日送なさむに、
我れ等は生と死とに打勝ちて、
苦しみは終らん。」

「子(等)を有つ人は子を樂しむ」——
邪なる魔は斯くいひき——
「牝牛等有つ人は、其の如く、牝牛を樂しむ。
何となれば物(upadhi)は人の樂みなる故に、
さりながら、物なき人は樂みなし。」

「子(等)を有つ人は(其の)子(等)を憂ふ」——

薄伽梵は斯く宣ひき——

「牝牛(等)有つ人は、其の如く、(其の)牛を憂ふ。

何となれば、物は人の憂ひの因なれは、

さりながら、物なき人は憂ひなし。」

陀儞耶經終る。

藥草の雨藥草喩品)

漢譯法華經は雄大壯嚴なる大文章である。就中最も趣味ある一章は此に引用する藥草喩品であらう。此の一篇は印度の變化多い天象、端睨すべからざる雲霧の大觀を描いて居るので、大乘經典に於ける譬喩の美を示さんが爲に、此に附載することゝした。

藥草慚々として秀て、山谷爲に芳芬の香を放つところに、倏ち見る。蓬勃たる雲氣天の一方に起り、見る見る大鵬の翼を擴げ、昱日を覆うて九天に瀰漫する、かくて、膏雨油然、沛然、滔々然として注げば、山谷の藥草香樹其の惠みを享けて益蕃茂する。其落想の雄大は措辭の壯嚴と相俟つて、一篇の自然詩を形作る。

「迦葉よ。當に知るべし。今我が說くところは譬へば次の如くである。

大雲が空に起つて、偏く一切を覆ひ、水氣を潤んで、電光輝き、雷霆轟いて、人を悅ばせ、日光は暗くなり、地上は涼しくなり、雲の脚が翼いて、手で攫めそうになると、雨が一時に下つて流れ注くことは量り難い程で、忽ち國土に充滿する。然れば、山川險谷の幽邃なところに生えてをる卉木、藥草、大小の樹木、百穀、苗稼、甘庶、葡萄あらゆるものが、爲に、潤され、豐に水分を得て、大地に普く蕃茂する。其の雲から落つる水は同一味であるが、草木叢林各思ひ思ひに(相應に)、水氣を吸收するので、大、中、小のあらゆる草木、夫れ夫れに生長し、根、莖、枝、葉、青々と茂り、華は美しく咲き、實は熟して輝くのである。斯樣に、一雨の爲に、皆鮮かになり其の體相や、性質に隨つて、各滋つて行く。

如來の世に出づるも、亦、大雲の如く、普く一切の疲れ枯れたる衆生を潤し、彼れ等を視ること平等にして、一味の雨の如く法を宣說する。故に、我が法を聽く衆生も、各其の力に隨つて、修行すれば、相應の道果を得ることは、大、中、小の草木が雨に遇うて、夫れ夫れ、茂る如くである。（如來以下大意譯出）

參考の爲に羅什の漢譯を揭げてをかう

迦葉當知　譬如大雲　起於世間　徧覆一切
惠雲含潤　電光晃耀　雷聲遠震　令衆悅豫
日光掩蔽　地上清涼　鬘雞垂布　如可承攬
其雨普等　四方俱下　流澍無量　率土充洽
山川險谷　幽邃所生　卉木藥艸　大小諸樹
百穀苗稼　甘庶蒲萄　雨之所潤　無不豐足
乾地普洽　藥木並茂　其雲所出　一味之水
草木叢林　隨分受潤　一切諸樹　上中下等
稱其大小　各得生長　根莖枝葉　華果光色

一雨所及　皆得鮮澤　如其體相　性分大小
所潤是一　而各滋茂　佛亦如是　出現於世
譬如大雲　普覆一切　旣出于世　爲諸衆生
分別演說　諸法之實　……

吾人は之れを誦して、カーリダーサの詩雲の使」(Megḥaduta)を聯想せざるを得ぬ。雲の使」は富神俱吠羅(Kubera)の從者なる一藥叉(Yaksha)が懈怠の爲に追放されて、中印度の羅摩山(Ramagiri)の森に、幽居して居た時に、憂ひに堪えかねて北に飛ぶ雨雲を打眺めつゝ、遠き雲山の奥に棲む彼れの愛妻に、悲なくて暮らせることを告げよかしと、雪に使ひを賴む悲愁の物語を綴つた哀詩である。過ぎにし歡樂を想うて、彼れは、其の妻の家なる迦維羅沙山の阿羅迦まで、雲の旅路の光景を語つて居る。阿無羅空多の山、賓都耶の丘、毗地捨の街、吠達羅跋底の流れ、烏杖那の都、鳩瑠玖制達羅の邊、恒河の畔の美しい山河の姿は、此の詩の前半を彩り、雪山の奥なるなつかしき故郷の面影は、後半に甘き愁ひを以つて、描かれてをる。實に印度の自然の美しさは想像の翼を馳せただけでも、恍惚たら

ざるを得ぬ程である。嗚呼、清く高く熾んなる佛國の輕景なるかな。藥草喩品に現はれた熱帶の自然美！われらは亦同じ詩人の短詩季節の環(Rituṣaṃhāra)を聯想せざるを得ぬのである。

凡そ、古代印度では、一個月を二つに分けて、初月から滿月までを白分といひ、月が虧げ初めて晦に至るまでを黑分としてをる。但し月に大小があるから、黑分は十四日のこともあれば、十五日のこともある。而して、十二個月を以つて一年として居るが、一年は之れを六季に分つのである。即ち漸熱(正月十六日——三月十五日)盛熱(三月十六日——五月十五日)雨時(五月十六日——七月十五日)茂時(七月十六日——九月十五日)漸寒(九月十六日——十一月十五日)及び盛寒(九月十六日——正月十五日)是れである。又、春夏秋冬の四季に分つこともある。即ち、制咀羅月、吠舍佉月、逝瑟吒月の三個月が春で(正月十六日——四月十五日)頻沙茶月、室羅伐拏月、婆羅鉢陀月の三個月が夏で(四月十六日——七月十五日)頻澀縛庾闍月、迦底迦月、末伽始羅月の三個月が秋で(七月十六日——十月十五日)報沙月、磨祛月、頗勒窶拏月の三個月が冬である(十月十六日——正月十五日)。さて、又、佛教では、一年を、

熱時(正月十六日——五月十五日)雨時(五月十六日——七月十五日)寒時(七月十六日——正月十五日)の三時に分つてをる。

春過ぎ夏來れば、殊に、其の姿を誇る印度の自然！眞晝の熱さの酷しいだけ、椰子の樹陰の月ある宵の涼しさ樂しさは言葉の及ばぬところであらう。夏晩れ方の野火は森から森に燒け擴りて、見渡す限り、荒涼の天地を描けば、重い雲が垂れ布いて、電光閃き、雷霆震ふ雨時となる。河川は流れて海に注ぎ、野は青草の宮となり、森は黃金色の若芽に蔽はれる。斯くて、秋風そゞろに信度河の畔に立てば、沼田の蓮華は滿面の笑みを含み、甘庶や、稻は黃き衣を着けて、重き穗を波うたせ、空には、紅鶴が鳴き渡る。婉なる蔓草は、縱橫に繁りつゝ、無憂樹の花は深紅に綻び、其のひまびまには、素馨の花が芳ばしく匂うてをる。稻は刈られ、蓮華は萎んで、霜置くやうになれば、もう冬で、月の色も冰りつゝ、雪の神は、銀冠を捧げて、雪山の頂きから、溪谷の杉や檜の梢を訪づれて來る。春になれば、迦瑠邏伽羅(Karnikāra)無憂、素馨等の花が再び咲き亂れ、蜂は微けき唸りをあげ、信度、郭公はなつかしい名乘をあげる。而して、菴摩羅(Mango)の花は野に滿つる。

嗚呼、熱帶の強き光の海に呼吸する鮮かな萬象！佛陀の紘無き心の堅琴に響いた佛國の相！われらは、長へに、聖典に描かれた綠葉の遐き匂ひに憧れざるを得ぬのである。

我慢根除斷　如華水上浮　蕊蕚到彼岸　如蛇脫故衣
慳悋根若斷　如華水上浮　蕊蕚到彼岸　如蛇脫故衣
愛支根若斷　如華水上浮　蕊蕚利彼岸　如蛇脫故衣
若無煩惱根　獲報善因果　蕊蕚到彼岸　如蛇脫故衣

（法集要頌經華嚴品）

第四章　佛陀と本生說話

第十節　本生說話の意義及び其の起原

本生說話とは何ぞや。本生說話とは、佛陀が迦比羅城の太子として降誕し給う前の生涯に關する說話である。即ち過去の世の物語である。

既に過去の世の物語といへば、輪廻の思想がなくては成立たぬ。換言すれば、本生說話の概念は既に輪廻轉生（メンタムサイコシス）の思想を豫想してをる。即ち輪廻の思想がなければ、過去世の物語は起らぬ譯である。既に印度思想の共通點の條下に說いたやうに、因果應報、輪廻轉生の說は太古から汎く信ぜられた思想であつて、印度にのみ行はれて居たのではない。希臘に於いても、ピタゴラスの如きは之を信じてゐたばかりでなく、Cowell氏のJātaka序文に依れば、彼れは自ら自身の前生の話を說いて居る。故に、輪廻轉生の說は東西共に古代から行はれてゐたことがわかる。此れ等の一致に付いて、印度と希臘との相互の影響の有無に關す

る諸家の說は紛々として一致せぬが、先づ各自獨立に發展したと見てないて大過なからう。

さて、佛敎に於ける本生說話の起原は何時頃であらうか。思ふに、其の發生は未だ遼くして、既に佛陀の生時に存したのである。佛陀自ら其の本生說話を弟子等に向つて說き給うたことは、南方所傳、北方所傳共に之れを證して居るので、疑ひを容れぬ事實である。其の證は佛敎聖典の古い分類法が南北兩傳共に遺つてをるが、其の分類の一として本生說話(Jātaka)なる名目が記されてある即ち南北兩傳の九分敎、北方所傳の十二分敎の中に、闍陀伽なる名目がある。これが本生說話のことであつて、錫蘭に傳はつてをる巴利語の三藏の中には雜部(雜藏)に編入され、其の中に五百五十の本生說話を含んでをる。而して之れを十二卷に分つてある。漢譯三藏の中には、諸經典に散在してをつて、四阿含經や、律藏や、諸譬喩經にも見ゆるが、別に一部としてまとまつて傳はつてをるのは少ない。唯、本生鬘論、生經、六度集經等が十數篇乃至九十餘篇を含んでをるに過ぎぬ。南方所傳の本生說話はフアウスボエール氏が出版し、又カーウエル氏等

が英譯してケンブリッヂから出版して居る。從つて本生說話は南北共に傳はつて居るが、殊に、南方に多く經つて傳はつたといふことが出來やう。本生說話が佛敎文學として如何なる地位を占むるかは、暫く措き、本生說話が、吾人をして、津々として盡きざる興味を感ぜしむるのは、其の成立の事情、及び其の含有する民間傳說に依るのである。實に本生說話は深溪に湧く巖清水である。可憐にして趣味ある說話の泉が、聖典といふ苔の衣に包まれて、吾人に流れて來たのである。故に、よく此の流れを味ふ人は、遠きみ山の清いゆかしい匂ひを嗅ぐであらう。本生說話が文學として、特殊の價値を有するのは、全く其の中に含まれたる民族の古傳說にある。

(一) 北方所傳の十二分敎は (一)修多羅(Sūtra即ち契經と譯す) (二)祇夜(Geya應頌) (三)和伽羅邦(Vyākaraṇa記說) (四)伽陀(Gāthā諷頌) (五)優陀邦(Udāna自說) (六)尼陀邦(Nidāna因緣) (七)阿波陀邦(Avadāna譬喩) (八)伊帝曰多伽(Itivṛttaka本事) (九)闍陀迦(Jātaka本生) (十)毘佛略(Vaipulya方廣) (十一)阿浮陀達摩(Adbhutadharma希法) (十二)優波提舍(Upadeśa論議)の十二で、同じき、九分敎は、右の中から(六)(七)(十二)を除いたもの。而して、北方所傳の九分敎の中、毘佛略に代ふるに、Vedalla(獲明)を以つてしたものが南方所傳の九分敎である。

(二) 四阿含經　北方所傳では、(一)長阿含經、(二)中阿含經、(三)雜阿含經、(四)增一阿含經の四經をいひ、南方所傳では、(一)Digha-nikaya. (二)Majjhima-nikaya. (三)Saṁyutta-nikaya. (四)Aṅguttara-nikaya. をいふ。而して南方所傳の經部の中に　(五)Khuddaka-nikaya. があつて、之れに十五種の經典が含まれてゐるが、其の第十に、本生經(Jātakam)がある。

第十一節　本生說話の構造

佛陀が時代の趨勢に鑑み、在來の學風に反して、特に清新通俗の敎へを布き給うたことは、既に述べた通りである。凡そ、一代の木鐸となり、一世を動かすにはどうしても、其の民族生活の現實を離れてはならぬ。預言者や、先覺者は全然、民衆と隔絕して居ては、世の力となることは到底不可能である。之れを譬ふれば、民衆は火氣を有せぬ綿火藥である。心に溢れ、胸に滿てる悶々切々の情は、爆發の期を求めて、絕えず動搖して居る。而も、火を招くだけの力がないのである。故に、其民衆の心は爆發すべき狀態に達して居るが、而も、一點の火を投する人がない。此に人あり。自ら、天の靈火を執つて、此の民衆の心に點ずれば、轟然一發、見るまに火炎は天を焦し、猛煙は地を蔽ひ、烈々の勢、何物も之れを防止すること

とは出來ぬ。此に於いてか、彼れは偉人となり、木鐸となることが出來るのである。假令、如何に天の靈火を握つて居ても、自ら、下つて、民衆の心に點せざる限りは、唯燦たる天上の光に過ぎぬ。夫れ、炎天六月、飛雪紛々として降れば、人々皆驚き喜び、手の舞ひ、足の踏むところを知らぬ。而も、水蒸氣が唯、高山の絕頂にのみ銀冠を凝しても民衆は、唯、其の淨さ白さを仰ぐにすぎない。霏々として、紛々として、地上に降つて、始めて、人を動かす力を得る。故に、時代思潮の向ふ潮さきに立ち、炬火を民家の爐から點ぜぬ人は、革命家、革新家となる資格はないのである。虎穴に入らずんば虎子を獲ざるが如く、狼を救はんとするには、狼窟に入らねばならぬ。革命の牛耳を執る英傑、革新の警鐘を叩く詩人は、或點までは其の社會の代言者でなくてはならぬ。

佛陀は、此の意義に於いて、確に、時代思想の同情者であり、指導者であつた。從來の煩瑣學風や、供犧、儀禮に嫌厭として、更に、新方面に、解說を求めて、悶えつゝある時代思想に、多大の同情を寄せて、自ら、其の先頭に立つた。故に、佛敎なる宗敎は、從來、新思潮として溢れてゐた、暗流が忽ち湧溢して、社會の表面に漲りい

てたに過ぎぬ。佛陀の態度は平民的であり、其の言語は當時の俗語を用ひ、俗耳に入り易き多くの譬喩を用ひ、決して學者的口吻をとらなかつた。本生說話の如き亦其の一であらう。

佛陀は、其の生命ある新しい敎訓を說くに、多くの譬喩を以つてし給うたことは、譬喩の條下に明にした通りである。佛陀は、唯、自己の任意に取つた譬喩の外に、更に、通俗な譬喩をとつて、之れを、自れの前世の物語として、民衆に說法し給うた。凡そ、最も、通俗なものといへば、其の民族が祖先以來、相語り、相傳へた傳說に過ぎたものはあるまい。殊に空想的な印度民族は、多くの趣味ある民間傳說を有してゐた。佛陀は、此れ等傳說の衣を借り來つて、其の宣布する新道德を包んで、更に、自己前生の經歷として、之れを民衆に授け給うた。是れ等の傳說は、當時の民衆が或は綿の花咲く朝の野邊に、或は碧翠滴る椰子樹の下に、青い影を投ぐる月の光を浴びて、三々五々相語るを樂しんで居たところである。佛陀は巧みに、此れ等の傳說を用ひて、聽者の心を樂ませつゝ、其の淸ひ敎へを布き給うた。從つて、忽ち中印度を風靡するに至つたのである。凡そ、古來、文學上の名

著、傑作と稱へらるゝものゝ中には、材を民間の傳說に取つたものが甚だ多い。沙翁のハムレット以下諸篇、グーテのファウスト、シルラーのクキルヘルム、テルテニスンのアーサー物語、ヴクネルのタンホイゼル以下の樂劇諸篇等其の例とするに足る。實に、傳說は民族の心の竪琴に、最もよく諧つてをる旋律である。故に之れを强くし、之れを大いにし、之れを新たにして、民族の心に訴ふるならば、勞せずして、偉大なる共鳴を得ることは、最も睹易き道理である。此の點に於いて、佛陀は、彼れ等詩人と共に千古の樂聖を稱するも、敢て、空言ではあるまい。佛陀は、古傳說なる樂譜に、自己の新しい音調を加味して、共鳴を大ならしめた天才である。

以下、本生說話の結構に就いて、說明しやう。

現存する本生說話は、完全なものは、各篇、之れを、三段に分つことが出來る。即ち

(一) 序分
(二) 本分
(三) 後分

の三段である。序分とは、佛陀が本生説話を説き給うた場合、及び場所等、一言にいへば、因縁由來を述べてある一段をさすのである。本分とは、佛陀が前生に於いての經歷を説いてある一段で、三分中の中心、説話の中核である。後分とは、本分中の説話にあらはれた人物を正しく佛陀、其の他現在の某々等の前世であつたと明す一段である。今、鹿王本生(Nigrodhamiga-Jātaka)を一例として之れを説かう。

序　分

昔長者に、一人の娘があつたが、淑德人に優れ、父母の鍾愛譬ふる物がない程であつた。娘は連りに、出家して道を求めたいと請うたが、兩親はいつがな聽き入れないので、娘は非常に心配し、如何にもして、望みを遂げんとしたが、どうしても、機會がなかつた。そこで、良家に嫁いだならば、或は、却つて、容易く望みが貫けるかも知れぬと思いついたので、早速、父母に請ひ、良家の妻となつた。暫くして、夫の許を得て、愈出家求道の身となつたが、當時、釋迦と提婆達多との二人が、盛んに法を説いて居られたので、先づ、提婆達多に就き、其の教團に入つた。然る

に、此の新求道者は漸く姙娠の徵候をあらはし、教團中の一問題となつた。其の師は、我が教團の耻辱になるの故を以つて、忽ち嚴命を下して、尼を破門し放逐した。此に於いて、尼は佛陀の方へ趣き、脚下に伏して、わが身の不幸を訴へた。佛陀は之れを憐れみ、其の教團に命じて、詳に事情を調べさせ給うたところが、彼れの姙娠は、彼れが未だ家妻であつた時に基いたことを明かにした。そこで、彼れは破戒の責を免れ、教團の一員たることを許された。而して彼れと其の胎兒は汚名を免れて、罪から救はれたのである。此の時、佛陀は祇園精舍に居給うたが、多くの弟子達に向つて、「自分が彼れ等を救ふたことは今度が始めてではない。既に遠い昔以來のことである」と仰せられて、次の物語を説き給うた。(以下本生説話は昔噺體に譯す)

本　分

むかしむかし、婆羅摩達多といふ王樣がベナレスをお治めになつてゐたところに、林の中に金色の毛をもつた二匹の鹿の王樣があつて、五百匹宛の鹿の家來が居りました。一匹の王樣の名は椰子鹿といひ、今一匹の王樣の名は岐鹿と申

しました。或る時、ベナレスの王様が多くの家來をつれて、狩にお出ましになつたが、鹿が多く群れて居たので、其の林を取り卷いておしまひになりました。そこで、鹿共は毎日々々二匹宛捕まへられて王様のお厨に回さるゝことゝなつたが、さて、毎日二匹の鹿をとるために多くの射手が立ち向うて箭を澤山射かくるので、皆んなの鹿が負傷して、非常に苦みました。そこで二匹の鹿の王様が相談して、籤を製へてそれに當つたものが、毎日々々、王様の厨に殺されに行くことゝ定めました。或る時、一匹の孕み鹿が籤に當つたので孕み鹿は大邊悲んで、自分の王様の岐鹿の處に行いて、「私は孕つて居りますから、今殺されるれば、母子共に死なねばなりませぬ、子供が可愛相ですから、どうか、暫く御助けになつて、後まわしにしていたゞく事は出來ますまいか」と泣く泣く願いましたが、元來、此の岐鹿は意地惡ですから、「誰が代りになるものがあるか」といつて一向聽いてくれませんでした。そこで、雌鹿は外の王様の椰子鹿の方へ往つて、右の次第を訴へまして、どうか、お助けをと願ひました。此の鹿の王様は慈悲深いので暫らく考へて、それではどうかしてやらう」といつて、雌鹿を喜ばせ、今度は、自分

てベナレスの御殿の厨に行きました。さきに、ベナレスの王様が鹿の群をお圍みになりました時に、二匹の王様鹿だけは生命を助けるとの仰せてありましたが、今金色の王様鹿がのこのこ厨に來ましたので、厨人は吃驚して、王様に右の次第を申しあげますと、王様も變に思召して、家來と共にお出ましになり、椰子鹿に、其の理由をお尋ねなさいました。鹿は右の事情を一々申し上げましたので、王様も、大邊感心なすつて、これからは、一切鹿は殺さぬことにすると仰せられました。鹿はなほも他の生類をもお助けに相なるやうお願ひしましたので、王様は益々感心なすつて、悉く生あるものは殺さぬやうにするとお誓ひなさいました。

夫れから間もないうちに、雌鹿は可愛らしい仔鹿を產みました。春の木の芽のやうに、柔しい仔鹿は何心なく、岐鹿の仲間と一緒にそこいらを飛び回りました。母の雌鹿は之れをみて、大變心配しまして、仔鹿を呼んで次の謠を敎へました。

可愛い仔鹿よ　仔鹿よ。

岐鹿さんと遊ばんて、

椰子鹿さんと遊ばんせ。

死んでも椰子鹿さんがよい。

夫れから、鹿の仲間は人間に向つて「これからは、田畑には、どうか木の葉を縛つて標號として下さい。そうすれば、私共は決して田畑にはいりますまい」と誓つたので、今に木の葉の縛つたのが田畑に見えるのです。

後分

佛陀は右の說話を終へて、さて、弟子達よ。其の時のベナレスの王は今の阿難である。雌鹿は鳩摩羅迦葉の母である。岐鹿は提婆達多であつて、椰子鹿は我れである。我が彼れ等を救ふことは今日が始めてはない」と仰せられた。

是れて一篇は完結してをる。これは錫蘭に傳はつてをる巴利語の闍陀迦の大意であるが、此の話は漢譯三藏の中にも種々の形で殘つてをる。即ち大莊嚴論(第十五西域記(第七)等の同じ話が夫れてある。又其の簡單なものは。雜譬喩經(比丘道略集)に出てをるものであらう。固より、本經は集錄であるから、何經から

抽いだのか分らないが、中に鹿林喩なるものがあつて、左の如く記してある。

むかし、むかし、五百の群鹿があつて、鹿林中に棲んでゐましたが、鹿の王があつて、一は菩薩一は眞の鹿王でありました。時に國の王樣が狩にお出ましになりまして、群鹿が集つて居るのを御覽になりましたので、兵卒を以つて鹿共を取り圍ませられました。そこで、二匹の王樣鹿は相談しまして、一緒に王樣のところへ參り跪いて「私共は勝手に王樣の御領分に居りましたので、罰を受けて殺されても別にひどいとは思ひません。併し、もしも、王樣がみんなの鹿を一緒にお殺しになりますれば、忽ち腐つてしまつて役に立ちますまい。それで、毎日二匹宛差上げますから、他の者は暫く御助け下さいませうならば、辱く存じます」と申し上げましたので、王樣もお聞屆けになりまして、圍みをお解きなさいました。夫れから、毎日二匹の王樣鹿は、相談して、二匹宛部下の鹿を選り出して王樣の厨へ差上げましたのて、雌鹿は其の王樣鹿の所に行いて「どうか仔鹿を產みまぬ事になりましたので、或る日のこと一匹の孕み鹿が行かねばならすまて、お許し下さりまするやうに」と願ひましたが、聽かれませんでしたそて

て、菩薩鹿に申しますには、私の王様鹿)は無慈悲で助けて下さいませんから、今あなたにお願ひ申しあげます。どうか命を暫くお助け下さいまするやうに」と願ひました。そこで、王様鹿は身代りとなつて、自分で厨へ行きましたが、厨人(コック)は之れを見まして、大變吃驚して、王様(人王)に申し上げました。そこで、王様は早速(すぐに)其の鹿をつれて來いと仰せられました。鹿は王様のところに連れられて參りまして、其のわけを申し上げますると、王様も大邊感心なすつて、國中に布告を出して、以來(にんから)、鹿は一切殺すなと告げ、かの林を群鹿(しかのなかま)に下さいました。それで、かの林をば鹿の林と申す樣になりました。

煩を厭はず、漢譯文を紹介してみやう。

鹿林昔有五百群鹿。在此林中。有鹿王。一是菩薩。一是眞鹿王。時有國王出城獵見此群鹿。引兵圍之。彼二鹿王共設方針。俱詣人王。長跪白人王言。今在王界分受屠割。若王一時併殺諸鹿。敢不時或臭爛。意欲日送二鹿以供王食。餘者次第當日奉送。不敢有闕也。願王見聽。小得延命。此豈是非大王之恩耶。於是人王聽如所白。開圍放之。從此以後。彼二鹿王自相料簡。遂爲次第。日送二鹿詣王厨下。更數日後有

一姙身鹿次應就死。彼鹿詣其王所。求待產竟。彼王報言。餘鹿次第未至。誰代汝者。彼鹿便詣菩薩王所。白菩薩言。我王不仁。不以理恕。今來歸命。願爲理之。菩薩鹿王愍其如此。遂便自詣人王厨下。厨士白王言。鹿王自來詣厨。求代彼姙身之鹿。王乃怪之希有。語厨士言。將彼鹿王來。於是鹿王詣人王所。遂向王廣說其意。於是人王信心遂生。禽獸尙修德。何況人乎。命一國之內永不射獵。以此林野長施群鹿。從是以來。遂鹿林爲名也。

此の文は巴利傳と比ぶれば、甚だ簡單であつて、菩薩といふ鹿王は佛陀の前生を指したので、說話の形の上からいへば、南傳よりも、原始的のものと思はるゝのである。

第十二節　本生說話成立の過程

本生說話は始めから完全な形を有つて居たのではない。序分、本分、後分は夫れ〴〵獨立の歷史を有つてをる。初め阿含等の古經に、訓言を說いて、夫れを說明する爲に、譬喩が附說してあつた。然るに、後には、譬喩が事實的の說話となり

偈頌(韻文)を加へ、序分と後分とを加へて、佛陀の前生の物語として、一篇の本生說話としたのが少くない。リス、デヴキヅ氏は、南傳に就いて、律や阿含に基いた本生說話十篇を指摘してをる。加之、現存の巴利本生經に存在せぬ本生說話が古經に往々見えてをる。是れを以て見れば、本生說話が非常に古くから行はれて居たこと、及び、現今の巴利本生經は本生說語の全體を含んで居ないといふことが分る。本生說話の本分は、多く佛敎以前の古傳說を取つて、之れに佛敎の敎義を加味して、本生說話を作つたものである。彼の大善見王本生(Mahā-suddassana Jātaka)は古い太陽神話の一つで、元は主として冥想の尊いことを說いてあつたが、本生說話に攝取せらるゝと共に、地上の驩樂の賴むに足らぬことを說くことゝなり、本來の意味を失うて佛敎倫理の色彩を帶びて來たのをみても分る。(大善見王本生經は南傳Digha-nikāya 第十七。同英譯S. B. E. vol. XI. 中阿含相應品。法顯譯、大般涅槃經。白法祖譯、佛般泥洹經等に見ゆ)。又、古經の偈頌を註釋する爲に、(出曜經や法句譬喩經が偈頌ばかりの法句經を說明する爲に、多くの譬喩寓話を註釋的に配列して)出曜經や法句譬喩經が出來たと同樣の方法で、古

經の偈頌を說明する爲に、古傳說を取つて來て、註釋的說明となし、斯くて、佛陀の前生に托して、完全な本生說話としたものもあらうと思はるる。兎に角、本生說話が非常に古いことは、次の事實でも推す事が出來る。即ち西曆紀元前二三世紀に出來たバールフート(Bharhut)サーンチ(Sānchi)兩窣堵婆を回る石垣の浮彫に、五十個の本生圖の浮彫があるが、其の中の二十七個は現存の巴利本生說話と一致するのみならず、西曆前三世紀頃の文字で、書題として、此れ等の浮彫の中には本生說話の名を刻してあるものがある。而して、此れ等の浮彫は數多の光景を雜然と一面に描いたものであるが、浮彫は本生說話の偈頌には關係なく、よし、關係を有つて居ても、散文の部分(即ち說話の筋)を知らぬものには何を彫つてあるか少しも分らぬ。且つ、同じ說話でも、種々な名で呼ばれてをる。其の他、アジャンタ、(Ajanta)アマラバチ(Amaravati)等の塔にも多くの本生畫の浮彫が殘つてをるのである。

本生經の事が佛敎歷史にあらはれた中で古いものは島史(Dipavaṃsa)であらう。其の中に(V.32.毘舍離會議の時に、本生經の內容をも變更し、新本生說話をも

作つた事が記されてある。而して、現存の巴利本生經は何時頃出來たのであらうか。始め暗誦で傳はつて居たものが、凡そ西暦五世紀頃に書寫されたものであらう。編者は明には分らぬが、當時錫蘭島の大寺に傳はつて居た傳說に基いて書寫したもので、有名な覺音 (Buddhaghosha) であらうといふ說もある。本生說話の正經は阿輸迦王以前に、中印度で出來たもので、偈頌ばかりであつたが、偈頌ばかりでは何の事とも分らぬので、此の時から既に散文の註釋が口傳されてをつたらしい、而して今の巴利本生經は西暦前三世紀頃の傳說で、偈頌は巴利語、散文の部はシンハラ語で書いてあつた古い註釋を巴利語に譯したものであるが、其の古註釋は散逸してしまつたのである。

本生說話はかく年代を異にして、遂に今日の形を取るに至つたことは明になつたが、然らば、錫蘭所傳五百五十(中に同じ話があるので、實は五百四十七篇)十二卷の本生說話相互の中には新舊の別はないかといふ疑問が起る。固より其の中には成立年代について新舊がある。中には最も長くして現今の小說の如きものがあるが、これ等は最新のものである。併し是れ等最新最長のものと

雖も、其の或物は西紀前第三世紀頃の彫刻の題目となつてをるのをみれば、其の新しいものも、相應に古い作であることが分るであらう。況んや五百五十篇の大部分の中に、現はれてをる文化の程度、政治の狀態、社會の有樣の多くは、佛陀以前の時代を現はしてをるといふに至つては其の內容が此れ等諸篇の古作たることを證して餘りありといふべしである。

第十三節　本生說話の發達及び本生說話集の編纂

本生說話が簡單な形から、複雜な形に移り、樸素な話が、修辭や技巧を弄するに至つたのは、現存の漢譯經典のみを繙いても、其の痕跡は明かである。例へば、古い時代の翻譯と、新時代の翻譯とを比較して見ると、說話の筋は同じものでも、其の意味や、修辭に於いて、種々の異同がある。又律の傳統の異同に依つて、說話に繁簡具略の差がある。故に、本生說話は、信仰の變遷及び時處の變遷に從つて、內容と形式との上に、著しい變化を受けてをることは爭はれぬ事實である。

而して、一概にはいへぬが、先づ、阿含等の原始經典や、六度集經のやうな古い時代の譯本に出てをるものは、比較的樸素簡潔て、本行集經や、大莊嚴論のやうな新しい編纂物に出てをるのは、比較的詳細て修飾が多い。而して、律藏に出てをる本生說話の中に、時として、內容が豐富て、詳細てあるものが存して居るのは大いに注意すべき點てあると思ふ。又リス、デヴヰヅ氏は說話の中にあらはるゝ人物や動物の中て、巴利本生經に見えぬ、原始の本生說話ては王侯や聖賢を佛の前生にあて、佛が前生て兎や鹿に生れたといふやうなことは後世に起つた思想てあるといふやうにいつてをるが、漢譯の本生說話も必ずしも巴利本生說話より新しいものばかりでないから、漢譯の方を精查した上てなければ全體の上からは何ともいへぬ譯てある。但、南北兩傳を通じて說話の中に現るゝ人物鳥獸等の中て、最も有德のものを以つて佛陀とすることは爭ふ可からざる事實てある。

本生說話が、非常に古い時代から、行はれて居たことは、是れ等を題材とした浮彫が、古代の窣堵婆に存してをることに依つて、明かなることは既に說いた

通りてあるが、法顯(西曆三九九入竺)惠生及宋雲(同五一八入竺)玄奘(同六二九入竺)等も、印度に於いて本生說話が行はれて居たことを記し、且つ又、當時の印度人は、此れ等の本生說話を、一々事實と信じて居つたと見えて、諸國に本生說話の遺跡があつて、其處に、塔を建てゝ非常に尊敬し、甚だ靈驗あるものとしてをつたことを記してをる。殊に法顯は錫蘭島て、三月に行はれた佛齒供養の時に佛陀が五百生の間、或は鹿となり、或は象となつて、衆生を救はんが爲に、修行し給うた有樣を、人形に作つて、路傍に、飾つてあつたのを見てをる。之れに依れば現今南方に傳はつてをる五百五十篇の本生說話は、西曆五世紀の初には、既に其の形をなしてをつたことが分る。又、義淨(西曆六七一入竺)の記錄(南海寄歸傳)には、戒日王が本生說話を集めたことを記し(後に說く)、又義淨が印度に居た頃、東印度の月官大士といふ人が、毗輸安呾囉(Viśvantara)太子の歌を作つたが、非常に流行して詞人皆舞詠して五天に遍しと記してをる。而して、此の歌は、蘇達拏本生(Sudāna-Jātaka)の改作てある。戒日王は非常に雄武な名君て、印度の太半を統一して、英名を後世に輝かした人てあるが、又、文藝や學術を奬勵したのて

文人學匠一時に輩出して、其の宮廷は常に、學術上の論議、文學上の競技を以て飾られ、王自ら、戲曲「龍の喜び」(Nāgānanda)を作つたと傳へられてをる。「龍の喜び」の事は、義淨が、「又、戒日王、乘雲菩薩(Jīmūta-Vāhana)身を以つて龍に代るの事を取つて、緝して歌詠となす。絃管を奏諧し、人をして樂を作さしめ、之を舞ひ、之を蹈みて、世に流布せしむ」と記してをるのを見ても、非常に流行したことが分るであらう。斯くの如く、印度に於いては、本生說話が、或は信仰として、或は藝術の材料として、珍重され、賞翫されて居たのを見れば、其の傳播の度を察することが出來るのである。

斯くの如く本生說話は漸次に盛んに行はるゝに至つたのであるが、果して然らば、印度に於いては、何時頃、最も盛んに行はれたのであらうか。

本生說話も他の讃頌や神話化した佛傳や、婆羅門敎の方面では多くの說話が出來た時代、即ち馬鳴、龍樹出現の時代以後、戒日王の時代に最も盛んに行はれて居たやうに思はるゝ。先に引用した義淨の著「南海寄歸傳」に詳に印度當時の讃詠、詩歌の隆盛なりしことを記してるが、其の中に、本生說話のことに就い

て次のやうに述べてをる。即ち

印度に於いて讃頌は非常に廣く行はれてをるが、社得迦摩羅(Jātakamālā)も其の類である。社得迦(Jātaka)は本生のことで、摩羅(mālā)は貫の義である、佛陀が前生で難行苦行し給うたことを集めてあつて、一處を貫いてある。若し之れを譯したならば十餘軸にもならう。本生のことを取つて詩讃を作つてあるが、それは美しい言語を並べ、世人に愛誦させて、多くの衆生を救はんが、爲である。戒日王(Harsha-vardhana)は文筆を好み詩讃を好む者に求めて五百夾を得られたが、多くは本生說話であつた。本生說話は讃詠中美を極めたもので、南海の諸國僧俗共に諷誦せざるものはない位である。云々(以上略出す、寄歸傳第四參照)

以つて其の一斑が分るであらう。即ち本生說話も梵文學の黃金時代に其の極盛に達したのである。

翻つて、本生說話が支那に傳來したのは、何時代頃であらうか。之れは譯經史の方から見ねば分らぬ。歷代三寶記に依れば、後漢の時に、竺法蘭が來て、(永平十

年、西暦六七)佛本生經一卷を譯してをる。是れが本生經翻譯の始てある。而して、北齊の武帝の時に、(西暦五六一——五六四)外國の沙門摩訶乘(大乘)が廣州に來て、五百本生經一卷を譯したが、是れ等は散逸してしまつた。而して、廣州は支那の南港で、印度や錫蘭との航海の要衝に當り、法顯も錫蘭から此處に着いた程であるから、摩訶乘の五百本生經は錫蘭あたりに傳はつて居た謂はゆる南傳であることは疑ひを容れぬ。夫れから、吳の時に、康居國から康僧會が來て、(西暦二二一——二八〇)六度集經八卷を譯し、(最も趣味ある本生經)西晉の時、竺法護が生經五卷を譯し、(西暦二五八)宋代に、紹德、慧詢等が菩薩本生鬘論十六卷を譯し、其の他、多くの譯經家の手に依つて百緣經、譬喩經、賢愚經、雜寶藏經等種々の本生經が譯されてをる。又、泥波羅で發見された梵經の中には、多くの本生說話が含まれてゐるので、ミトラ氏は百餘篇を紹介してをる。就中、菩薩譬喩經(Bodhisattva Avadāna.)は三十四の本生說話から出來てゐて、次に說く本生鬘論と內容が略一致するなど、甚だ興味あることである。

是れ等譯經の方面から反照して、多くの本生說話が漸次に編輯されて、本生

說話集が出來たことを推論することが出來る。南方の五百五十篇の成立は、先づ五世紀といふことにして、是れが最も大なる本生說話集である。次は六度集經で九十一篇、(但內數篇は本生說話に非ず)次は生經で五十五篇、次は本生鬘論で十四篇と註とを含んでをる。而して此本生鬘論は聖勇菩薩の造と傳へられてをつて、漢譯のは十四篇であるが梵文のは三十四篇を含んでをる。而して、漢譯は聖勇即ち Āryasūra の集て、Muni Ginadeva (?) の註である。梵文の方は尼波羅で發見されたが、漢譯と異つてをるところが少くない。西藏の佛敎史家ターラナータ(Tāranātha)に依れば、聖勇は迦膩迦王(Kanika, Kanishka?)時代の人で、別名として、馬鳴(Aśvagosha)又は摩呾哩制吒(Matriketa)等の數名を有つてゐたといふことである。而も佛所行讚の作者馬鳴、及び義淨の記した摩呾哩制吒と同人であつたとは思はれない。(註參照)加之、文體からいつても、佛所行讚よりも新しく修飾が多いといふことである。併し此れ等の多くは唯集めたといふだけで、別に一定のプリンシプルはなかつたらしい。然るに、彼の六度集經は其名の示す通りに、內容を菩薩の六度即ち六波羅蜜布施、持戒、忍辱、精進、靜慮、智慧に分類して、

各の德行を說明するやうな本生說話を、夫れ夫れ其の條下に配列してある。是れは頗る注意に價する現象である。而して、短小なる三十四篇の韻文の本生說話を十波羅蜜(六度に方便、願、力、智を加へる)に配列した巴利語の Cariyā-Pitaka といふ本生經が例の五百五十本生經の外にあるといふことであるから、愈興味が出て來るのである。即ち、後世に至つて、本生說話集が出來ると共に、漸次、一定のプリンシプルの下に編纂することが行はれたことを此れ等の事實から知ることが出來る。而して、六波羅蜜の名は、增一阿含經(第十九)に見えてをるのが、先づ古い方であらう(婆娑論第一七八には四波羅蜜あり。十波羅蜜は唯識論に盛に說いてあつて、華嚴經にも處々に見えてをる。以上の事實から、敎理の上に、六波羅蜜、十波羅羅蜜等の概念が成立するに從つて、是れ等を依據とした本生說話集の編纂が出來たので、上例の數書は其の中の產物であらう。又、本生鬘論は聖勇が佛が、過去世に於いて十波羅蜜を修し給うた物語を、古傳の本生說話に修飾を加へて作る積りであつたところが、三十四篇を書いて歿したので、完成に至らなかつたといふことであるから、之も最初の計畫では、十度集經にす

る爲にかいたものであらう。聖勇の著書としては、漢譯の中に本生鬘論の外に、分別業報略經が一部現存してをる。(南條博士目錄參照)

尊者摩哩哩制吒者、即四方宏才頌德、秀冠群英之人也、傳云、昔佛在時、佛因親領二徒衆一入間遊行、時有二鷲鳥一、見二佛相好儼若二金山一、乃於二林內一發二和雅音一如二似讚詠一、佛乃顧二諸弟子一曰、此鳥見レ我歡喜、不レ覺哀鳴、緣二斯福一故、我沒代後、應二得人身一、名二摩哩哩制吒一、爲二稱歎讚我實德一也、(摩哩哩是母、制吒是兒也)其人初依二外道一出家、事二天自在天一、既是所尊、具申二讚詠一、後乃見二所記名一、翻レ心奉レ佛、染レ衣出レ俗、廣興二讚歎一、悔二前非之已往一、邁二勝轍於將來一、自悲不レ遇二大師一、但逢二遺像一、遂抽二盛藻一、仰符二授記一、讚二佛功德一、初造二四百讚一、次造二一百五十讚一、總陳二六度一、明二佛世尊所レ有二勝德一、斯可レ謂二文情婉麗、共二天蓮一而齊レ芳、理致清高、與二地嶽一而爭レ峻、四方造二讚頌一者、莫レ不二說同祖習一、(南海寄歸傳第四)而して、此に一百五十讚といふのは、義淨が翻譯して今に傳はつてをる一百五十讚佛頌一卷のことである。(佛陀と讚頌參照)特に注意すべきは、六度を陳れて佛を讚したことで、本生說話に限らず、六度に配列することは、此の詩人の頃にも、行はれて居たことを示してをる貴重な證據である。

第十四節　本生說話の傳播及び其の影響

本生說話は佛陀の生まれ給うた恒河流域の地に愛誦されたばかりでなく、西北は信度河の流域、南は楞伽(錫蘭)、南洋諸島に到るまで、盛んに行はれたこと

は、佛國記、使西域記、西域記、寄歸傳等に、其の記載があるので、前項に其の一斑を述べた通りである。果して、然らば本生說話は、印度及び其の近島以外に廣く傳播したのではあるまいか。

然り、本生說話は波斯、阿剌比亞に止まらず、西は廣く希臘、羅馬、露西亞等に傳はり、東及び北は、西域、西藏、西比利亞、蒙古、滿洲、支那、朝鮮及び我が國に傳はり、南部は緬甸、暹羅に傳はつたのである。

南方傳の本生說話(五百五十篇の集の完本は、錫蘭、緬甸及び暹羅に存して居る。ホヂソン氏の語るところに依れば、雪山の麓の泥波羅には、三種の本生說話集があつた。即ち闍他伽阿婆陁那(Jātakāvadāna)社得迦摩羅(Jātakamālā)及び摩訶社得迦摩羅(Mahājātakamālā)の三集である。而して、闍他伽阿波陁那は本生說話と譬喩とを共に集めたものか、何れか一つばかりを集めたものか詳でないが、元來印度では、古く、闍他伽と阿波陁那といふ二語は同義語として、用ひられて居たといふことであるから、此の集も本生說話集たることには誤りはあるまい。其の證據には、ミトラ氏が梗概を紹介した菩提薩埵阿波陁那(Bodhisattvāvadāna)

は三十四篇の本生說話集であるのを見ても分る。而して、此の集が、社得迦摩特(漢譯、菩薩本生鬘論)の異本であらうといふことは、既に述べた通りである。摩訶社得迦摩羅は五百五十篇或は五百六十五篇の本生說話を有して居たらしいが、惜しいことには、此の集と、闍他伽阿波陁那とは散逸して、傳はらなかつた。西藏には、百〇一篇の本生說話集があるが、是れは恐らく、摩訶社得迦摩羅から譯出したものであらうといふことである。

支那には、前項に掲げたやうに、多くの本生說話の集錄(生經、賢愚經、譬喻經、百緣經、譬喻經、雜寶藏經、六度集經、本生鬘論等)があるが、單篇の本生說話も少くない。師子月佛本生經、菩薩投身飼餓虎地塔因緣經、九色鹿經、長壽王經、鹿母經、大意經等は其の一例である。加之漢譯經典の中には、阿含、律を始めとして、各種の經典に、數篇乃至數十篇の本生說話があちらこちらに散說してあるので、其の總數は必ず一千篇に上ることであらう。而して、本生說話は佛敎傳來と殆ど同時に傳はつたので、古い經錄の中に、東漢の時、竺法蘭が佛本生經一卷を翻譯したことが記されて居る。(此の本傳はらず)又、北齊の武帝の時に、摩訶乘が廣州に於

いて、五百本生經一卷(闕)を譯したが、此の書の原本は南傳の本生說話集であつたことは疑ひを容れぬ。果して、然らば、支那には、南北兩傳共に翻譯されて居ることになるのである。而して啻に物語として行はれたばかりでなく、美術の材料として用ひられた、即ち阿育王山の塔(鑑眞東征傳參照)吳越王錢弘俶の金塔、龍門の石窟等に、本生說話を浮彫にしてあるのが、今日遺つて居るのである。

西比利亞、蒙古、滿洲、朝鮮等に本生說話が翻譯されたかどうかといふことは未詳であるが、佛敎の傳播と共に、此れ等の地方にも、本生說話の行はれたことは疑ひない。而して、西藏の本生說話は蒙古、西比利亞から、遠くフインランドに入り、スラブ人の間にまでも傳播したのである。

我が國には、漢譯經典の渡來と共に、行はれたばかりでなく、種々の文學的著作に影響し、美術の題材となつたものも少くない。即ち法隆寺玉蟲厨子等に其の畫が描かれて居るし、古今著聞集には、數十篇の本生說話が和文に譯されて、列つてをる、又日蓮の遺文中には、本生說話が縱橫に引用されてをる。夫れから、德川時代の俗文學にも、引用され、上田秋成等の著作にも現れて居る。其の他我

が國の昔噺、お伽話の多くは、本生說話と近緣があるらしい。余も未だ其の邊を研究を遂げぬから、明にはいへぬが、一例を擧ぐれば、龍宮から猿の膽を取りに來る話は、阿含の中にもある鰐魚と猿の話に似て居るし、桃太郎の鬼ヶ島征伐の話の如きは、巴利の太子入海求寶品(Suppāraka-jātaka)梵文社得迦摩羅の第十四(Supāraga-jātaka)西藏の二話(Jinpa-Chenpo の航海、及び Ge-don の航海)及び賢愚經の大施抒海品、善事太子入海品等に類似して居る。但し傳說の研究上、傳播に基く說話の類似と、特發の說話の偶然の類似とは、精細に別たねばならぬので、此の間の分別は古來說話學上の難關とするところで、唯類似ばかりでは結論を附せられぬのである。

以上は東方に向つての本生說話の傳播と其の影響を述べたが、西方に傳はつたものも夫れに劣らず夥しい。即ち西曆五百四五十年頃に、波斯王アヌシルヴン(Khosru Anushirvan, A.D. 531-79)の世に、中世波斯語(Pahlavi)に譯されたが、其の原書は十三卷のものであつたといふことである。夫れから、西利亞語、亞剌比亞語、近世波斯語、希臘語、羅甸語、西班牙語、希伯來語、獨逸語、土耳其語、佛蘭西語等

に譯せられ、「アラビヤン、ナイト」物語を始めとして、西亞細亞、西南亞細亞及び歐洲諸國の俗話、童話に著しい影響を及ぼしたのである。而して、近時、社得迦摩羅も、五百五十篇の南傳本生說話も英譯されたので、其の傳播の度に於いて、其の影響の度に於いて、東方と變らぬ關係を有してをるのである。併し、東傳と西傳とは、其の意義を異にし、東傳の方は、飽くまで、宗教的であるが、西傳の方は、宗教の意味を離れて、單に說話として、傳はつたのである。

飜つて、印度本國に於ける本生說話の影響を一考せねばならぬ。印度には、本生說話に基いて、或は影響を受けて出來た寓話集、物語集が數種ある。即ち、寓話集としては「五卷鈔」(Pañcha-tantra)、「嘉訓」(Hitopadeśa)、物語集としては「吠多羅二十五話」(Vetāla-pañchaviṃśati)「獅子座三十二話」(Siṃhāsana-dvātriṃśikā)がある。尙此れ等の外に、物語集としては「鸚鵡七十話」(Śuka-saptati)がある。

此れ等の說話の形式は、本生說話と同じく、話の筋は散文で出來て居て、其の間々に、格言的の教訓の語が挿入してあるが、是れは韻文で出來て居る。其の中に、集まつて居る多くの說話は皆筋の上に聯絡があつて、一つの話が終れば、續いて、次の話に移るやうになつて居る。彼の「アラビヤン、ナイト」物語の如きは、此の體に倣つたものであらう。今簡單に、此れ等の說話集の內容を紹介しやう。

(一)「五卷鈔」　是れは、一婆羅門の編纂に係るもので、一時は十二卷あつたが、現本は五卷である。卷首の話に依れば、南印度の都、マヒラーロプヤ(Mahilāropya)のアマラシヤクチ(Amaraśakti)王に二人の王子があつたが、愚鈍な怠惰者であつたので、王は此の二王子の教師を求められた。其の時、一人の婆羅門が家庭教師となり、此の書を作つて、二王子を教へたので、半年も立たぬ中に、二王子は道德上のことに於いては、比ぶものがない程に、上達したといふことである。其が現在の形を取つた時代は、明には分らぬが、是れも、本生說話と同樣に、波斯王アヌシルヴンの世に、其の命令に依つて、中世波斯語に翻譯されて居るから、少くとも、西曆五世紀には存在して居たのであらう。現本の卷名は第一卷「朋友の背離」、第二卷「朋友の所得」、第三卷「烏梟合戰」、第四卷「所得の損失」、第五卷「無分別」である。即ち、第一卷は、一疋の豺が、仲の善い牡牛と獅子を喧嘩させて、牡牛が殺されてから、自分が獅子の家令となつて威張る話、第二卷は、龜、鹿、鳥、鼠が冒險をやる話

て、友達の尊いことを說いたもの。第三卷は、舊敵が友達になつても末遂げぬことを烏と梟の爭ひに托して說いたもの。第四卷は、猿と鰐魚が賓分けをやる話て、阿諛の爲に、種々の愚を演ずることを說いたもの。第五卷は無分別な理髮師の種々な失策噺を集めたものである。編者が婆羅門だけに、原の話の中で、婆羅門敎に反對したところは變更又は省略して居るけれど、本生說話の痕跡が歷々と殘つて居る。而して、此の書の原名は何といつたかよくは分からぬが、傳支の譯本は「カリラグとダムナグ」、阿剌比亞の譯本は「カリーラフとヂムナフ」といふから、恐らく原本も梵語で「カラタカとダマナカ」(Karaṭaka and Damanaka)と稱せられたのであらう。此れは、第一卷の話に出る二疋の豺の名である。

(二)「嘉訓」　是れも華氏城の愚鈍な王子須達流婆那(Sudarśana)の爲に集められた寓話集で、四卷ある。著者や年代は分らぬが、極めて新しく、今から凡そ五百年位前に出來たのであらう。「五卷鈔」に基いて出來たもので、第一第二の兩卷は「五卷鈔」と筋も同じく、名も同じいが、唯「五卷鈔」の第一卷の名を「嘉訓」の第二卷の名とし、「五卷鈔」の第二卷の名を「嘉訓」の第一卷の名に取かへて居るばかりで、內容

に於いても、「五卷鈔」の四十三の話の中で、「嘉訓」が土臺にして居る話が二十五もある。而して、主として、「五卷鈔」の前三卷を取り、後二卷からは、四つ取つてをるばかりで、即ち第四卷から一つ、第五卷から三つである。但し、「五卷鈔」に比ぶると、格言的の韻文(偈)が非常に多い。而して、其の中には、佳句が少くない。

(三)「吠多羅二十五話」　吠多羅は死骸を取る鬼である。此の物語は、吠多羅がウヂャイニーの毗訖羅摩王(毗訖羅摩阿迭多即ち戒日王第二世ならん)に話した二十五の話を集めたるものである。其の筋は、王が一人の瑜伽派(祕密派)の隱者の手引きで、樹の枝にかゝつて居る死骸を下して、無言で(神通力を得る爲に呪文を唱ゆることに爲つて居る墓場に持つて來やうとして)肩に掛けてやつて來ると、一疋の吠多羅が現はれて、王に、面白い物語を話しかける。そして、不意に話の中で、王が返答せねばならぬやうなことをいふ。すると、無言の行を爲て居る王も、うつかり口をきいて仕舞ふ。無言の行が破れると、死骸は忽ち見えなくなつて、又元の樹の枝に還る。そこで、王は又夫れを取りに行く。すると、又吠多羅が出て來て、面白い物語をしてきかせる。王は又、うつかり口をきく。斯樣に吠多

羅が三十五遍一つ宛話してきかせた物語を集めものが此の集てある。

(四)「獅子座三十二話」一名を「毗訖羅摩武勇譚」(Vikhrama-charita)といひ、王の玉座が王に話してきかせた三十二の物語を集めたものてある。

(三)と(四)とは、散文より成り、話も割合に短い。而して、共に、佛教王の戒日第二世に關したもので、其の中に收錄された話が、佛教に關係を有つて居ることは疑ひなきところてある。王の功業は永く印度の物語となつて、今日と雖も、月明なる夕べ、椰子樹の蔭に、其の徳を頌し、其の武勳を物語る歌が聞こゆるといふことてある。

次に見逃すことの出來ぬ大作は、迦濕彌羅の詩人、蘇摩提婆(Somadeva)の「話川浩海」(Kathā-sarit-sāgara)てある。蘇摩提婆は西暦十一世紀の人て、一千〇七十年頃に此の大集錄を編した。全篇律文より成り、印度の大叙事詩摩訶浮波羅多の四分の一の長さを有し、十八卷百二十四章に分ち、各章を順次に第一波浪(taranga)第二波浪と呼んて居る。是れは書名に因んて名づけたものてある。其の原本となつたものは、詩星、求那達耶(Guṇādhya)「浮黎鉢伽陀」(Bṛihat-kathā)(大なる物語の意)

て「魔語」て書いてあつた。是れは無智蒙昧の蠻族の話すプラクリット語の一群を指す名。Paiśāchī bhāshā)蘇摩提婆及び其同代の詩人クシェメンドラ(Kshemendra)が各此の本を基いとして物語集を大成した。又「話川浩海」の中には「五卷鈔」の前三卷の話をも改作して容れてあるし、有名な本生說話の尸毗王の話第十六節參照)をも收めて居る。蘇摩提婆は婆羅門てあつたが、此の作の中には、本生說話を基いとしたものや、本生說話其の儘のものが少からず收錄されて居るのてある。

詩人クシェメンドラ(Kshemendra Vyāsadāsa.)は艶麗の筆を以つて古い物語を修飾し、述作も少くない。「摩訶浮波羅多」を抄錄した「波羅多曼沙梨」(Bhārata-Manjarī)を始めとし「阿波陀那却波羅多」(Avadāna-kalparatā)及び前述の「浮黎鉢伽陀」(大物語)を改作した「浮黎鉢伽陀曼沙梨」(Bṛihat-kathā-manjarī)が夫れてある。而して「阿波陀那劫波羅多」は百〇八篇の物語を有し、佛傳に關したものも少くない。(補遺參照)

第十五節　宗教劇としての本生說話

本生說話は斯くの如く、諸國に傳播して、其の童話や物語の基礎となつたことは、前節に述べた通りである。而も、是れは、唯說話其のものとしての傳播であつて、傳はつた國々に於いても、固より其の形を變更し、又は在來の說話と混淆した點はあるが、其の說話といふ形を變ずることはなかつた。然るに、本國の印度及び西藏に於いては、これを劇に仕組(しくん)て戲曲とすることが行はれた。而して、夫れ等の戲曲中、今遺つてをるものは、印度に二種、西藏に三種あるのである。

前にも引いた義淨の「南海寄歸傳」に依れば、戒日王は乘雲菩薩が身を以つて龍に代つた物語を歌詠に作られたといふことであるが、此れは、金翅鳥に食はれむとする龍王を助けて、其の身代りとして、乘雲菩薩が、己れの身を金翅鳥に施さるゝことを綴つたもので、乘雲菩薩とは佛陀の前生の名であるので、此の歌詠は即ち佛陀の本生說話を材料とした戲曲である。而して、現に「龍の喜び」(Nāgānanda)の名を以つて、傳はつてをるのが此の歌詠である。

「龍の喜び」の作者に就いては、義淨の記してをるやうに、古來、戒日王として傳はつてをる。而して、印度には、戒日王といふ名の王は數人あるが、此の王は西曆

六百〇六年に即位した、有名なシーラーディトヤ羅阿迭多(Śīlāditya)王、即ち曷利沙伐彈那(Harshavardhana)のことである。此の王の作と稱せらるゝものに「眞珠の頸飾」(Ratnāvalī)と、上に掲げた「龍の喜び」との二篇の戲曲があるが、而も共に王の宮廷に仕へた詩人の作であらうといふことで、前者は詩人バーナ(Bāṇa)の作、後者は詩人ダヾーヴァカ(Dhāvaka)の作に擬する學者もある。想ふに、王は文學の保護者として、有名であるので、此れ等の詩人が作つて、王に捧げたものが、王の名に依つて、傳へらるゝに至つたものであらう。

「龍の喜び」は本生說話を材料としたものであるだけ、佛敎の「怨みに報ゐるに慈悲を以つてせよ」といふ倫理的色彩を帶びてをるのは、固よりである。而して此の戲曲が王の宮廷に演ぜられたことは、義淨が「絃管を奏諧し、人をして樂を作さしめ、之れを舞ひ、之れを蹈み、代に流布せしむ」と記すを觀ても明かである。從つて、此の本生說話は西曆七世紀頃に廣く行はれて居たので、後に出す龍王本生と同一系統の傳說たることは疑ひを容れぬところである。

「龍の喜び」と共に、印度に行はれた本生戲曲は「毗輸安呾囉(Viśvantara)太子」の歌

てある。是れは東印度の月官大士の作で「蘇達拏本生」(Sudhâna jâtaka)の改作てあることは前に述べた通りて、月官大士は義淨が印度に遊んだ時に生存してゐた人らしい。而して、此の曲は至るところに舞詠されたといふことも又既に紹介した通りてある。

次に西藏に於いては、宗教劇が數種あつて、現に喇嘛教の古派たる紅衣派では、開祖、蓮華上生師(Padmu-sambhava)の誕生日即ち西藏曆の第五月十日に、盛んに演奏し、新派即ち黄衣派では、歳末に行ふことになつてをる。而して、此れ等は一種の假裝劇で、惡魔が死靈を誘惑する處に、聖者が出現して、惡魔を降伏する有樣を仕組んだものてあるが、其の所作や、假面や、鳴物も中々複雜で、西藏の僧俗は、擧つて觀覽するので、固より勸懲の意味が主となつてをる。彼のシュラーギントワイト、(Schlagintweit) ワッデル (Waddel) の兩氏は、各實見して、其の梗概を記してをる。而して、此れ等の劇は食人や人身御供の遺習に基づくもので、役者は僧侶(喇嘛)に限るのてある。然るに、此の外に、專門の俳優(俗人)の演ずる、「聖劇」とも名づく可き一種の宗教劇がある。而して、此の聖劇が即ち本生說話を仕組んだ劇

てある。

本生說話を仕組んだ聖劇は俗人の俳優が演ずるのてあるが、俳優の中には、男優も女優もあつて、一般に、女神の姉妹(A-lche-lhamo)と呼ばれてをる。此の名は嚴密には、劇中に現はるゝ女神及び其の化身に扮する女優に限つて用ゆべきてあるが、而も今ては、男優をも含んだ俳優全體の名として通用してをる。而して、此れ等の俳優は西藏の國內を遍歷して演じて歩くのてあるが、就中、最も演ぜらるゝことの多い季節は冬てある。又、時には、達賴喇嘛(喇嘛教の法王)の御前ても、演ずることがある。

聖劇は通常戸外て演ぜられ、舞臺もなければ、背景も、書割もない。併し、夢幻劇てあるから、夢幻のやうに思はせるだけの背景が必要なので、大概演ずるのは夜て、そして、提灯を點けてやる。其の演じ方は小說を朗讀するやうなもので、戲曲中の地の文を節附けて、物語る者があるそうすると、會話の部分が來る毎に、其の會話をする人物に扮した俳優が出來て、科白を演ずるので、近い例を取れば、我が能樂に類似してをるのてある。而して、會話が切れる其の間々には、道化

を演つて、間の抜けぬやうにしてある。

以上は演劇の方法に就いて、其の大略を述べたのであるが、さて、其の脚本は幾種位あるかといへば、明には、其の數は分つて居ない。而も、最も有名なものは、印度にも行はれてゐた「毗輸安咀囉太子(Viśvantara or Vessantara jātaka)」と「爛光(ナンサ)」(Nan-sa)とであるが、其他、蘇達拏(スダーナ)(Sudhāna jātaka)「雙贊甘普王(スロンツァンカンポ)(Sroṅ Tsan Gampo)の婚禮」、「印度王阿茂俄悉陀(アモガシッダ)(Amoghasiddha)及び「魔女怒婆殘毛(ドーバザンモ)」(Dō-ba-zan-mo)がある。而して、此れ等の中、「毗輸安咀囉太子」と「蘇達拏」とは印度傳來の本生說話を直に脚色したもので、「爛光」は本生說話に基いて作つた西藏產の演劇である。故に、今此の三篇の代表作として、「蘇達拏」について其梗概を紹介しやうと思ふ。

毗輸安咀囉太子歌の作者月官大士の傳は傳はつて居ないが、義淨が「於二東印度有二大士一名二日月官一是大才雄菩薩人也淨到之日其人尙存」(寄歸傳第四)と記してゐる人がそれであらう、著者思ふに、「名日月官」(縮藏致七)の日字は恐らく日字の誤寫で、「名曰二月官一」とあるべきところであらう。果して然らば、月官大士は義淨同代の人たることは疑ひを容れぬことゝなるのである。

戲曲「蘇達拏太子」

蘇達拏本生は佛陀が過去世に、蘇達拏太子と生まれ給うた時に、布施の行を修し、寶車、夫人、愛兒等をも施して顧みなかつた話を綴つたもので、五百五十本生經の中にもあれば、漢譯には、六度集經(第二)、菩薩本緣經(卷上)、及び太子須大拏經等に見えて居るが、夫れ々々幾分づゝか異なつてをる。而して、彫刻としては、サーンチ窣堵婆の北門に存してをるといふことである。今は西藏に行はれてをる同劇の概要を述ぶることに止めてをく。

登場人名

蘇達拏太子(Nor-Zaṅ ch'os-skyoṅ) 假裝せず。

緊那羅(Mondo-Zaṅ mo) 及び二柱の女神。

妖術者 黑帽を被る。

獅師ノンバ(Ṅon-bu) 珠玉を附けたる青き假裝衣を着く。

太子の正妃マチョヤマザヌンテ(Maoho yaṅa gen-te) 右側は白く、左側は黑き假裝衣を着く。

ルクヴチュンメタクケヌ(Luk-zi Ch'un-me tak-gyo) 羊皮の上衣を着け、顏に麵粉を塗り、毛絲の紡車と繫索とを携ふ。

セムバ(Sem-pa)の七兄弟、口を開ける二目の恐しき姿にて、劍を持つ。

先づ此に、一人の「蛇使ひ」があつて姿を變へて、敵國に幸ひを降す龍を捕へやうとする。「蛇使ひ」が呪文を唱ふると、其の呪力で龍は非常に驚かされて、一人の獵師に頼むと、獵師は早速「蛇使ひ」を殺したので、龍は謝禮として、一筋の魔力のこもつた索を獵師に贈つた。獵師は死ぬ時に、其の索を息子の優頭波羅(Utpala or Phalaka)に讓つたが、優頭波羅は或日ハスチナプラ(Hastinapura)のヴアルカラーヤナ(Valkalāyana)の草庵から程遠からぬ森にわけ入つた。折しも、美はしい天の樂師なる緊那羅女が連れ立つて湖に浴しつゝ、天上の歌を歌つてゐたので、獵師は魔力の索を投げかけたが、幸にして、マノハラー(Manohari)と呼ぶ一人の美女を虜にした。そこで、緊那羅女は、世界を切斷することの出來る尊い玉の冠を獵師に與へて、やつとのことで、助けてもらつた。かゝるところに、そこに狩り暮して居たハスチナプラの王子の蘇達拏が現れ、獵師の持つてをる玉の冠を奪つて緊那羅女を王宮に連れ歸り、王妃として、非常に寵愛した。そこで、多くの妃達は嫉妬の焔を焦してゐたが、或日王子の留守を窺うて緊那羅女を亡きも

のにしやうと企てたが、緊那羅女は神通力で、天上に遁れて了つた。そして、天に登るときに、王子に記念として、魔力を籠めた指環を隱者に托けて置いたのである。そこで、王子は後を慕うて往つたが、樣々の難行苦行の後、妃緊那羅女に遇ひ、今度は天女の父の許しを得て、婚姻を結び、再び地上に還つて、長く樂しい月日を送つた。

此の曲に注意すべきは、其の名が普通の蘇達拏本生と同一であるだけで、內容は全く異なつてをることである。元來、蘇達拏本生は前にも述べた通り、蘇達拏太子が布施の行を修し、金銀財寶等あらゆるものを與へ盡して、後には、妻子まで施すに至る慈悲の行ひを綴つたものであるが、此の曲は全く本來の意味を失ひ、本生說話の面影を失つて純然たる物語と化してをる。而して、斯る變化を生じた原因は轉々する間に行はれた說話の變化であらう。但し此に注意すべきは漢譯本生經の中に須羅太子本生(六度集經第八)といふものがある。此の本生の結構は右に述べた西藏の戲曲と非常によく一致してをる。勿論西藏の戲曲は詳細の點が分らぬので、一々比較することは出來ぬが、緊那羅女を捕ふ

る段、後宮、嫉妬の段、指環を遺す段、婚禮の段等は符節を合するが如くである。而も緊那羅女を捕ふる動機、太子之れを妃とする動機等は異つてをる。案ずるに、須羅太子本生も須達拏本生も西藏の戲曲も同一說話の變化したのであつて殊に須羅太子本生と西藏の戲曲とは同一說話であることは疑ひを容れぬところである。

第十六節　本生說話

尸毘王鴿を救ふ（尸毘本生）

むかしむかし閻浮提に大きな國がありまして、其の國の提婆底といふ都に、尸毘王といふ大層惠み深い王樣がありました。王樣のお國は地が肥えて、民は豐かでありましたので、王樣は人が貰ひに來れば、どんな寶でもずんずん施して、少しも惜まれませんでした。其の時、天上に、帝釋天といふ神樣がありましたが、此れをみて、尸毘王は彼樣に、慈善の行ひをなされるので、お崩れになつたら、其の功力で、屹度神樣になられるに違ひない。そうすれば、自分の位が危いどう

も、斯樣してはをられぬと、大層心配を始められましたが、一つの計略を案じ出し、其れを、一人の家來にお授けになりましたので、家來は、神樣の申し附けに從ひまして、直に一羽の鴿になりまして、尸毘王樣の處に飛んで參りました。そこで、神樣は、又直に自分で、一羽の鷹になつて、鴿の後を追かけて行かれました。尸毘王樣は、例の通に、施をしてをられますと、忽ち一羽の鴿が、翔けて參りまして、「王樣々々、私は今鷹から追かけられてをります。どうぞ、御情にお助け下さいまし」と申しまして、王樣の腋の下に隱れて、縮まつて居ます。すると、鷹て、一羽の鷹がやつて參りまして、「王樣、私は大層餓て居りますからどうか、私に鴿を下さいまし」と願ひました。王樣は性が惠み深い御方でありますので、「鴿は自分を頼つて來たのであるから、お前に上げる事は出來ぬ」と仰せられました。そこで、鷹は、「王樣、それは御言葉が違ひます。一羽はがりを助けて、私を助けて下さらぬのですか」と申しました。王樣は鷹のいふとも尤もであると思召して、「夫れでは、外の肉を遣らう」と仰せられますと、鷹は、「外の肉を下さるなら、血の滴れてをる新しい肉でなければ、嫌でございます」と申しました。そこで、王樣は、刀をお取り遊ば

して、御自分の股の肉を割いて居られますと、鷹は「王様、それは、鴿の代りですから、鴿と同じ量目だけ頂きます」と申します。王様は「善し、善し」と頷かれまして、秤をお取りになり、一方の皿に鴿を置き、他の皿に、御自分の股の肉を積んでお量りになりましたが、肉の方が輕くて、中々鴿と同じ重さになりませぬ。そこで、王様は切つては載せ、切つては載せ、なさいましたが、未だ鴿の方が重いので、到頭身體中の肉を皆んな切つてしまをうとなさいました。鷹は、王様が是れ程までの苦しみをなすッても、少しも苦になさらぬのを見まして、非常に感心して、忽ち元の神様になりまして、さて、王様に向つて「貴王は何の爲に斯様な修行をなさるのですか」と尋ねました。王様は「私は死んでから、天上に生れて、帝釋天になりたい爲めに、修行してをるのではありませぬ。唯佛になつて、衆生を救ひたいために、修行して居るのです」と仰せられましたので、神様は、御自分の御考違ひであつたことをお悟りになり、大層吃驚して、王様にお詫びをなさいまして、天上の妙藥を王様のお身に御つけになりましたので、王様の疵は悉皆癒つて、元よりも立派になりました。

此の話が濟んでから、佛陀は其時の尸毘王は自分であつたと仰せられました。（六度集經、大莊嚴論、菩薩本生鬘論を參照して大意を譯出した。）

獼猴園を毀つ（毀園本生）

此の說話は南傳闍陀伽にある頗る興味ある物語である。我が國でも猿は猿智慧といつて惡い方の例に引かれて、嘲笑の材料となつてをるが、印度でも依然猿は猿であるとみえて、此の物語に遺憾なく其の智慧の淺いことを示してをる。

佛陀が或る時、拘婆羅の一村に托鉢し給うた時に、其の村の地主が中食を參らせんと招侍したので、佛陀は其の家に赴いて林苑の中に休み給うた。主人は懇に大衆に應對して、其の所有地を心の儘に散歩せらるゝも苦しからずと申しいでた。大衆はそこらを逍遙したが、一個處全く禿げた處があるので、園丁に向つて、

「他の處には何れも、夥しい木蔭があるのに、其の禿地には樹一本蔭一つないがどうしてそんなに禿げてしまつたのであらう？」

と問うた。園丁は、

「左樣でございます。へい。私共が此の園を作りました折に、一人の村の若者が居りまして、水を灌いて居ましたが、こゝいらの若木を皆んな引拔いて、其の根相應に水をくれました。そこて、若木は萎んて枯果てましたのて、それから御覽の通りに禿げてしまつたのてございます。へい。」

と答へた。

弟子達は佛陀の側に行いて、此の話を致しましたところが、佛陀は、

「こんなに村の若者が園を傷けたのは今に始まつたことてはない。彼れは前生ても同じことをしてをる。」

と仰せられて、次の物語があつた。(序分)

むかし、むかし、婆羅摩達多(ブラマダッタ)といふ王樣がベナレスをお治め遊ばしました頃に、或る時、ベナレスの町に、お祭がありましたが、お祭の知らせの大鼓がどんどんと鳴り響くと、町の者は誰れもかれも水の流れ出すやうに遊びに出てゝ行きました。

さて、其の頃、多くの猿の群(なかま)が王樣の大きなお庭に棲んて居りましたが、其の日、園丁は、

「どつこい、今日は町はお祭だ。どれ猿殿をだしに使つて、お庭の水かけをやらせて、俺(わし)は町に出て、皆んなと樂しまうかな。」

と心に考へまして、猿王の所に行つて、猿の王さんと他(ほか)の猿共を好い加減におだてゝ、お庭の猿小家から、花が咲いて、實が結(な)つて、甘(うま)さうな芽條(めばえ)のある路をみせて喜ばせてをいて、お終(しまい)にかういひました。

「俺(わし)は町に祭りがあるので、いつて遊びたい。猿さん。猿さん。俺(わし)が居らぬ中は、どうか、若木に水をやつてくれましねえか。」

「いゝとも、いゝとも、請合つた。」

と猿共は申しました。そこて、園丁は、大邊喜んて。

「それじや、お頼みします、用心してやつてくさつしやい。」

といつて、水かけ道具を渡して、出て往(ゆ)きました。

猿共は早速ポンプに水を入れて、勇ましく若木に水をかけ始めましたが、さ

猿の王様は分別顔に、他の猿共に向つて、

「御互に水を無駄使せぬ様に用心せにやならぬ。水をかくる時は、先づ若木を引抽いて根の大さを調べるが好い。根の大きい奴には澤山水をやつて、小さい奴には少しやれ。此の水がなくなれば、又汲みに行くのに困るから、皆んな水を無駄使してはならぬぞ。」

と吩附ますと、外の猿共は皆んな。

「そうだ。そうだ。」

と賛成しまして、王様の命令通りにいたしました。

其の時一人の賢人がお出になりまして、猿の遣り方を御覽になり、

「なぜ、木を一本一本引き抽いて、根の大さを見て、水をかけてをるのですか？」

と猿にお尋ねなさいました。ところが、猿共は、

「でも、王様のお吩附ですから、」

と答へました。

賢人は此の答をお聞きなさいまして、善い事をしやうとしても智慧がなくて

ては害をなすばかりだと、大にお感じなさいまして、歌を御うたいなさいました。

努力を飾る成功は智慧の仕業ぞ
愚人等は智慧がないから困窮する
あれみよ猿が木を枯らす

賢人は猿の王様をお責めなさいまして、仲間と一緒に餘處へ御出しになつてしまひました。(本分)

此の話が濟んでから佛陀は「其の時樹を引き抽いだ猿王は今の若者で、其の時の賢人は我れであつた。」と宣うた。(後分)(南傳 Āvīmudgsaka Jātaka に據る。高楠博士の巴利語佛教文學講本 P. 5—54 に原文あり)

智者賊に遭ふ(智雲本生)

此の説話も南方所傳であるが、全篇甚だ長く、局面も可なり錯綜してゐて興味津々たるものである。恐らく古傳説の上乘なるものであらう。此の説話は英詩人チョーサ作の「バードナル、テール」と似てをるので、兩者の一致を指摘した最初の人はリチャード、モーリス博士で一八八一年五月の「コンテンポラリー

レビウ」に研究の結果を發表したが、外にも獨立に同じ一致を指摘した人があ
る。即ちフランシス・タウニー兩氏の如きは是れである。讀者諸君が之れをチョ
ーサーの作に對照してみらるゝのも亦一興であらう。

佛陀がかつて祇園精舍に在した時に一人の比丘があつた。佛陀は比丘に向
つて、

「比丘よ汝が强情に振舞ふのは今が初めてではない。前生にもそんなことが
あつた。汝は賢人や善人の敎へを用ひないで、遂に利刀を以つて二つに斬ら
れて、大道に投げ棄てられた。そして、他の一千人が生命を落したのも亦汝の
爲であつた。」

と仰せられた。そして、次の說話にうつる。（序分）

むかし、むかし、ブラフマダッタといふ王樣がベナレスをお治め遊ばして居
ました時に、ある村に、一人の婆羅門が棲んで居りましたが、ヴァダブハと申
す咒文を知つて居りました。此の咒文は世に並びない寶であるといふ評判で
した。なぜかといふに、お星樣がある定つた行き會ひをなさいます時に、此の咒

文を何遍も唱へて空を一心に見詰めて居りますと、天から眞直に金、銀、眞珠、珊
瑚、猫眼石だの紅寶石、金剛石などの七つの寶が、雨のやうに降つて參りますの
ですから、そういふ評判であります。

其の頃、菩薩（佛のこと）は此の婆羅門のお弟子でありましたが、或日少し用事
がありましたので、婆羅門は菩薩と一緒に、村を離れて、セチといふ村に參りま
した。

さて其の邊の路側の森の中に、五百人の盜賊が棲んで居りました。此の盜賊
共は「急ぎの使者」といふ名で知られて居りますが、それはどういう譯かといふ
と、此に二人の人を捕へますと、其の中の一人を「急ぎの使者」として償金を求め
にやるのです。例へば、お母さんと娘を捕へますと、お母さんをお金取りにやり
ますし、兄弟を二人捕へますと、兄さんをやりますし、先生と弟子を捕へますと、
弟子を放してお金を取りにやるのです。それで、「急ぎの使者」といふ名を附けら
れて居りますのでした。さて婆羅門と菩薩とやつて參りますと、此の盜賊共が
路を塞ぎましたので、二人は到頭捕まつてしまひました。そこで、盜賊共は先生

の婆羅門を留めてをいて、菩薩を放してお金取りにやりました。其の時、菩薩は先生に向つて御辭義をしまして、

「私は一日か二日の中には、屹度還つて參りますから、御心配には及びません唯呉々も申し上げますが、「呪文をお慎みなさらねばなりません。今日は、恰度お星樣がお行きあひになりますから、寶が降る日でございます。併し、苦しまぎれに呪文をお唱へなさいまして、寶をお降しなさいましてはいけません。もし寶をお降しなさいますと、きつと先生と盗賊の仲間に難儀な事が起つて參りますから。」

と注意しておきまして、償金を求めに參りました。

日暮になりますと、盗賊共は先生の婆羅門を縛つて足械をかけました。恰度其の時、まん圓いお月樣が東の空にお昇りなさいましたが、婆羅門は天體を考へて今夜は、お星樣の大邊なお出會ひがあることを知りましたので、窃に心の中に考へました。

「呪文を二三度唱ゆると、寶の雨を降らして盗賊共に償金を拂つて、自由の身

となることが出來るのに、自分は何故此樣な苦みを受けねばならぬだらう？」

馬鹿らしいと思ひましたので、盗賊共の方に向つて、大聲、

「泥坊さん、泥坊さん、どうして俺を縛るのかね？」

と問きますと、盗賊共は

「先生、お金が欲しいんです。」

と申します。そこで婆羅門は

「ハハアそうかね。つまりお金が欲しんだね、よし、よし、それでは、急いで俺を解いて、頭を洗つて、新しい衣物を着せて、花を飾つて、花を俺にかぶせて、俺のするやうにさせておくれ。」

と曰ひましたので、盗賊共は其の言ふ通りにいたしました。

婆羅門はお星樣のお出會を注意して、繰返し々々々呪文を唱へ、空を見詰めてをりますと、降るわ、降るわ！寶が雨のやうに降つて參りました！　盗賊共は寶をみんな掬い上げて獲物を引つたくつて、外套に包んで、梱を作りました。

そして盜賊共は、なほも放しませんで、婆羅門を連れて進んで參りましたので婆羅門先生は、仕樣事なしに、後の方から附いて行きました。さて運といふものはどうなるか分らぬもので、此の盜賊の仲間が又他の五百人の盜賊の仲間に捕まりました。そこで第一の盜賊共は第二の盜賊共に、

「どうして俺等を捕まへるのかね？」

と問きますと、第二の盜賊共は

「獲物が欲しいんだよ。」

と答へました。第一の盜賊共は

「これかい？それぢや、婆羅門先生を捕まへた方が好いや。獲物ァお前先生の一睨で、雨のやうに降つて來らァ、此の獲物でも左樣でさァ。」

と申しましたので、第二の盜賊共は、第一の盜賊共を放して、婆羅門を捕へました。そして叫びました。

「先生！　俺等にも寶ァくさつせえ！」

婆羅門は、

「それはお易い御用だが、今度寶を降らせるには、一年立たぬと空模樣が都合よくならぬから、夫れ迄、辛抱して下されば、いくらでも降らしてあげます。」

と答へますと、盜賊共は大邊怒つて、

「此のかたり奴！　彼等にァ即座に降らしてやつて、俺等にァ一年待ては聞えねえ。」

といつて、鋭い刀を拔いて、婆羅門を眞二つにし、路の眞中に打棄てゝ、前の盜賊共の後を追かけ、亂れ戰をして皆殺して終つて、獲物を奪つてしまいました。ところが、諍論が起つて、盜賊共は二つに分れ、二百五十人は殺されてしまひましたが、又々喧嘩が持上つて皆んな殺されて、到頭おしまいには二人になりました。

二人の者は、寶を擔で行つて、夫れを村近くの藪の中に隱しましたが、一人は夕飯にする爲に、お米を取りに村に行きましたので、一人は拔刀を有つて其處に座つて番して居りました。

「慾張は沒落の本だ！」

と寶の側に座つてゐた彼れは考へました（此の語は原文には男性の單數代名詞になつてゐる。此の一、二行は意義曖昧であるが、多分著者の警告であらうといふ事である）

「仲間が還つて來りア半分は取られる。叱ッ。片附けてしまへ。」

といつて、拔刀を提げて、仲間の還りを待つて居りました。村に行つた盜賊も、亦獲物は二つに分けねばならぬのだらうかと考へましたが、

「お米に毒を入れてをけ。そして奴に與れ。やア譯なく往生する。そこで寶は全取だ！」

と獨りで頷いて、お米が沸騰た時に、自分は先に食べてしまひまして、殘部に毒を入れて持ち還りましたが、番してをる盜賊の前に參りまして、夫れを卸すか卸さぬ中に、待ち構へて居た盜賊は、見るが早いか、すらりと拔身で二つに斬つてしまひまして、死骸を離れた處に隱してから、御飯を食べましたが、毒が入つて居りますので、忽ち死んでしまひました。「此の通りに、寶の爲に婆羅門始め千人の盜賊共は皆んな生命を墜してしまいました。

さて、一日二日いたしますと、菩薩が償金を持つて還つて參りましたが元の

處に先生がみえねばかりでなく、寶がそこらに散らばつて居りますので、大方、先生が自分の諫を用ひないで、寶を降らして、其の爲に、皆死んだに相違ないと思ひまして、段々參りますと、それみたことか、先生の死骸が二つに斬られて横つて居りましたので、

「何たる事だ！　諫を用ひずに亡くなられたのだなア！」と叫んで枝を集めて薪とし、野の花を捧げて茶毘（火葬）を行ひました。そして、もつと進みますと、五百人の「急ぎの使者」が斃れて居りますし、次に四百四十八人が死んで居ますので、九百九十八人は殺されたなア。さては殘りの二人は何處に行つたであらうかと考へ、なほ進んで行きますと、藪があつて、寶の梱が累つて一人の盜賊が團飯を傍に轉して死んでをりますので、悉皆模樣が分つて、今一人はと探しますと、人知れぬ處に棄てあるのが分りました。そこで、菩薩は深い考に沈みました。

「あゝ斯して私の諫を用ひないで、先生は死んでおしまひなさるし、先生の强情の爲に、千人の者も首を失ふやうになつた。誤つた手斷て望を遂げやうと

して沒落してしまつた。先生のやうな御方さへ、其の報は逃れられぬものかなア。」

といつて、小詩を歌いました。

方向を誤れる努力は沒落に導きて目的を遂げず。
賊はヴァダブブハを殺し、互に相殺しぬ。

そして方向を誤りました努力は先生の樣に我身を殺し、他の人迄も生命を失はするといふことを、此の小詩に於いて說きましたので、樹の神樣が之れを聞いて聲高くお讃めなさいました。菩薩は寶を家に運んで生命の限り行を勉め、慈善家となりましたが、死んでからは天に昇りました。(本分)

佛陀は更に言葉をついて

「比丘よ。彼の比丘の强情なのは今に始つたことではない。此にいふヴァダブブハ婆羅門は彼れの前生であつて、其の時の彼れの弟子は我れであつた。」

と宣うた(南傳 vedabbha-ru-ma に據る。)

九色の鹿(九色鹿本生)

むかし、むかし、九色の鹿が居りました。其の毛は九色で、角は白く雪のやうでしたが、いつも、いつも、恒河の畔に水草を食べて棲んで居りました。そして一羽の烏と、大邊、親善でありました。

或る日のこと、一人の男が浮きつ沈みつして、河の中を流れて來ましたが、やつと、樹の枝にしがみ著いて、「山の神樣！樹の神樣！天の神樣！水の神樣(龍)！助けて下さーい！」と泣き叫びました。

溺るゝ人の聲がしましたので、鹿は可愛相に思ひ、ざぶざぶざぶと、泳いで行きまして、

「確りなさい。大丈夫です。私の角をおつかみなさい。負つて行きませう」

と曰つて、やつとこさと岸に上りましたが、何しろ、大鹿でも、大の男を負つた事ですから、全然疲れてしまひました。

助けられた男は、大邊喜びまして、鹿の周を三邊回つて、さてお辭儀をして、

「鹿さん、鹿さん、あなたの御蔭で、私は危い生命を助かりましたから御恩報じに、貴殿の僕として下さいまし。そうすると、私が毎日毎日おいしい水草を採

つて來て差上げます。」

と申しますと、鹿は頭を振つて、

「いや、夫れには及びません。是れてお別れ申しませう。もし難有く思つて下さるならば、どうか、私が此處に棲んて居ることは誰にも言はずに居て下さい夫れが分りますと、私の毛皮と角の欲しさに、きつと、人が殺しに來ますから。」

と申しましたので、助けられた男は、

「はい。鹿さん、請合ました。決して人に話すやうなことは致しません。」

と誓つて、還つて行きました。

其の頃、此の國の王樣の夫人が夢に九色の鹿を御覽になりましたが、其の毛は九色て、角は白く雪のやうてした。そこて、病氣だといつて起きずに臥つてられましたが、王樣は大邊御心配なすつて、御訪になりました。夫人は、

「私昨夜大邊な鹿の夢をみました。其の毛は九色て、角は白く雪のやうてございましたあんな毛皮て敷物を作り、あんな角て拂子の柄を製へましたならば、どんなによからうかと思ひます。王樣！お願ひてございますどうか、あゝ

いふ鹿を獲て下さいまし。若し、お手に入りませねば、私は活きては居りません。死んてしまいます。」

と申されますので、王樣は

「そんなにせかずにまあお起きなさい。寡人も一國の王ぢや、何ても叶へてあげる。」

と仰つて、早速、

「九色の鹿を獲て獻上するものには、國の半分を與へてやり、其の上に、銀の粟を入れた金の鉢と、金の粟を入れた銀の鉢を褒美に遣はす。」

といふお布告を國中にお出しになりました。

此のお觸れが出ますと、鹿に、助けられた男が、そろそろ惡い心を起して參りました。

「なァに高が一疋の鹿だ。活かさうと殺さうと關つたことはない。惡運が向いて來た！」

といつて、政廳に參りまして、

「私は九色の鹿の棲家を知つてをります。」

と申しました。そこて、役人は速に、此の男を連れて王樣の宮殿に參りました。

「申し上げます。王樣！王樣！此の男が九色の鹿を知つてをると白します。」

と言上しますと、王樣は大變御喜びなさいまして、此の男にお向ひ遊ばして、

「お前が九色の鹿を知つて居ると白すか？善矣！九色の鹿を獲て參れば、國の半分を遣す。確く誓つたぞ。」

との仰せ。男は恐る恐る、

「王樣！私が屹度獲て獻上致します。」

と白しますと、不思議や忽ち顏一杯に癩瘡が出來ました。男は言葉をつぎまして、

「王樣！鹿は畜生てはございますが、大變な神通力を有つて居りますから、澤山の兵隊をお出しにならねば、獲ますまい。」

と申し上げましたので、王樣は澤山の兵隊を引連れて、恒河のほとりに進軍なさいました。

其の時、鹿の友達の烏は、樹の枝に棲つて居りましたが、大變な兵隊が見えますので、吃驚して鹿を獲りに來るのてはあるまいかと考へましたので、鹿の處に參りまして、「おい、鹿さん！起きた。起きた。たた大變だ、大變な事になつてしまつた。王樣がお前を獲りに來たんだよ。」

と呼起しましたが、鹿はぐつすり寢込んて、醒めませんので、烏は氣が氣てなく枝から下りて、鹿の頭に止り、耳を喙きまして、

「大變だ！大變だ！それもう兵隊が見える。それ其處に來た！」

と騷ぎ立てましたので、鹿はやつと眼を醒してきよろきよろ、あたりを見回しました。

最早此の時は王樣の兵隊が鹿の家をぐるぐると取卷いて居りましたので、逃げやうと思つても逃げる事は出來ません。鹿ももう叶はぬと思ひましたので、のこのこ王樣の前に出て參りました。すると、鹿が見えましたからたまりません。矢庭に一人の射手が弓を絞つて矢を放たうとしました。鹿は王樣の方を向きまして、

「暫く御助け下さいまし、私は王様の前に參つて、少し白し上げたい事がございます。」

と白しますから、王様も

「射るのは暫く見合せろ、大變な鹿ぢや、事によると形は鹿でも、本統は神樣かも知れん。」

と仰せられましたので、皆射ることは見合せました。

鹿は王樣のお側に參りまして、

「暫く生命をお許し下さいまし。私は大層御國のお爲になつて居りますから。」

と白しました。王樣は、不審に思召して、

「それは又どういふ譯で……」

と御尋になりますと、鹿は、

「私はいつか、王樣の御家來の一人をお助け申したことがございます。」

と白しまして、更に忝しく跪きまして、

「誰か私が此處に居ると申し上げたものがございませう?!」

とお尋ね申しますと、王樣はお車の傍に畏つて居ります癩面人の方に向つて、

「これだ、此の男が申した。」

とお指しになります。鹿は其れを見ます、といつか助けてやつた男なので、悲しくなつて、泛然と涙を流し、

「王樣！　此の人は淵に溺れて、浮きつ沈みつして居ましたが、やつと樹の枝にしがみ著いて、『山の神樣！　樹の神樣！　天の神樣！　水の神樣！　助けて下さ――い！』と呼んで居りましたので、私が生命がけで河にはいり、負つて助けて上げました。其の時私の棲家を決して人には言はぬと堅く約束しましたが、どうも人間といふ者はあてにはなりません。此んなことなら、浮木でも助けて置いた方がましてございました。」

と申しましたので、王樣は家來の惡いことを責められて、大邊恥しいことにお考へになり、其の男の方を向いて、

「お前は大恩を受けながら、どうして又鹿を殺さうと思ひ立つたのか？　不都合な奴だ。」

とお叱りになり、今度は更に國中に

「これから、鹿を殺す者は、一家親族皆お仕置にするから、左樣心得ろ。」

と御觸れになりましたので、夫れから百匹千匹の鹿共がお國に寄つて參りま

して、田畑を荒さず、水草を食べて、樂しく遊ぶやうになり、雨や風も時々に順よ

く降り、流行病もなく、穀に穂がさいて、王樣の御代は段々榮へましたとさ。めで

たし、めでたし。

佛陀が此の話を說き給うた時、更に

「其の時の九色の鹿は、我れで、烏は阿難、國王は悅頭檀、夫人は先陀利、溺人は調

達であつた。調達と自分とは、宿々敵である。彼れが害心を抱く事は今度が始

めてはない。我れは善意を以つて彼れに向うが、彼れの害心は止まない。」

と仰せられた。(九色鹿經)

此篇の如きは尤もよく古傳說の面影を傳てをる。銀粟を金鉢に、金粟を銀鉢

に盛る、といふ修辭法の如き、鹿が王の所にて、溺人の有樣を說くに、全然前に用

ひた詞を長々と何度も、繰返すが如き、幼稚なる修辭法は文學の初期によく見

るところで、我が古事記や祝詞に其の例が少くない。此の篇は提婆達多(調達)が

佛陀に反抗した出來事を說明する爲に、古傳の民間傳說をかつて來て、佛陀の

前生の事とし、一篇の本生說話とした痕跡が尤も明に殘てをる佳篇である。

野狐獸王となる(野干本生)

むかし、むかし、或るところに、一人の摩納が居りましたが、毎日毎日山窟の中

で、軍略の書を讀んで居ましたが、一匹の狐がいつもいつも左右に參りま

して、一心に書物を聽いて居りましたが、少しは解りましたので、狐は大相得意

になり、

「此樣な貴い書が解るから、大丈夫、獸の王樣になれる?!」

と考へまして、段々參りますと、一匹の痩こけたひよろひよろ狐に出逢ひまし

たので、直に咬殺さうとしましたが、ひよろひよろ狐は

「どういふ譯で、殺すのですか?」

と問ねましたが、狐は大相威張つて、

「殺すに別に不思議はあるまい。俺は獸の王樣だ。夫れにお前は獸でありなが

ら王様に從はぬてはないか？無禮者奴！」

と怒鳴りました。そこで、ひよろひよろ狐は平伏しまして

「是れはどうもお見それ申しました。大王様！　生命だけは萬望御助け下さいまし。今日からきつと陪從を致します。」

と恐る恐る白しますので、自分免許の王様狐ぐつと反身になつて、

「ーン恐れ入つたか、善矣！それでは附いて來い。今度迄は許して遣はす。」

と言つて、ひよろ狐をお伴につれて、參りますと、又一匹の狐に出遭ひましたので、之れをも、同様に脅して家來に附け、段々多くの狐を從へて、到頭狐の王様になりました。

王様狐は大得意で、數百の家來の狐を引率れて、今度は象を征伐に出かけました。如何に大きい象でも多勢に無勢で、狐共は象を一匹宛段々家來に附けて行きますので敵ひません。後には象の仲間も悉皆り王様狐の吩附を聞くやうになりました。

王様狐は狐と象の數千の家來を引率れて、虎を征伐に出かけましたが之も

多勢で脅し附けて、片端から家來にしてしまひますと、今度は增長して、獅子征伐に出かけ、到頭本統に獸の王様になり濟しました。

王様狐は愈々大得意で、

「俺も獸の王様になつたからは、妃は獸じゃ始まらない。一番人間を貰てやれ！」

といふ意氣込で、白象に乘りまして、狐だの、象だの、虎だの、獅子だの、數多の獸を率ゐて、迦夷城を十重二十重と取り圍みました。

迦夷城の王様は之れを御覽なさいまして、大相吃驚遊ばし、どういふ事か、譯が分らぬので、勅使をお遣しになつて、王様狐に、

「お前は澤山の獸を引率れて當城を取圍んだが、一體どういふ譯だ？」

と御尋ねになりますと、王様狐は

「見らるる通り、俺は獸の王様だが、お姫様を妃に貰いたい。柔順しく渡せば善矣！　さもなくば、ちつぽけな此の城位唯の一踏潰だぞ？！」

と答へましたので、勅使は吃驚して早速お城に引返して、斯く斯くの次第でございますと王様に啓上げますと。王様はさあ大變だといふので、直に大臣、家來

をお呼び集めになりまして、軍評定を御開きになります。

大廣間には何千人といふ家來が集りましたが、皆んな弱蟲許りて、

「味方の頼みにして居るのは馬と象てござる。ところが敵の方には澤山の獅子が居る。馬や象は獅子の一吼に縮み上つてしまうのに、どうして戰が出來ませう、御痛はしいが、どうもお姫樣を一方犧牲に立てねば、國家の滅亡、御家の退散は眼の前てござらう。」

といふ評議。王樣も頸を捻つてお居てなさいますと、一人の智慧の多い大臣が進み出まして、王樣に向ひ。

「臣謹んて廣く古今を觀渡しまするに、開闢以來、未だ一度も一國のお姫樣が獸の妃におなり遊した類例を聞きませぬ。此處は御分別どころてございます。臣弱味と雖も、必ず彼の狐奴を取ひしぎまして、獸の群を追拂つて御覽に入れます。」

と白しますと、王樣も大相お喜びて、

「善く白した。さて、其の軍略は？」

との御尋ね、大臣は一禮して、

「夫れは別儀てもございません。先づ軍使を敵陣に御遣しになりまして、合戰の期日を約束致させ、其の節、狐にどうか獅子を眞先に戰はせて、獅子を吼えさせることは後にして呉れるやうに御頼みになれば宜しうございます。そうしまするとと、彼れ奴は、必ず王樣の軍勢は獅子の吼ゆるのを恐がるに相違ないと考へまして、屹度、獅子を最先に吼えさせませう。若し左樣致しました ら占めたものてございます。」

と白しました。王樣は早速其の通りに御取計りになりました。

愈合戰の日に相なりますと、王樣は城下に御觸れを御出しになりまして、「さあ戰爭が始まつたといへば、すぐに耳を塞げ」といふ御吩附があり、更に念の爲に再び軍使を敵陣にお遣しになりまして、

「今日は愈合戰な致す。就ては、先日軍使を以て申遣した一條は、宜敷頼み入る。」

といふ挨拶をさせて置いて、愈兵をお繰出しになり、今や兩軍の鋒が交はらうとする時、狐の王樣はまんまと敵の軍略の裏をかいた積りて、數千の獅子を一

齊に吼えさせましたが何がさて憶病な狐のことですから、敵を驚かすは愚か大將軍第一番に參つてしまひ、氣絶して白象の上から、眞逆樣に轉げ落ち、心臓が七つに裂けて死んでしまひました。之れを見たる部下の狐共や、象共や、虎共や、獅子共は皆んな思ひ思ひに退散して、王樣の御代は長く榮えましたとさ。めでたしめでたし。

この說話は調達が敎團の中に分派を作らうと圖つて徒黨を集めた時に、佛陀が弟子達に話し給うたもので、話が終つてから、佛陀は更に語をついで、

「其の時の迦夷王は我れで、大臣は舍利弗で、狐王は調達であつた。調達が仲間を集めることは今度が初めてではない。」

と仰せられた。(五分律第三)

常闇(燈光明王本生)

是の本生說話は佛陀がかつて燈光明王となられたときの物語である。本生說話の中には、趣向の面白いのや、着想の奇拔なのや、各一方に、其の美を恣にして居るが、本篇の如きは、又た類稀れなる崇高凄美の作で、大暴風雨の常闇の中

を燈光明王が「白氈縛臂、以油灌之」奮然として臂の炬火を擎げ、五百の群衆を導くこと七日七夜といふに至つては、其の凄愴の美に驚かぬ者はあるまい。試に天地黝冥、六合默する常闇を劈いて、倏ち見る。風丰雄偉の一巨漢、炎々たる一道の大炬を揮つて五百の商人を率ゐ、風雨を驅り雷霆を叱して、猛進するところを想像したならば、幽鬼叫び、魚龍哭する活舞臺が、眼前に髣髴として現出し來るを禁じ得まい。實に本篇の如きは本生說話中の傑作である。

爾時此の世界が轉じて月雷と名けられたが、是れも亦穢れた五濁の世で、我れ(佛)は爾時轉輪聖王となり、閻浮提に王として、燈光明と呼ばれて居た。偶厭世の念が起つたので、愛するところの五百子に領土を頒ち與へ、身は求道の爲に南海の邊、薝頭摩樹の大森林に退いた。かくて、森の中で、靜寂に、道を思惟し、諸の果實を食べて修行して居たが、終に五神通を得るに至つた。

善男子よ。其の時、閻浮提に五百の商人があり、大海原に入つて、數多の寶を採らうと思ひ立つた。其の商主は滿月と呼ぶが、先の世に慈善の行が多かつたので鉅萬の富を獲、此の度は又希望通りに多くの寶を採つて、還らうとした。之れ